2023

Vol.111

教育研究 岩手

KYOIKU KENKYU IWATE

特集　夢の実現に向けて自ら学び行動する岩手の子ども
－指導と評価の一体化で育成する確かな学力－

●論説

国立教育政策研究所　研究企画開発部教育研究情報推進室
総括研究官　**千々布　敏弥**

●提言

コミューン株式会社
代表取締役ＣＥＯ　**高田　優哉**

教育随想

一般社団法人アイズ
ＳＨＩＮＹＡ ＳＣＨＯＯＬ Ｉ
バスケットボールコーチ　**千葉　慎也**

●解説

北上市立笠松小学校
校長　**佐々木　善成**

住田町立世田米中学校
校長　**遠山　秀樹**

岩手県立葛巻高等学校
校長　**菅　常久**

岩手県立盛岡視覚支援校
校長　**近藤　健一**

The General Education Center of Iwate
岩手県立総合教育センター

カメラレポート

学区の概況

学区は、県の最南端に位置している。市町村合併前の旧花泉町の全域が学区であり、全校児童の約半数がバス通学である。地域は農村地域であり３世帯家庭の割合もまだ高いが、保護者が一関市や花泉地域に所在する企業に勤務する共稼ぎ家庭が多い。２つある放課後児童クラブを全校の約４分の１の児童が利用している。地域は、歴史的遺産・史跡・先人・風土や産業等の教材となる環境に恵まれ、教育的関心も高く学校に協力的である。

学校の沿革

明治５年の学制発布から間もなく、花泉地域の各村に寺社や民家を間借りして小学校が開校された。その後、昭和30年からの花泉町立小学校の時代、平成17年からの一関市立小学校の時代と、140有余年にわたり統合・合併、学制の変遷による校名の変更等を経験しながら、それぞれの地域で学校教育が営まれてきた。平成28年､児童数の減少･学校教育規模の適正化等の観点から「花泉地区統合学校づくり推進委員会」が組織され、行政と地域代表者による検討が重ねられた。令和５年３月をもって、永井･涌津･油島･花泉・老松・金沢の６小学校が閉校し、統合・新設された花泉小学校として令和５年４月１日に開校した。

メモリアルコーナー

プール

和算コーナー

メディアセンター

体育館

中央階段

岩手県で活動する思い

一般社団法人アイズ【SHINYA　SCHOOL　I】
バスケットボールコーチ　　**千葉　慎也**

私がプロバスケットボール選手になるきっかけは2011年に起きた『東日本大震災』でした。その当時私は大塚商会という会社に勤めており関東にいましたが、ニュースから流れてきたのは自分が育った岩手県。辛く悲しい出来事を、ニュースを通して見ることしか出来ませんでした。その同じ年に岩手ではバスケットボールチーム岩手ビッグブルズが発足しました。長年続けたバスケットボールを通して岩手に自分が出来ることはないかと考え、私はプロバスケットボール選手になる挑戦を決意しました。

入団を果たしてからは「バスケットボールを通して岩手に何が出来るか」を常に考え続けてきました。チーム発足後、球団としてどのような活動をしていけばいいか模索していた時、チームに1通の手紙が届きました。震災で被災した地域の子どもからバスケット教室に来てほしいとの内容でした。早速チーム全員で伺いました。バスケットボールを通して触れ合うなかで、子どもたちの笑顔を見た時に、震災の年に発足した岩手ビッグブルズというチームが復興への一つの希望として「夢」を見せることのできる活動をしていかなければならないと強く感じました。その後も様々なイベントで多くの人たちの笑顔に触れるたびに自分の存在意義を感じる事ができ、そのすべてが自分の活力、エネルギーとなりました。

それから、岩手の子どもたちのために自分ができることも模索しはじめました。私自身、学生の頃から教育についても関心があり、大学卒業と同時に教員免許も取得していました。そこで、プロ選手に転身後2年目から、選手としての活動と並行して、球団が子どもを対象に行っているバスケットボールスクールのコーチに就任しました。これから自分ができることは、選手としての活動を通して得たことを、バスケットボールの指導を通して子どもたちに伝えることだろうと、考えるようになりました。

私は岩手ビッグブルズに在籍した11年間で、素晴らしいコーチ陣、スタッフ陣、選手たちと出会う事ができました。未熟だった自分がここまでバスケットボールに向き合う事ができたのはプロフェッショナルである素晴らしい人たちとの出会いがあったからです。あるシーズンに、チーム最年長の選手が誰よりも[hard work]し、チーム練習以外にも自分の課題と向き合い黙々とトレーニングに励む姿を見ました。そのシーズンでは、「時間は平等に与えられるものだが過ごし方で人の『成長』が変わる」ということ、「『成長』の方法は何歳になっても変わらない」ということを学ぶことが出来ました。その考えは今でも自分との向き合い方の土台になっています。

私自身プロ生活において頑張ったことが全て報われた訳ではなく、報われなかったことの方が多かったと感じています。それでも成果と課題を整理して次のシーズンに向け新しい挑戦を行っていく。それを粘り強く続けていくうちに、バスケットボールを通して人間的に大きく『成長』できたと実感しています。そしてその『成長』はどんな時も変わらず応援してくださる沢山の人たちの支えがあってこそのものでした。当たり前のようにバスケットボールに専念できる環境があり、当たり前の様に試合ができる。この当たり前に「感謝」することが、自分をさらに大きく『成長』させてくれたと感じています。

そして、2022年、私はプロバスケットボールの選手生活を終えました。その後、自分の経験を活かしたい、伝えたいと思い新たに教室を立ち上げコーチとしてのキャリアをスタートさせました。子どもたちにはバスケットボールを教えながら、『成長』をテーマに自分との向き合い方を伝えています。選手として「夢」を見せる職業から、今度は「夢」を叶えていく方法を伝える職業に。これからも自分の経験を軸に、岩手県で「夢」を追う選手たちへ少しでも多くのことを伝えていきたいです。

コーチとしてまた「夢」に挑戦していきます。

CONTENTS

教育随想

岩手県で活動する思い
一般社団法人アイズ 【SHINYA SCHOOL I】バスケットボールコーチ　千葉　慎也　1

刊行に寄せて

コロナ禍の４年間から学んだもの　－これからを生きる子どもたちの資質・能力の必要性－
岩手県立総合教育センター　所長　村上　弘　4

特集
夢の実現に向けて自ら学び行動する岩手の子ども
－ 指導と評価の一体化で育成する確かな学力 －

◆論説◆
主体的・対話的で深い学びを実現する教師の批判的リフレクション
国立教育政策研究所　研究企画開発部教育研究情報推進室　総括研究官　千々布　敏弥　6

◆解説◆
「小学校教育」からのアプローチ
夢や希望をもち、自分らしく生きる子どもの育成　－勇気付けを図る指導と評価－
北上市立笠松小学校　校長　佐々木　善成　10

「中学校教育」からのアプローチ
「指導＞評価」から「指導⇔評価」へ
住田町立世田米中学校　校長　遠山　秀樹　14

「高校教育」からのアプローチ
ここ（葛高）にしかない出会いと学びを　－夢を実現する原動力－
岩手県立葛巻高等学校　校長　菅　常久　18

「特別支援教育」からのアプローチ
特別支援学校における学習評価の工夫　－「触察」の活動を取り入れた授業に関する考察－
岩手県立盛岡視覚支援学校　校長　近藤　健一　22

◆提言◆
公教育のみで英語を学び仕事で英語を使っている私が思う中高の英語教育のあるべき姿
コミューン株式会社　代表取締役ＣＥＯ　高田　優哉　26

◆実践事例◆
バックワードデザインによる授業改善の試み
－自信をもって英語に取り組む生徒の育成を目指して－
岩手県立岩泉高等学校　教諭　井形　優　28

発表会記録　令和４年度第 66 回岩手県教育研究発表会

◆全体会ダイジェスト
教育長挨拶　岩手県教育委員会　教育長　佐藤　博　32
岩手県教育研究発表会報告　33
講演会　新しい時代に必要な資質・能力の確実な育成を目指して
－ＩＣＴを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現－
東京学芸大学　教授　森本　康彦　34

研究・実践交流

◆研究報告　「なりたい自分」を目指す子供の育成
－「知る力・高める力・つながる力」を高めるキャリア教育の実践－
洋野町立大野小学校　教諭　大沢　菜摘　40

◆研究報告　自ら考え、主体的に判断し、表現できる生徒の育成
－カリキュラム・マネジメントを生かした復興教育の推進を通して－
一関市立千厩中学校　教諭　立花　健祐　44

◆指導実践　地域とともにある学校
－中野中ソフトテニス部の伝統と発展・進化してきた理由－
洋野町立中野中学校　教諭　西川　欣孝
八幡平市立西根第一中学校　教諭　村松　康司　48

◆実践交流　質を高める保育の実践を目指して
－ＥＣＥＱ公開保育から見る自園の良さ－
ふたば認定こども園横川目こども園　園長　藤原　奈央　52

◆教材開発　「プログラミングによる美術表現」に係る授業実践及び教材開発について
岩手県立宮古高等学校　教諭　三田　洋　56

センターからの発信

◆研究紹介　中学校　２学年理科　「気象とその変化」
「気象とその変化」について、気象観測データを基に、分析･解釈する学習の充実に関する実践
主任研修指導主事　小室　孝典　60

高等学校　家庭科(家庭基礎)Ｂ　衣食住の生活の自立と設計(3) 住生活と住環境
ライフステージに応じた住居の機能性に配慮した学習の充実に関する実践
研修指導主事　中村　さやか　64

◆教師のためのワンポイントアドバイス

〈学級経営 Q&A〉　生徒指導の中での学級経営の役割
研修指導主事　福井　正人　68

〈教科指導 Q&A〉　中学校理科における授業づくりのポイント
－探究の過程を重視した授業の流れについて－
主任研修指導主事　市野川　知代　70

〈教科指導 Q&A〉　高等学校情報科の授業づくりについて　－「データの活用」の単元から－
研修指導主事　菅野　浩史　72

〈領域等指導 Q&A〉　架け橋期の学びをつなぐとは －学校と園で取り組む際のポイント－
研修指導主事　髙橋　文子　74

〈教育相談 Q&A〉　色覚多様性について伝えたいこと
－「赤い字は目立たないよ」･「何色に見える？」って聞かないで－
研修指導主事　米沢　友夏　76

〈特別支援 Q&A〉　知的障がい特別支援学級における教科指導の在り方
研修指導主事　藤井　未央　78

編集後記　80

カメラレポート　一関市立花泉小学校　表紙・表紙裏・裏表紙・裏表紙裏

教育随想執筆者　**千葉 慎也（ちば しんや）** プロフィール

1987 年生まれ。岩手県水沢市（現奥州市）出身。盛岡南高等学校を卒業後、白鷗大学に進学。同大学のバスケットボール部で主将を務める。大学卒業後、一般企業への入社を経て、2011 年から岩手ビッグブルズへ選手として入団し活躍する。2016-17 及び 2019-20 シーズンは主将としてチームを牽引。惜しまれつつも 2022 年現役を引退、自身の背負っていた背番号の５番は永久欠番となる。2023 年から現職。

http://1sya-is.lovepop.jp/?page_id=58

コロナ禍の４年間から学んだもの
－これからを生きる子どもたちの資質・能力の必要性－

岩手県立総合教育センター
所長　**村上　弘**

令和５年５月、新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが季節性インフルエンザと同じ５類に移行したことを受け、当センターでの各種業務もコロナ禍以前の形に戻りつつあります。各種研修講座においても、基本的感染対策は行いながらも、かつての岩手緊急事態宣言下のような極端な緊張を強いられることもなく、穏やかな気持ちで研修者を迎えることができるようになりました。令和元年 12 月に中国武漢市で第１例目の感染者が報告されていますので、本稿をご覧いただく頃には丸４年が経過する頃かと思います。この間、当センターでもいろいろな変化が起きました。

国による一人一台端末や高速ネットワークの整備はコロナ対策によって前倒しされ、当センターの各種業務でも活用されています。研修講座を例にとりますと、一部の講義を事前視聴していただくことで開始時刻を遅らせ、遠方の先生方の移動負担の軽減を図っています。逆に、普段忙しくて事前視聴できない方は、研修当日の開講式前にセンターで視聴できるようにもしています。遠方でかつ事前視聴もできない方には対策不十分であることは否めませんが､研修者の事情に合わせて選択できるようにした事は前進ととらえています。今後は、十分な成果が見込める研修講座においては、サテライト会場を設けて遠隔地の先生方がより参加しやすくするなど、さらに多様な実施形態を検討しているところです。

当センターでは、小学生に人気の「センター一般公開」を開催しています。昨年は規模を縮小し３年ぶりに来所者を迎える形で実施しました。今年は昨年の２倍の来所者を迎えて実施する予定です。コロナ禍前は、来所者全員を受け入れ、まるで高校の文化祭を先生たちだけで行っているような、所員にとっては過酷なイベントでしたが､現在は定員を設け､事前に申し込みをした方だけを受け入れています。結果､楽しくて賑やかな｢お祭り」から、落ち着いて取り組む「学びの時間」に変わったと感じています。コロナ禍の経験は、学校においては言わずもがなとは思いますが、センターにおいても、それまで当たり前と思っていた物事を見直すきっかけになったと感じています。感染対策を取りながらどう業務を進めていくかを考える場面では新しいアイデアが必要で、予測困難な事態をどう乗り切るかという、まさにこれからの子どもたちに求められる資質･能力を、大人である私たちが試された形となりました。

世界情勢を見渡すと、COVID-19 とは異なるウイルスの出現も懸念されていますし、現在進行中のロシアによるウクライナ侵攻もまた予測困難な事態と言えます。Society5.0 と呼ばれる新しい社会の担い手となり、変化に対応しながら生きていく子どもたちに必要な資質・能力は、教育に携わる私たちが責任をもって育成すべきであると、まさに実感する状況となっています。

さて、このたびお届けする「教育研究岩手」第 111 号の特集テーマは、令和５年度の岩手県教育研究発表会のテーマでもある「夢の実現に向けて自ら学び行動する岩手の子ども　～指導と評価の一体化で育成する確かな学力～」としました。同発表会の講師としてお招きする国立教育政策研究所の千々布敏弥先生から全体の論説を、県内の４人の校長先生方からそれぞれの校種に応じた解説をいただきました。また、様々な分野で活躍されている方々から、教育に対する新鮮な視点からの御提言もいただいております。本号が、各学校での教育実践に活用されるものとなることを、強く願うものです。

特 集

夢の実現に向けて自ら学び行動する岩手の子ども

ー指導と評価の一体化で育成する確かな学力ー

論説

主体的・対話的で深い学びを実現する教師の批判的リフレクション

国立教育政策研究所　研究企画開発部教育研究情報推進室
総括研究官　**千々布　敏弥**

主体的・対話的で深い学びの意義

今次改訂学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」とは、これまで教師を主語として考えてきた学習指導を子どもを主語として考えるようにする発想の転換であることは、すでに多くの教師が理解しているところであろう。子どもが「主体的・対話的で深い学び」を行うのであって、教師が「主体的・対話的で深い学び」を行うのではない。しかし、子どもに主体的・対話的で深い学びを行わせるために教師はどうすればいいかを考え出すと、やはり従来と同じように指導法について考えなくてはいけなくなる。すると、「子どもが主体的・対話的で深い学びに取り組むためにはどのような指導をしたらいいですか」と質問する教師が出てくる。その質問の姿勢が「技術的リフレクション」であって、それを「批判的リフレクション」まで高める必要がある、というのが私の近著『先生たちのリフレクション』の概略である。

刊行以後、拙著を読んだ多くの教師から勉強会に招かれ、質問をいただいている。その質問の多くが「どう批判的リフレクションに取り組んだらいいのでしょうか」というものだ。その質問自体が技術的リフレクションのレベルであって、批判的リフレクションをどうしたらいいかを批判的に考えて欲しい、と応えているのだが、そう応えながら質問する教師たちをあまりに突き放しすぎているのではないか、と反省している。

そもそも批判的リフレクションとはどういうものか、もう少し明確に伝えなくてはいけない、しかも技術的な語り方ではなく、というのが、最近の私の研究テーマとなっている。ある程度骨格は明確になっており、それをまとめると『先生たちのリフレクション』第２弾として出版できると考えている。本稿はその下書きのつもりで書いている。

リフレクションの３段階論と６段階論

マックス・バンマネン (1977) によるとリフレクションは、マニュアルに従って授業を創る思考を技術的リフレクション、自身の試行錯誤の中から授業を創る思考を実践的リフレクション、その背景となる理念や育てる子ども像を明確にする思考を批判的リフレクションと３段階に区分できる。多くの教師がマニュアルに頼り、あるいは先輩教師や同僚から進言された手法をそのままに実践しようとする。教師は技術的リフレクションの思考に陥りがちなのである。それを批判的リフレクションに転換しないと、子ども主語で授業を構築することは難しい。

拙著で割愛したのだが、バンマネン (1991) はリフレクション３段階論に続いてリフレクション４段階をとなえている。第１段階は慣習化された日常的な思考の水準。第２段階は日常生活における実践的な経験に関して偶発的かつ限定的に省察する水準。第３段階は日常の行動について理論的な理解と批判的な洞察を深めることを目的として自分や他人の経験をより体系的に、持続的に省察する水準。第４段階は理論化の形式を省察する仕方自体を省察する段階である。

バンマネンのリフレクション４段階論を技術的リフレクション、実践的リフレクション、批判的リフレクションの３段階論に組み合わせると、次のようなリフレクション６段階説を提示

	日常的段階	→	理論化・構造化の段階
技術的リフレクション	利用者としての技術的省察		理論化を目指す技術的省察
実践的リフレクション	問題状況に応じて揺れ動く実践的省察		一貫した実践に結びついている実践的省察
批判的リフレクション	教科・単元の目的を独自に省察		学習指導要領や教科の枠組みも批判的に省察

図　リフレクション６段階

することが可能となる。つまり、技術的リフレクション、実践的リフレクション、批判的リフレクションの３段階それぞれに慣習化された日常的な段階とそれを見直す理論化・構造化の段階がある、と考えることが教師の思考をより的確に表すことができるのではないかというものだ。

多くの教師が「慣習化された日常的な思考」として、教科書の指導書に従うなどの技術的リフレクションを行っている。また、技術的リフレクションだけでは対処できない場面は多いので（例えば子どもが教室から飛び出す、授業に関心を持たないなど)、そこで何らかの対処を行っている。それは実践的リフレクションと言えるのだが、あまり考えていない。

技術的リフレクション：技術的リフレクションについて例えば、マニュアルに頼る教師の多くは、マニュアル通りに進行しない授業の現実に直面し、別の効果的なマニュアルがあるのではないかと探したり（そのような思いでネットを検索したり書店を訪れた経験のある教師は多いはずだ)、マニュアルを自分なりに修正して実践したりしている。それがうまく行けば、その教師独自のマニュアルとなる。この発想は「教育技術の法則化運動（現・TOSS)」に近い。他の教師が開発した教育技術（マニュアル）を参照して実践したり（追試)、新たな技術を開発したりしているのである。法則化運動はマニュアル志向であると批判される局面が多いが、技術的リフレクションの中で、それなりに理論化・構造化を目指しているのである。

実践的リフレクション：子どもが教室から飛び出す、授業に関心を持たないなどの困難に直面した教師は、何らかの対処を考える。それが実践的リフレクションになるのだが、それを無自覚的に行っている教師が多い。教師の授業スタイルや子どもに関する信念がなかなか変わらないのは、それが慣習化して教師の無意識の世界にまで降りているからだ。それを自覚化して変えようとする思考は、批判的リフレクションとまでは行かずとも、実践的リフレクションを理論化・構造化する段階と解釈することができる。多くの教師が実践研究論文を執筆している。それは学会誌に掲載されている論文と比較すると汎用性や客観性に欠ける（したがって実践家の書く論文は学会誌の査読で不合格になる場合が多い)。だから意義のある文章でないというわけでない。まず実践研究論文を執筆した本人が、それまで無自覚的に取り組んできた自分の実践を明示的に捉えようとしている。無自覚の正解から明示的な世界に引き上げようとしている。実践研究論文の執筆によって本人が成長している側面がある。次に、汎用性に欠ける文章であっても、同じ体験を持つ教師であれば、実践研究論文を読んで理解できる。つまり、実践研究論文を通じてすぐれた実践の普及が行われるのである。

以上のように技術的リフレクションと実践的リフレクションにおいて無自覚的、日常的に行っている思考の段階から理論化・構造化する

段階があり得るとすれば、批判的リフレクションにおいても同じようなことがあるのではないかと思えてくる。

批判的リフレクション：批判的リフレクションの一つの例として指導案作成が挙げられる。教科、単元の目的を考察し、子どもの実態を捉えて授業を構想する。その成果を記述する指導案を他の指導案から書き写したり他者の進言をそのまま受け入れて書き直したりしていたら技術的リフレクションレベルとなってしまうのだが、授業者が理解する教科と単元の目的を吟味して記述する、子どもの実態も授業の展開も自分の頭できちんと考えて構想しているのであれば、それは立派な批判的リフレクションとなる。だが、そのようにして書かれた指導案で教科についての解釈、単元解釈に甘さがあるのは通常だ。それを引き上げるのが教材研究となる。つまり、教材研究とは批判的リフレクションの初期段階＝「教科や単元の目的を自分の頭で考える」段階から、学習指導要領で記述されている教科や単元の目的を的確に解釈し、それをも超える批判的思考に取り組む（学習指導要領ではこう書かれているが、自分はこう考えて授業を構想した、など）姿勢が、批判的リフレクションの理論化･構造化の段階であると解釈できる。

以上のリフレクションを３段階×２段階（日常的段階、理論化・構造化段階）で捉えるという考えは、『先生たちのリフレクション』の草稿段階ですでに考えていたものである。以上の文章は草稿段階よりかなり書き直しているので、ある程度伝わりやすくなっているはずだが、『先生たちのリフレクション』では、編集者との協議の末に６段階を３段階に単純化して理解しやすくすることとした。その判断は、当時の段階では正しかったと思っているのだが、リフレクション３段階論についての質問をいただくと、やはり当初案の６段階論の方がよかったのではと思い直している。

エージェンシーという視点

リフレクション３段階論を６段階に発展させる上で、エージェンシーの視点も重要となる。エージェンシーに関する定義は大きく心理学に依拠しているものと社会学に依拠しているものに分かれ、OECD Education2030 (2019) の定義「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」とは、心理学上の定義の影響を強く受けている（溝上慎一，2020）。

心理学上の定義とは別の定義もあり、「行為者が構造的環境を再生産したり変容させたりすること」と、構造的環境との相互作用でエージェンシーを説明する立場もある（Emirbayer & Mische, 1998）。この定義は社会学関係の先行研究（パーソンズ、ギデンズ、アーチャー）の影響を受けており、無自覚の世界で支配している構造（文化と言っていいだろう）への個人の対処の仕方の観点が強くなっている。OECDでは生徒エージェンシーを高めるためにも教師エージェンシーを高める必要があるという文脈で議論している（OECD 事務局に勤務した白井俊による）。教師がカリキュラムや指導について考えていくとき、教師としてのアイデンティティ構築が重要であるのは当然だが、それ以上に教育界や学校を取り巻く構造をどう捉えるかという視点が重要ではないかと考えている。

構造とは、教育委員会や管理職が構築している制度構造が想定できようが、それ以上に行政機関がそのような制度を構築しようとする考え方（例えば授業を個々の教師の自由な発想に委ねようとする考え方よりもどの教師も一定水準の授業を提供することが重要とする考え方など）のほうが重要である。では、行政の構造を批判したらよいのかというとそうではない。行政の構造を批判する側にも構造が存在している。「行政機関は我々の行動を制限することばかりを考えている」と批判する教師は、その教師の自発的な思考からそう批判しているという

よりも、そのように考える思考様式としての構造の影響を受けて発言している場合の方が多い。

教育界における意見の対立は、考え方の対立というよりも構造の対立である場合が多い。自らが依拠する構造の立場から他の構造を批判しても、構造対構造という、より大きな構造に変容はない。子どもの主体性を認めて子どもが学びたいことを学ばせようと考える教師と一定水準の知識・技能を身につけさせようと考える教師は、対立しがちである。そのことを『先生たちのリフレクション』では信念の対立という言葉で説明したが、エージェンシーの考え方を使えば､構造の対立なのである。何らかの要因（他の教師の実践において、あるいは自らが新たに試行した実践を通じて、それまで経験していなかった子どもの変容を体験するなど）によって信念の変容が生じることはあるが、それは無自覚の世界の中で生じている現象である。エージェンシー論で言えば、どちらの立場の教師も自らの信念が依拠している構造を自覚化することで真の信念の変容が生じると考えた方がよい。

この考え方は、ピーター・センゲが言うメンタル・モデル、ショーンとアージリスが言うダブルループ思考、ハーバーマスが言うコミュニケーション的行為に通じるものだ。さらには私が構想している批判的リフレクションにも通じる。つまり、エージェンシーとは、批判的リフレクションの対象が「構造」であり、それを変容させようとする姿勢であると考えることができる。

構造とは、我々を取り巻く文化のようなものであり、無意識のうちに我々の考えや行動に影響を与えている。それは我々の主体的な思考で再生産されて影響を与え続けると同時に、我々の主体的な思考によって変容されることもある。エージェンシーとは我々を取り巻く構造を批判的に見直して変容させることである。前節のリフレクション６段階説で慣習化された日常的な段階を理論化・構造化の段階に引き上げることを提案したが、エージェンシーの考え方を取り入れると、構造を無自覚的に再生産している段階から構造を主体的に変容させる段階と説明できる。我々の思考は、技術的な思考においても実践的な思考においても、批判的な思考においても、構造をどう自覚化して変容させるかという思考が求められている。

引用文献

・千々布敏弥 (2021)『先生たちのリフレクション』教育開発研究所
・Emirbayer, Mustafa & Mische, Ann (1998) What Is Agency?, AJS Volume 103 Number 4, 962-1023
・溝上慎一 (2020)『社会に生きる個性』東信堂
・OECD (2019) OECD Learning Compass Concept Notes (https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/OECD_Learning_Compass_2030_Concept_Note_Series.pdf)
・Van Manen, Max (1977), Linking Ways of Knowing with Ways of Being Practical, Curriculum Inquiry, 6(3), 205-228
・Van Manen, Max (1991) Reflectivity and the pedagogical moment: the nor mativity of pedagogical thinking and acting, Journal of Curriculum Studies, 23(6), 507-536

ちちぶ　としや
1990 年文部省（当時）入省。その後、私立大学教員を経て、1998 年から国立教育研究所（現・国立教育政策研究所）の研究官として、複数の都道府県・市町村の学力向上施策の相談に応じている。2000 年、内閣内政審議室教育改革国民会議担当室併任。2003 年､米国ウィスコンシン州立大学へ在外研究。2013 年、カザフスタン・ナザルバイエフ・インテレクチュアル・スクールにて授業研究アドバイザー。学校評価の推進に関する調査研究協力者会議をはじめ多数の文部科学省関係委員を歴任する。

解説　「小学校教育」からのアプローチ

夢や希望をもち、自分らしく生きる子どもの育成
－勇気付けを図る指導と評価－

北上市立笠松小学校
校長　**佐々木　善成**

1　はじめに

令和５年４月に施行された「子ども基本法」の目的には、子どもの心身の状況、置かれている環境等にかかわらず、その権利の擁護が図られ、将来にわたって幸福な生活を送ることができる社会の実現を目指すとある。また、「令和の日本型学校教育」の構築に向けた学校に求められることとして、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするとある。さらに、「岩手県教育振興計画」では、学校教育の目指す姿として、地域とともにある学校において自ら生き生きと学び、夢を持ち、それぞれの人間形成と自己実現に向けて知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を身につけるとある。

以上のことを踏まえ、本校では、自分のよさや可能性を「夢や希望」、価値ある存在や自己実現は「自分らしい生き方」ととらえ、教育活動全体を通して具現化に努めている。そして、夢や希望をもち、自分らしく生きることは、「個人や社会の幸福な生活（ウェルビーイング）の実現」にもつながるものと考えている。

今年度の全国学力・学習状況調査の児童質問紙には「夢や目標を持っているか」の問いがある。本校６年生は10名であり、分母数は小さいものの、肯定的回答率が100％であり、全国や県と比較すると15％以上の差がある。

本稿は、特集テーマに対する小学校教育でのアプローチについて、上述の児童の実態や本校の実践等を踏まえながら、特に道徳教育からの視点で考察するものである。

2　道徳教育の基本的事項

(1)　道徳教育の目標と推進上の留意点

学習指導要領総則に、道徳教育の目標として以下の通り示されている。

> 道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。

また、推進上の留意事項が記述されており、特に、次の点に注目したい。（下線は執筆者）

> 道徳教育を進めるに当たっては、（中略）<u>豊かな心</u>をもち、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、（中略）<u>未来を拓く主体性のある日本人</u>の育成に資すること。

「豊かな心」の例にある、「自分の成長を感じ生きていることを素直に喜ぶ心」「他者との共生や異なるものへの寛容さをもつなどの感性及びそれらを大切にする心」は、特に大事にしたい。また、「未来を拓く主体性のある日本人」とは、「常に前向きな姿勢で未来に夢や希望をもち、自主的に考え、自律的に判断し、決断したことは積極的かつ誠実に実行し、その結果について責任をもつことができる人間」と定義されており、「常に前向きな姿勢」という言葉から書き出されていることに、大きな意味を感じる。

(2)　道徳教育における評価の意義

「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」の「第５章　道徳科の評価」の中で、道徳教育の評価の意義を以下の通り示している。

（下線は執筆者）

> 教師が児童一人一人の人間的な成長を見守り、児童自身の自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつようにすること。

また、道徳科における評価の意義には、次の記述がある。

> 児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

以上のことを踏まえた、具体的な実践とその考察を次に述べる。

3　主題に関わる考え方と実践

⑴「夢や希望をもつ」ために

道徳科や総合的な学習の時間等で夢や希望をもつことの大切さを扱い、児童に対し具体的な内容や見通しを考えさせることがある。児童が「夢や希望をもつ」ためには、児童自身が「やってみたい」と思うことを見つけることが必要である。そのためには、児童が興味関心を抱くような活動や教材の仕掛けが必要である。

また、興味関心を抱かせるためには、活動の目新しさだけではなく、憧れを抱かせることも必要である。目標となるモデルと言い換えることもできる。「鳥のように空を飛びたい」と憧れを抱き、努力した高梨沙羅選手の姿等がそれであろう。

さらに、自分の夢や希望を実現させることの意義や意義深さを考えさせることも大切なことである。

⑵「自分らしく生きる」ために

「自分らしく生きる」とは、勝手気ままに生きることではない。自分の良心に基づき多面的に考え、主体的に判断し、自己実現を図ることである。そのために、「自分の思いや願い、行為の是非を、自分の現有の価値意識と照らし合わせること」「善いと判断したことは他者にとってどういう意義があるか見方を変えて考えること」「善いと思ったならば自分が納得するまでとことんやってみること」が必要と考える。あわせて、「他者からの助言等を一旦受け止める謙虚さや寛容さや、善いと思ったことを取り入れる素直さを育むこと」も必要である。「自分らしく生きる」には、他との関わりで自分の見方や考え方を見つめさせることが必要不可欠である。

⑶　実践にあたって

エリクソンが提唱した「心理社会的発達理論」では、「自分らしさ」を見つけていく段階を「青年期（12歳から20代前半）」としている。その前段階には、「自制心が育まれ、自主的に考えて行動する児童期（3～6歳）」「勤勉さを身に付け、自分にもできるという有能感が生まれる学童期（6～12歳）」がある。また、ウェルビーイングを重視する「ポジティブ心理学」では、視点として「ポジティブ感情」「没頭」「豊かな人間関係」「意味」「達成」を挙げている。これらのことから、夢や希望の実現に向けて進んで学び行動する子どもを育てるために小学校段階で特に感得させたいことを以下のように考える。

> ＜自分自身との関わりから＞
> ・自分の目標の達成に向け、粘り強く努力し続ける強い意志
> ・自他にとって正しい、必要と判断したことは自信をもって行う勇気や誇り
> ・自分の特徴を知り、短所を改め、長所を伸し生かそうとする個性伸長
> ＜他との関わりから＞
> ・互いの特徴や努力を受容し、信じ合い、励まし合う寛容さ
> ・他の人や社会に対する感謝と、集団の一員として自分にできることを考え実践する役割と責任の自覚

なお、評価にあたっては、道徳教育並びに道徳科における評価の意義を踏まえ、「勇気付けを図り、自尊感情を高めること」「行為だけではなく、行為を支える見方や考え方を価値付け

ること」を大切にするものである。

⑷　実践の具体

小学校段階で味わわせたい内容と本校の実践との関連を考察していく。

ア　粘り強く取り組み、達成する強い意志

運動会に向けた取り組みについて、苦手意識をもっていた児童が書いた作文を紹介する。

> 運動会のきせき
> ぼくは、運動会が苦手です。（中略）高学年リレーの練習では、ぼくの番の時にみんなに抜かれて負けてしまっていたので必死に走りました。チームはそのまま一位になることができました。とてもうれしくて涙が出ました。（中略）
> ぼくがこのような経験ができたのは、仲間との協力のおかげで、つらいことでもやりとげることができたからだと思います。そして、自分でも努力をすれば速く走ることができるのだと自信がつきました。

「勝ちたい」という個人の強い願いと仲間の支えとが融合されて実現したものである。偶発的な実践例ではあるが、思いも寄らぬことが達成された成功体験により、努力する意義を「個」と「チーム」の両側面から実感し、自尊感情が高まったと考える。児童自身に話し合わせ、試走・修正という関わり合いの場を設定し、少しでも改善したことを評価し続けた指導者の粘り強い励ましが大きな支えとなっていた。

イ　判断したことは自信をもって行う勇気

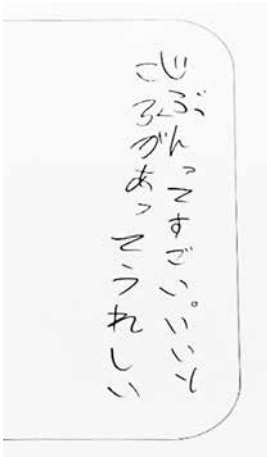
諸調査において、「自分とは違う意見について考えることが楽しい」という点が本校の課題として浮き彫りになっている。これは、限られた人間関係の中で活動する弊害ではないかと考えられる。本校の研究主題を「考えをもち表現する力の育成」として、国語授業を重点に対話場面を取り入れ他者との学びを見つめさせながら授業を通して課題改善に努めている。また、１学期始業式の中で校長が話した「今年度頑張ってほしいこと」に対し、目指したい姿を顕著に示している児童を全校朝会の中で取り上げ、自分がよいと思ったことを「一人でも」「続けて」実践していることの価値高さを評価した。

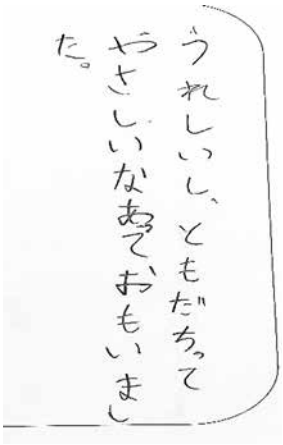
また、自分の思いを形にする体験活動として文化的な活動も盛んであり、作品のよさを交流しながら、自分が考えたことに自信をもち、生き生きと表現していることを評価･価値付けし、自己実現を図るための勇気付けに努めている。

ウ　自分の特徴を知り、長所を伸す個性伸長

１年生の道徳科の授業では、「自分のよさをみつけよう」をねらいに、教材「ぼくのことときみのこと」の学習を実践した。教材の話合いの後、タブレットを活用して、友達のよさをカードに記入して送信する活動を行った。導入で自分のよさに気付かず発表できなかった児童が、友達からのメッセージ内容を読むことで、自分のよさを実感することができた。

また、「自分のよいところを友達が教えてくれた時、どんな気持ちになったか」という視点で振り返りを行った。認められた心地よさだけではなく、友達のよさを実感したり、中には自分に対して自信をもったりした児童も見られ、大きな変容を促すことができた。





エ　互いの努力を受容し、励ます寛容さ

本校の伝統に「応援」というキーワードがある。また、復興教育に関わる教育資源を生かし切れていない課題もあり、その改善として月命

日を「友達応援の日」とし、目標に向かって頑張っている友達を勇気付ける取り組みを全校で行い始めている。目標設定としては、優しさや粘り強さ等「自分の生き方の志向」で設定させた。児童は自分の特徴を見つめながら目標を考え、それに対して、他の児童からは必ず励ましや具体的な取り組みを記入するようにした。

各学年でも工夫を凝らした取り組みを行っている。６年生は「今週のＣＯＬＯＲＦＵＬ」に取り組み、カードに友達の頑張りを記述させ、担任が必ずコメントすることを実践している。担任のコメントは、共感的内容や助言的内容であり、児童に寄り添う姿勢を大切にしている。また、４年生では学級のよさを自己評価させ、学級通信で保護者に周知する取り組みを行っている。

互いを信じ、励まし合う温かい支持的学級風土の醸成は、児童に安心感を与え、挑戦する意欲を高めることにつながっている。

オ　感謝と自分の役割の自覚

これまで地域の方々に大事にされ、学校への願いが込められて支援を受けてきた経緯や地域性もあり、学習田での稲作体験、登校指導、挨拶運動、地域行事への児童の参加等、地域やＰＴＡとの連携による活動が多くある。また、学習支援や生け花、読み聞かせ等のボランティア支援により、教育環境の整備も図られている。さらに、外部講師を依頼した景観学習や酪農学習、キャリア学習等も盛んである。様々な方々との関わりが多く、必然的に感謝の気持ちを抱く場面が多い。児童は、このような様々な関わりの中で目や声をかけられ、自分の役割を自覚し社会や集団に貢献した心地よさを味わうことにより、やりがいを感じることができる。これは次の目標につながり、主体性を高める大きな原動力になっている。

４　終わりに

前述の児童質問紙において、以下の項目の肯定的回答は次の通りである。※（　）は県

・自分にはよいところがある。
　100％（82.0％）
・先生は、あなたのよいところを認めてくれる。
　100％（89.8％）
・人の役に立つ人間になりたい。
　100％（96.5％）
・普段の生活の中で、幸せな気持ちになる。
　100％（90.7％）

これらの結果は、これまでの指導に対する児童からの評価と捉えるとともに、勇気付けを指導の基本に据えて実践してきた成果と考える。もちろん、夢や希望の実現に向けた努力の質や量、不屈の精神には課題が見られる。しかし、自分の存在意義を感じ、情緒的安定の中で幸福感に浸っている児童の心の中には、将来、常に前を向き、夢や希望の実現に向けて自分らしく生きる輝きが宿っていることを願いたい。

さて、「指導と評価の一体化」のテーマに関わり、「勇気付けを図る指導と評価」として考えを述べてきたが、指導や評価の内容・方法とともに考えたいのは、「評価者との関係性」である。このことは、愛着課題や発達特性を抱え、小学校段階でも生きにくさを感じる児童と接することが多くなり、特に強く感じていることである。指導と評価の一体化を図り、効果を高めるために大切なことは、指導者が、児童にとって人と関わる喜びを味わわせ憧れを抱かれ頼られる存在になり、深い教育的愛情と温かい眼差しで児童の成長を見つめることではないだろうか。

ささき　ぜんせい
盛岡市立松園小学校、盛岡市立仁王小学校、岩泉町立小本小学校並びに大牛内分校、盛岡市立河北小学校、盛岡市立仁王小学校主幹教諭、花巻市立湯口小学校副校長、盛岡市立城北小学校副校長を経て、令和５年度から現任校に勤務。

解説　「中学校教育」からのアプローチ

「指導＞評価」から「指導⇔評価」へ

住田町立世田米中学校
校長　**遠山　秀樹**

1　はじめに

本校の教育目標は「夢　実現のため　努力し続ける生徒」である。偶然ではあるが、本号の特集テーマによく似ている。私自身、様々な機会にこの教育目標を口にしてきた。生徒が主役の学校、そのための教育目標は生徒にとって理解しやすい、覚えやすい等、共有できた方がいい。来年度から、本校は有住中学校と統合し新設住田中学校として開校する。新しい教育目標をどうするか…。

さて、昨年度まで県教委で学力向上担当課長をしていたこともあり執筆依頼があったのであろう。依頼内容は、指導と評価の一体化についての解説であるが、詳細については、国政研の参考資料を参照願うこととし、筆者がポイントと考えていること、そして今年度から本校で実践していることを述べることにする。

2　指導と評価の一体化について

(1)　裏打ちされた実践にするために

職務上これまで県内の多くの先生方の授業実践を参観する機会をいただいた。その中で、実際の生徒の様子やエビデンスから生徒に力を付けている先生方には「評価を知っている」、「既に評価の見通しがある」、「なるほどと思える評価問題を作成している」等の共通点があったように思う。評価について質問されることもあった。ここ数年では、生徒の主体的な学びを促すために、身に付けさせたい力、評価方法、評価場面を単元の冒頭で生徒と共有する授業実践が増え、どんな資質・能力を身に付けさせたいのかが授業づくりの起点となってきている。

「指導と評価の一体化」という言葉は聞き慣れて久しいが、各種研修会や学校で行う授業研究会等において、何が協議の中心になっているのだろうか。指導法が大きく取り上げられ、「指導＞評価」という現状ではないだろうか。実は評価について、その目的も含めて学校全体で再確認しながら一層の理解を深めることが指導の改善につながるのではないかと考えている。

学習評価には目的が２つある。

・教員が児童生徒の学習状況を的確に捉え、自身の指導の改善に生かすこと
・児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすること

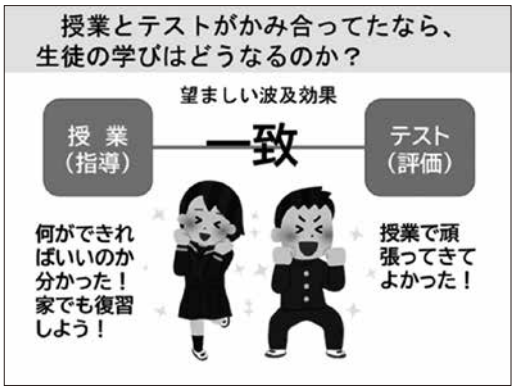
教師にとっては、自身の指導を見直す機会である。生徒一人ひとりには、学びの振り返りに留めず、どんな学習をどのように取り組めばよいのか等に気づかせたり、考えさせたりしながら次の学びに評価を生かすことが大切である。

(2)「波及効果」から考える

英語科担当の先生ならば聞いたことがあるかもしれないが、「波及効果」という考え方がある。

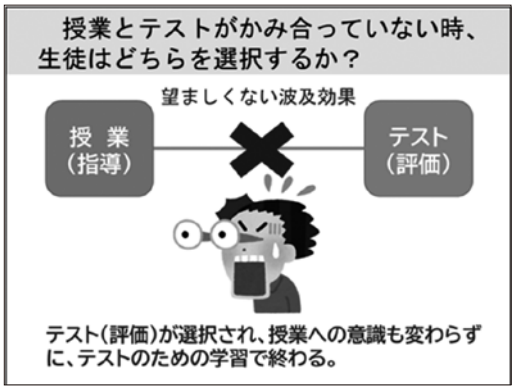
> 「波及効果」とは、(テスト論においては、)テストが学習者に及ぼす影響の総体である。
> 静哲人 (2002)、「英語テスト作成の達人マニュアル」

波及効果には、望ましい効果もあればその逆もある。



【図１】　望ましい波及効果

話す力を伸ばしたいのであれば、スピーキングテストを実施する必要がある。スピーキングテストに関わって「いつ」、「どのような形態で」、「テスティングポイントは何か」等について事前に生徒に周知していれば、授業での学習活動への意識や取組も変わる。ルーブリックが事前に示されていればなおのこといいだろう。自身の取組が報われれば、学習意欲の喚起に繋がり、家庭学習の内容も変化していく。これは、学習者に望ましい波及効果を及ぼす一例である。



【図２】望ましくない波及効果

一方で、スピーキングテストは実施することになっていても、テスティングポイントが不明確であれば生徒は何に気を付けて練習すればよいのか分からず学習者に与える影響は少なくなる。まして、授業では話す力を育てようとする学習活動、しかしテストでは知識・技能を問う設問がほとんどであればどうだろう。このような場合、学習者は知識・技能に関わる学習さえしておけばよいと判断することになる。したがって、授業に対する意識や学習活動への取組に変化は起こりにくい。

英語科での例を挙げたが、これは他教科でも同様のことである。どんな力を伸ばしたいのか、それをいつ、どのように評価するのか。波及効果の考え方は、指導と評価の一体化と捉えることができる。

⑶ 「つまずき」をいつどうとらえるのか

岩手県学校教育指導指針では、確かな学力の育成に向け、その目標に「つまずきを生かした児童生徒一人ひとりの資質・能力の向上」を掲げている。さて、一人ひとりのつまずきを日頃の指導でどのようにとらえているだろうか。

今、授業づくりは「１単位時間」の指導も大切ではあるが、それに終始するのではなく、「単元や題材等の時間や内容のまとまり（以下『単元等のまとまり』）」での指導の充実が求められている。資質・能力の育成には、単元等のまとまりでの指導計画が重要であるが、指導計画の中につまずきを捉えるための手立ては含まれているだろうか。少なくとも次の２つは必要ではないだろうか。

・形成的評価
・総括的評価

県内では、中間テストや期末テストの在り方を見直した学校、また見直そうとしている学校が増えてきている。身に付けさせたい資質・能力を妥当な評価方法で評価していく。そのためにノートやレポートの記述、パフォーマンステスト等、多様な評価方法が実践されている。身に付けさせたい資質・能力を定期テストだけで評価することはできない。このような現状から定期テストの見直しや廃止に踏み切った理由がある。さらに、その背景にはもう一つ、生徒一人ひとりのつまずきを積み重ねさせないため、つまずきに早期に対応するためである。

単元等のまとまりで指導と評価の一体化を図っていくのはその通りであるが、それに加えて児童生徒一人ひとりのつまずきに対応するためにはもっと短いスパンでの指導と評価の一体化という視点も大切にしたいところである。

３　今年度、本校で取り組んでいること

校種を問わず、どんな学校であっても経験値や力量の違いはあって当然である。大切なことは、誰もが資質・能力育成の当事者であることを前提に学校全体としての取組が展開できているかどうかである。教師個々の実践が噛み合い、学校が目指す資質・能力の育成、学校教育目標の具現化に繋げていく。そのような取組を展開するためにはどんな資質・能力を育成したいのかを学校として明確にする必要がある。そして

持続可能な取組にするためにも欠かせないのが主任層が機能、連携した組織としての運営体制の構築である。このような趣旨で、本県では現在「確かな学力育成プラン」に基づいた取組の充実を図っているのは周知のことである。

さて、ここからは今年度の本校の取組の一端を紹介する。基本的な考え方として、開発的で課題解決的な取組を展開したい。その際、上手くいかなければ知恵を出し合い、修正すればよい。主任層がリーダーシップを発揮し、トライ＆エラーを繰り返しながら強い組織づくりを目指していきたい。以下の実践も、道半ばであり軌道に乗っているわけでもない。今後、検証しながら修正する必要があるものとしてご理解いただきたい。

⑴　目指す資質・能力は何か？　〈研究主任〉

理由や根拠を明確にして表現する力
【思考力・判断力・表現力】

年度初めに、見直しを行い、職員間で共有できたのは５月に入ってからであった。「何のために」という目的を新体制で再確認する必要があった。３つの資質・能力の中でも思考力・判断力・表現力を重点とし、上記の力を質的に高めていくことが他の２つの資質・能力を同時に高めることになると捉えて設定したものである。その後、この資質・能力を教科の特性を踏まえて各教科に落とし込んでいる。

⑵　校内研究会　〈研究主任〉

今年度最初の校内授業研究会で、研究主任自らが理科の授業を行った。研究協議の柱は、「理由や根拠を明確にして発表する場面での生徒の現状を踏まえ、自分の担当教科では何ができるか」であった。教科の壁を盾にする発言をなくし、教科や学年を超えた学校全体での取組を目指している。むしろ、自分の教科について他教科の先生方に説明するいい機会ではないだろうか。次回は、保健体育の授業研を予定している。

⑶　互見授業　〈研究主任〉

年度初めの研究部からの提案は、「互見授業週間の設定」であった。この提案に対し、研究主任に本校が育成を目指す資質・能力と互見授業との関連付けを図れないのかを検討し、再提案を求めた。そして、以下のように確認した。

・全員、全教科が対象である。
・授業者が、理由や根拠を明確にして表現する場面として見てもらいたい日時を研究主任に報告する。研究主任が周知する。
・指導案作成はしない。
・一人、毎学期に１回以上行う。

思考力・判断力・表現力

住田町立世田米中学校
研究部通信 No. 01
発行日 令和5年5月25日
発行責任者　東　昌幸
TEL（学校）46－3155

JA Goal for 1学期
誰かになりきって記者会見をし、スピーチしたり、質問に答えたりしよう。
・自分の考点を聞き取り、質問や感想を伝える。
・スピーチ原稿や練習に対し、積極的にアドバイスをする。

◆第２回校内研究会について

先週５月１７日に第２回校内研究会が行われました。本校生徒の「思考力、判断力、表現力の育成」が課題であることを共有し、そのために本校の令和５年度の重点的に育成を目指す資質・能力は、【思考力・判断力・表現力等】であること、「理由や根拠を明確にして表現する力」を育成するための授業を行っていくことを確認しました。

そこで、先生方には理科先生の授業実践を参考に他教科でも同様に「生徒の思考力、判断力、表現力を育成する」ために先生方にも思考、判断、表現してもらいたいと思います。

各教科における「思考力・判断力・表現力の育成」について

国語		
数学		
理科		
英語		
社会		
保健体育		
音楽		

◆互見授業について

前回の校内研究会において、互見授業週間を年２回、６月と１０月に行うと提案しました。それについて運営委員会で議論した結果、以下のように修正します。

(1) 互見授業週間は、設定しない。日々の授業において授業を見たり、見せたりできる雰囲気が大切であると考えます。
(2) 見てもらいたい、見せても良い授業の日時を教えて下さい。それを先生方にお知らせをします。もちろん指導案等の作成はいりません。一人、毎学期に１回以上行いましょう。

◆第３回校内研究会について

(1) 日時：６月７日（水）５校時
(2) 教科：理科　３年生
(3) 場所：理科室
(4) 連絡
研究会の中で他教科の実践についての交流を行います。研究会まで２週間しかありませんが、それぞれの教科で「思考力、判断力、表現力」をどのようにとらえ、「思考・判断・表現をしている生徒」の「具体的な姿」をどのようにイメージし「日々の授業を行っているのか」を交流したいと思います。よろしくお願いします。

【資料１】研究部だより

⑷　評価補助簿の様式変更　〈教務主任〉

１学期の総括的評価（評定及び観点別評価）は評価の目的の一つである生徒一人ひとりの次の学びに向けたものになっているだろうか。このような思いから評価補助簿の様式を変更し、特記事項として次のようなことを加筆してもらうこととした。

・日常の授業姿勢や提出物の状況がどう変わってきたか

・どんな学習、どのように改善すればよいか

総括的評価が変わっていなくても、そこには見えない生徒一人ひとりの学びの変化を期末面談のような場で具体的に触れたい。（その逆もあるだろう。）担任にとっても各教科担当からの補助簿の記述は一層の生徒理解に繋がったようである。

⑸　学習相談会の実施　〈教務主任〉

どの学校でも生徒一人ひとりに寄り添うことができるよう「教育相談」を実施している。年間一人当たり３～４回実施しているケースが多いのではないだろうか。この複数回の内の１回を「学習相談」として実施してみた。最初は３年生、その後２年生、１年生へ。実施に当たっては希望者を対象としているが、担任からの事前指導や当該学年の先生方からの声掛けをした上での実施である。生徒は相談をする先生を選ぶことができる（校長、副校長に相談することも可能）。県教委の分析からも、家庭学習で何をどうしていいのかが分からない生徒がたくさんいる。本校も例外ではないだろう。少しでもその解消に繋がる取組になればと考えている。

３学年ポイントチャンスデー

２０２３．９．２１（木）
教務部、３学年

１　目的
各教科の学習方法や学習内容に悩んでいる生徒の相談に答える。また自分からそういう機会をチャンスとしてとらえ、自分のものにできる生徒に育てる。

２　期日と時間帯

	時間帯
９月２６日（火）	１６：２０～１６：５０
９月２７日（水）	１６：２０～１６：５０
９月２８日（木）	１６：２０～１６：５０
９月２９日（金）	１６：２０～１６：５０

３　対象教科名と先生方
遠山校長先生（英語）、岩渕副校長先生（数学）、大森先生（国語）、曽根先生（数学）、小山先生（数学）、野口先生（社会）、豆理先生（英語）、佐々木先生（英語）、東先生（理科）

４　教わる場所
担当の先生と確認し決定。

５　受講方法
①担任の先生へ申込用紙をもとに報告する。
②自分から教わりたい先生に申込用紙を持参し、申し出る。
（どの分野、どの時間帯①コマ～⑧コマ、どこの教室）等を確認する。
③先生の許可が出たら、決めた内容に従って学習する。

切り取り線

３学年ポイントチャンスデー申込書

【資料２】教務部提案：ポイントチャンスデー

４　おわりに

学習指導要領が改訂される際、様々な機会に下の図を目にし、今はその実践の最中にいる。

【図３】学習指導要領改訂の方向性

図の最上段にあるのは、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実」である。資質・能力の３つの柱を身に付けさせる、そのためにも学習評価を今一度しっかり見直すということであり、言い換えれば指導と評価の一体化に他ならない。しかし、「どのように学ぶか」いわゆる「主体的・対話的で深い学び」という視点からの指導法に目が向きがちではないだろうか。ここ数年、「定着」という言葉を聞かなくなったことに気づいた。私だけだろうかと疑問に思い、同地区の数人の校長先生に尋ねるとやはり同じであった。

資質・能力は「育成」であり、「定着」ではないからかもしれない。何れにしても身に付けさせたい資質・能力が身に付いたのかどうかが問われる。そのために、学校全体として何ができるのかが問われている。意識改革の次の段階として学校の実態、実情に合わせた行動改革が求められているのではないか。

とおやま　ひでき
南中（現水沢南中）、東水沢中、鳥海中、山目中、県立総合教育センター、県教委学校教育室、水沢南中副校長、県立一関第一高等学校附属中副校長、県教委学校教育室学力向上担当課長を経て、令和５年度から現任校勤務。

解説　「高校教育」からのアプローチ

ここ（葛高）にしかない出会いと学びを

－夢を実現する原動力－

岩手県立葛巻高等学校
校長　　**菅　常久**

1　はじめに

昭和23年4月1日、岩手県立沼宮内高等学校定時制葛巻分校に端を発する本校は、昭和45年4月1日、全日制普通科6学級の高等学校として現在の地に設置され、今年で創立75年目を迎えた。昭和60年に生徒数405名を数えたのをピークに、少子化の波は本校にも及び、現在の全校生徒数は138名である。

予餞会後の全校記念写真（R4）

地域に高校を存続させることが町の活性化に不可欠で、教育に予算を確保することこそ人材育成の基盤と考える葛巻町と本校が緊密に連携することで、他には例を見ない様々な取組が可能となった。町と学校が手を取り合うことは、生徒の夢の実現を大きく後押しする土台（プラットホーム）に成り得る。地域と一体となった取組の幾つかを紹介したい。

2　葛巻地域連携型中高一貫教育

平成14年4月1日に始まり22年目を迎えたが、次の各事業を当初から継続している。

(1)　中高交流授業

英語、数学で週1回実施。本校からは火曜日に英語科及び数学科教員が連携3中学校に出向き、中学校からは水曜日（英語）、金曜日（数学）に来校し授業を行う。両校の教員によるティーム・ティーチングを基本とする。不定期ではあるが、他教科も実施している。

葛巻中（英語）

江刈中（英語）

小屋瀬中（数学）

本校での交流授業（英語）

(2)　部活動交流

町内3中学校と本校に共通する部活動（野球、バスケットボール、バレーボール、ソフトテニス、卓球、サッカー）で、体験入部や合同練習などを実施したほか、本校郷土芸能部が葛巻中学校に出向き、伝承する葛巻神楽を中学生に指導する取り組みを昨年度から継続している。

舞の動きを一緒に確認（葛巻中）

(3)　合同奉仕活動

毎年７月中旬、本校生徒が卒業した３中学校周辺を中学生と一緒に清掃活動し、町外、県外出身者は学年毎の清掃活動に参加する。

サクラソウを守るために（小屋瀬地区）

地区の公民館清掃（江刈地区）

『ふじしまの森』の下草刈り（1 学年）

本校周辺の清掃活動（３学年）

葛葉荘周辺の清掃活動（葛巻中と２学年：R4）

(4)　合同芸術鑑賞会

町内３中学校生徒と本校生徒が合同で一流の芸術に触れる事業。昨年度は、演劇集団アルファーによる演劇『竜馬からの手紙』を鑑賞し、今年度は役場庁舎内を会場に、新しい試みとして本県出身のロックバンド“Sato Mansion”を招き、現代音楽を鑑賞した。

俳優陣との記念写真（R4）

(5)　中学生一日体験入学

連携中学の３年生と希望する町外中３生を対象に、生徒会執行部との交流、部活動体験に加え、今年度は新たに授業体験も取り入れた。

生徒会主催の全体会（学校概況等の説明）

授業体験（化学）

部活動体験（剣道部）

⑹『よいっこ』（葛巻地域中高一貫教育だより）

中高連携事業等の周知を目的に、年３回発行の機関紙。全戸配布を継続。

昨年度と今年度第１号の「よいっこ」

そのほか、合同の進路講演会も開催している。

３　葛巻町からの支援と町と協働した取組

⑴　くずまき山村留学制度

県内初の特例として認められ、当時全国的にも珍しかった「山村留学」は、町が親代わりとなり、全国から生徒を募集する。１名の山村留学生が入学した平成27年度に始まり、９年目を数える。『くずまき山村留学生寄宿舎』を令和元年度に町が完成させたこともあり、全国から本制度を利用し生徒が入学するようになった。次の表は年度ごとの留学生数である。

H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
1	3	3	4	11	16	10	12	6

親元を離れ、不安を抱きがちな寄宿舎生が、３年間の高校生活を安心して送ることができるよう、学校と町教育委員会、寄宿舎職員、公営塾関係者が、生徒理解と支援の在り方を目的とした情報交換会を毎月開催している。また、町教育委員会は、寄宿舎生への面談も毎月行うとともに保護者会も立ち上げるなど、地域が一体となって寄宿舎生の健全育成に取り組んでいる。

⑵　葛巻町学習塾

「葛巻町から葛高生への全力応援宣言！！」

平成29年９月15日に開設された公営塾は、本校生は無料で利用できるが、これも町が塾経営会社と提携し経費を負担しているからだ。

年度によって通塾率は上下するが、概ね７割弱から８割強の生徒が通塾し、生徒には好評だ。

個々の生徒の通塾状況や学習進捗状況を公営塾と情報共有し、互いの指導に役立てている。

⑶　その他の町からの多大な支援

ア　通学費補助

６系統（町内３、町外３）のスクールバスが無料で利用できるほか、久慈、山形方面のJRバス利用生徒等を対象とした補助がある。

イ　給食制度

町立学校給食センターで調理された給食を県立高校の本校も利用できるのは、町の特段のご配慮による。希望者は主食を持参するだけで、バランスの取れた食事を摂ることができる。さらに、希望者にはくずまき高原牧場産の新鮮な牛乳一本も無料で提供される。その他、新入学生の制服購入費補助、英語検定受験料補助など多方面で支援いただいている。

⑷　ばず部（町主催の部活動）

行政と民間の垣根を越えた地域づくり組織「くずまき観光地域づくり協議会」を町が立ち上げ、くずまき型DMOを推進。協議会の構成は４部会で、その一つに『若者高校生検討部会』がある。

サンタが家にやってくる（R4）

この部会を通称「ばず部」と呼んでいるが、バズマーケティングの「バズ」と蜂の方言「ばず」に由来する。新しいアイディアで葛巻町の魅力を発信する活動に本校生徒（今年度は15名）も参加している。

手形で看板つくり（R4）

4　本校の魅力をさらに増すために

葛巻町にある学校だからこその魅力をさらに向上させ、「どうすれば学校がもっと良くなるか」、「生徒の力をもっと伸ばすには何をすればいいのか」、「地域の人材や文化資産を学校に活かすには」など、次々に新しいアイディアを教職員が提案してくるのが本校であり、それらアイディアが学校の魅力向上につながっている。

(1)　総合的な探究の時間の充実

「葛高ミライノカタチプロジェクト」と称し、第１次グランドデザインに従い進めている。全校生徒が１日地域に入って探究するフィールドワークの日も設けている。

中学から継続するカワシンジュガイの研究

手作り水車発電装置の実装実験（R5）

(2)　販売実習の一環で町のイベントに参加

商業科目選択生徒が、仕入れから販売まで手掛け、売上金は日本赤十字社を通じ災害被災地へ義援金として送った。

おでってマーケット（R3）

(3)　ホームページの刷新

「葛高の魅力をもっと伝えたい。」からホームページを刷新したいと強い提案を受け、町と地域の協力で実現できたものである。

http://www2.iwate-ed.jp/kuz-h/

5　むすびに

町や地域と連携・協働した取組を継続していることが、本校に集う生徒の夢を実現する環境を創り上げたと言える。町内出身者に加え、県内や全国出身者も在籍する本校はまさに「ダイバーシティ」だ。本校での出会いが多感な時期の高校生に人間的な化学変化を呼覚まし、中高連携等、葛巻町だからできる学びと伴走する熱意溢れる本校教員との出会いこそ、夢を実現する原動力だと確信している。

「葛高（ここ）でしかできない出会いと学びを」

かん　つねひさ
令和３年４月から現職。

解説　「特別支援教育」からのアプローチ

特別支援学校における学習評価の工夫
－「触察」の活動を取り入れた授業に関する考察－

岩手県立盛岡視覚支援学校
校長　**近藤　健一**

1　はじめに

学校における学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものである。学習評価の目的は、児童生徒の学習状況を的確に捉えることにより、①教師が指導の改善を図ること、②児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすることである。そのためには、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められる。

学習指導要領に示されたこの基本的な考え方を念頭に置きつつ、本稿では、特別支援学校における学習評価について、関係資料等の該当する個所を示しながらその要点を整理する。次に、本校小学部重複障がい学級における「触察」の活動を取り入れた授業例を通して、学習評価の進め方について紹介し解説としたい。

2　特別支援学校における学習評価

(1)　学習評価の充実

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領総則においては、学習評価の充実についての配慮事項が示された。これにより、指導と評価の一体化の必要性が明確に示された。

> ・児童又は生徒のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。
> ・各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

学習指導要領解説では、日ごろの学習活動を通じて、児童生徒一人一人のよい点や可能性を積極的に評価し、児童生徒の主体性や意欲を高めるようにすることの重要性が示されている。これは、従前から特別支援教育において大切にされてきた視点でもある。

また、障がいの程度や発達の状況によっては、ねらった力が身につくのに時間がかかったり、場面・状況によって力を発揮できたりできなかったりすることがある。そのため、１単位時間の授業毎にすべての観点を評価するのではなく内容や時間のまとまりで評価すること、学習の成果だけでなく学習の過程を一層重視することが大切であることが示されている。

他者との比較ではなく児童生徒一人一人のもつよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、学年や学期にわたって児童生徒がどれだけ成長したかという視点を大切にすることも重要である。

総則では他にも、下記２点の配慮事項が示されている。

> ・個別の指導計画に基づいて行われた学習状況や結果を適切に評価し、指導目標や指導内容、指導方法の改善に努めること。
> ・組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて児童又は生徒の学習の成果が円滑に接続されるよう工夫すること。

(2)　観点別学習状況の評価の導入

「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（2019）において、学習評価に関する基本的な考え方は障がいのある児童生徒においても同様であることが示された。また、障がいのある児童生徒に係る学習評価については、一人一人の児童生徒の障がいの状態等に応じた指導と配慮及び評価を適切に行うことを前提としつ

つ、以下のような観点からの改善が必要であることが示された。

・知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科においても、文章による記述という考え方を維持しつつ、観点別の学習状況を踏まえた評価を取り入れることとする。
・（個別の指導計画に基づく評価等と指導要録の関係の整理に関する記載）（略）

「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（2019）では、指導要録の主な改善点として、特別支援学校における観点別学習状況の評価について示している。

特別支援学校（知的障害）各教科については、特別支援学校の新学習指導要領において、小・中・高等学校等との学びの連続性を重視する観点から小・中・高等学校の各教科と同様に育成を目指す資質・能力の三つの柱で目標及び内容が整理されたことを踏まえ、その学習評価においても観点別学習状況を踏まえて文章記述を行うこととしたこと。

特別支援学校においても３観点での学習評価を行い、児童生徒の資質・能力の育成に向けて教育活動を充実させていくことが求められている。

⑶　指導と評価の一体化

指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることの重要性を表す言葉が「指導と評価の一体化」である。特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料（2020）（以下、「学習評価参考資料」）では、指導と評価の一体化について以下のように示している。

・指導と評価の一体化を図るためには、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に 生かしていくことが大切である。

⑷　学習評価の基本的な流れ

「学習評価参考資料」等から、学習評価の進め方や評価基準の作成手順等について確認する。

ア　評価規準の作成の必要性

・各教科等の評価については、学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」と「評定」が学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施するものとされている。
・知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校においても、学習指導要領に示す目標の実現の状況を判断するよりどころとして、評価規準を作成することが必要である。

イ　学習評価の進め方

①「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する
②単元（題材）の目標を作成する
③単元（題材）の評価規準を作成する
④指導と評価の計画を立てる
⑤授業（指導と評価）を行う
⑥評価の総括を行う

ウ　「内容のまとまりごとの評価規準」

・「内容のまとまり」とは、学習指導要領に示す各教科等の「２ 各段階の目標及び内容 (2) 内容」の項目等をそのまとまりごとに細分化したり整理したりしたもの。
・「(2) 内容」の記載事項の文末を「～すること」から「～している」と変換したもの等を、「内容のまとまりごとの評価規準」と呼ぶ。
・ただし、「主体的に学習に取り組む態度」に関しては、児童生徒の学習への継続的な取組を通して現れる性質を有すること等から、「(2) 内容」に記載がない。そのため、各段階の「(1) 目標」を参考にして「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する必要がある。

エ　「内容のまとまりごとの評価規準」の作成手順

「学習評価参考資料」P.20 から、各教科等における作成手順が示されているので参照のこと。本稿では、「小学部生活科１段階の内容 ア 基本的生活習慣」の評価規準を例示する。

学習指導要領(2)内容	知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
	簡単な身辺処理に関する初歩的な知識や技能を身に付けること。	簡単な身辺処理に気付き，教師と一緒に行おうとすること。	※内容には，学びに向かう力，人間性等について示されていないことから，生活科の目標(3)及び1段階の目標ウを参考にする。

内容のまとまりごとの評価規準（例）	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	簡単な身辺処理に関する初歩的な知識や技能を身に付けている。	簡単な身辺処理に気付き，教師と一緒に行おうとしている。	食事や用便等の生活習慣に関わる初歩的な学習活動を通して，自分のことに取り組もうとしたり，生活に生かそうとしたりしている。

特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料(2020)より

3　「触察」の活動を取り入れた授業について

本校は、視覚障がいを対象とした特別支援学校である。視覚障がいのある児童生徒の場合、事物・事象の全体像を捉え、必要な情報を抽出して、的 確な概念を形成することが難しい。視覚障がい教育では､児童生徒が触覚を用いて、対象物の形や大きさ、手触り、構造、機能等を観察することで概念を形成できるようにするために､「触察」を取り入れた活動を重要視している。

本校小学部重複障がい学級には、視覚障がいと知的障がいを併せ有する児童が在籍している。

重複障がい学級では、各教科等を合わせた指導の中で､「さわる・くらべる・よく見る」という単元名で触察の授業を行っている。

「さわる・くらべる・よく見る～たまねぎ～」の授業の様子

本稿では、生活単元学習において、畑で栽培した野菜（かぼちゃ）の触察を中心の活動とした授業を構想し、その学習評価の進め方について考察する。

(1)　授業の概要

・単元名「さわる・くらべる・よく見る～かぼちゃ～」

・単元計画

①かぼちゃの生育状況を触って確かめる

②「どででんかぼちゃ」､「ぼくのかぼちゃ」の読み聞かせを聞く

③かぼちゃを収穫する

④そのままのかぼちゃを触察する

⑤切ったかぼちゃを触察する

(2)　内容のまとまりごとの評価規準

本単元の中心的活動である収穫・触察、関連する活動の絵本の読み聞かせに対応する教科として生活、国語の評価規準を作成した。

〔生活〕１段階　生命・自然

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
身の回りの自然について関心をもっている。	身の回りにある自然に気付き、それをみんなに伝えようとしている。	自然に触れることに関わる学習活動を通して、対象物に自ら働きかけようとしている。

〔国語〕1 段階〔思考力, 判断力, 表現力等〕の「A 聞くこと・話すこと」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
身近な人の話し掛けに慣れ、言葉が事物の内容を表していることを感じている。	教師の話や読み聞かせに応じ、音声を模倣したり、表現や身振り、簡単な話し言葉などで表現したりしている。	言葉を通じて積極的に人にかかわったり、学習の見通しをもって思いをもったりしながら、言葉を使おうとしている。

(3)　生活単元学習の単元の目標

〈知識及び技能〉

・かぼちゃについて関心をもつ。

・言葉と実物の結びつきを感じる。

〈思考力、判断力、表現力等〉

・そのままのかぼちゃや切ったかぼちゃに触れ、違いに気付きみんなに伝える。

・絵本で表現されている繰り返し言葉を真似たり、動作を身振りで表現したりする。

〈学びに向かう力、人間性等〉

・そのままのかぼちゃや切ったかぼちゃに自ら触れる。

・読み聞かせの活動を通して、教師や友だちとのかかわりを楽しむ。

(4) 単元の評価規準

〔収穫・触察〕

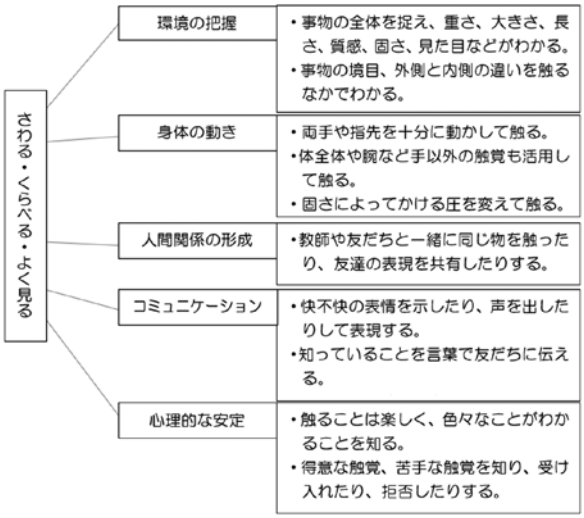
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
畑に植えた野菜（かぼちゃ）について関心をもっている。	そのままのかぼちゃと切ったかぼちゃの違いに気付きみんなに伝えようとしている。	収穫や触察の活動を通して、かぼちゃに自ら働きかけようとしている。

〔絵本の読み聞かせ〕

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
絵本の読み聞かせを通して、絵本の言葉が実物（かぼちゃ）を表していることを感じている。	教師の読み聞かせに応じ、繰り返しの言葉を模倣したり、身振りで表現したりしている。	絵本の読み聞かせを通して、教師や友だちとのかかわりに期待感をもっている。

(5) 自立活動との関連

視覚からの情報を得ることが難しい児童にとって、触覚を活用した体験を通して情報を得て事物の理解を進めていくためには、自立活動の内容項目と関連付けて授業を行う必要がある。自立活動は、学校の教育活動全体を通じて適切に行うこととされており、各教科等の指導においても自立活動の指導と密接な関係を図って行われなければならない。



触察を取り入れた活動と自立活動の関連

自立活動は、３観点による目標や内容の設定はされておらず、あくまで一人一人の学習上・生活上の困難に応じて指導されるものである。しかし、学習指導要領や解説に「各教科等において育まれる資質・能力を支える役割」、「教育活動全体を通して育成を目指す資質・能力」という記載があることを考慮すると、学習の成果等について、３観点を参考に分析的に見とることは有効であると考える。

例えば、手を使った探索活動に消極的だったり、慣れない物には触りたがらなかったりするという実態のある児童の場合、以下のような評価も可能であると考える。

〈環境の把握〉
・触ったことのない物に短時間触れることができ、その質感を感じていた。（知識・技能）
・苦手な触感の物に触れた時に、触りたくないという気持ちを態度で表していた。（思考・判断・表現）
・ビニール手袋を着けて触わるなど、代替的な手段を使った触察活動に粘り強く取り組んだ。（主体的に学習に取り組む態度）

4　おわりに～指導と評価の一体化を目指して

本校小学部重複障がい学級の児童にとって触察は重要な学習活動ではあるものの、どの教科領域で学ぶかは不明確な部分があった。本稿では、従前から取り組まれている触察を生活単元学習において行う構想を立てること、その場合の学習評価を分析的に行い、学習評価の進め方の一例を示すことができたと考える。あくまで構想であり実践を通していないものではあるが、従前の取組をカリキュラムマネジメントの視点で再構築する試みでもあった。

次の単元構想としては、さつまいもの収穫・触察を行い、関連する活動として調理活動と誕生会を設定したい。その学習活動を通して、どの場面でどの観点をどのように見とるのかという評価の計画、実践を通しての評価の総括までを検証したいと考える。評価の結果によって後の指導を改善する、「指導と評価の一体化」を目指して、更なる取組を進めていきたい。

こんどう　けんいち
盛岡養護学校都南校、花巻養護学校、西和賀高校、盛岡となん支援学校に勤務。県教育委員会学校教育室指導主事、総合教育センター主任研修指導主事、前沢明峰支援学校副校長、県教育委員会学校教育室特別支援教育課長を経て、今年度より現職。

提言

公教育のみで英語を学び仕事で英語を使っている私が思う中高の英語教育のあるべき姿

コミューン株式会社
代表取締役ＣＥＯ　**高田　優哉**

1　まえがき

わたしは、東京とカリフォルニアを拠点にＩＴベンチャー企業「コミューン株式会社」を経営する起業家です。（あらゆる組織とひとがつながるオンラインコミュニティを簡単に作れて効果的に運用できるソフトウェアを提供しています。）

岩手県野田村で中学卒業まで育ち、不来方高校の外国語学系に進学。東京大学農学部に進んだ後、外資系コンサルティング企業で４年間勤務し、2018 年に当社を創業しました。前職のコンサルティング企業では中国やアメリカを拠点として英語を活用して仕事をしておりましたし､現職でも海外とのやり取りが多くあります。ネイティブ、とまでは行きませんが、日本人の中ではかなり高い英語力である、と自負しています（イメージで言うと、少人数のネイティブとの会話であれば先方に気を遣わせずに会話できるレベル）。よく「日本の英語教育は英語を話せるようになるものではない」という言説を目にしますが、必ずしもそうではなく、教え方によって公教育だけでも十分に世界で通用する英語力を身につけることができるのでは？と考えており、個人的な経験も踏まえて、中高の英語教育がどうあるべきか？について記述させていただきます。

2　英語とわたし

わたしが英語に初めて触れたのは中学１年生の頃。New Horizon という教科書でした。Ms. Green 先生が「One hamburger and two colas please」と言ってファストフードを購入するページを今でも覚えています。中学に入るまでは英語に一切触れておらず、両親も英語を全く話せない環境から初めて英語に触れたので、最初は得体のしれないもの、という印象でした。元々勉強は得意だったので、他の教科同様にそつなくやっていたのですが、あくまで科目の一つ、という位置づけでした。そんなわたしに転機が訪れたのは中学２年生の頃でした。新任の英語の先生が、英文法などではなく、英語で話すことが楽しくなる／身近に感じられるような授業を展開してくれたことで、「英語でコミュニケーションすることは楽しい」と思うようになりました。もっと広い世界を知りたい、国連で働きたい！と思うようになり、不来方高校の外国語学系に進学することを決めました。

高校では会話／発信／リスニングを熱心にやっていて、文法の授業などはぼんやり受けていました。また、大学受験に向けても、英語については特に勉強をしておらず、塾や通信教育もない状況にもかかわらず、東大入試で高得点を取ることが出来ました。

3　英語ができてよかったこと

そもそも英語が出来ると何がよいのでしょうか。他の教科と大きく違う点が３つあると考えています。

⑴　プレイするゲームの規模が変わること

ビジネスをする観点でいうと、例えて言うなら MAX 県大会しか出れないルールでスポーツをやっていたところに、英語が身につけられると全国大会に出れる、という感じです。ポイントは、プレイしているゲーム自体は変わらないことです。例えば私の場合は IT 分野で起業していますが、日本でもアメリカでも同じプロダクトを提供しています。GDP でいうと日本は世界の５％ほどです｡日本の５％は北関東３県。つまり、英語が出来ないだけで、北関東から出れないルールでビジネスをしている状況になってしまいます。

⑵　セーフティネットになりチャレンジできるようになること

日本ではほとんど誰も英語話せません。東大でも純ジャパ（帰国子女や保護者が英語を話す家庭出身者ではない場合）はほとんど話せません。でも、そこそこ英語を必要とする仕事はあります。だから、英語話せるだけで食いっぱぐれなくなります。そうなるとセーフティネットができるので、チャレンジできるようになりま

す。なぜならば、「最悪英語使えば仕事見つかるし」と思えるからです。

⑶　選択肢が増えること

大学時代にOECD（国際機関）でインターンをさせていただいたのも、前職の外資系コンサルティングファームで上海、LAオフィスにて仕事する経験を得られたのも、英語ができたからです。上述の通り日本では英語が話せることが希少だからこそ、英語が話せるだけ（ドイツとか北欧だとみんな英語話せるから驚かれる）で特別な機会が得られる可能性がぐっと高まると考えています。

4　中高の英語教育はこうあるべき

さて、前置きはここまでにして、公教育における英語教育はこうあるべき、という私の視点を記します。あくまでN=1の意見ですし、わたしは教育者ではないので専門的な見地から意見しているわけではないことを予めお伝えしておきます。

⑴　初期は英語は楽しいものである、と思わせよう

英語に心理的なハードルを持ってしまうと、そこから挽回するのはかなり難しいと思います。歌や演劇、小説、漫画など、コミュニケーション言語として他教科に比べて楽しめるコンテンツが豊富なので、それらをうまく活用しながら楽しいものだ、と思わせるのが初期には重要だと思っています。私個人の経験でも、歌をリスニングして穴埋め問題に答えたり、映画の表現を翻訳したり、とても楽しかった記憶があります。

⑵　英語はコミュニケーションツールである、というスタンスで初期こそリスニング、スピーキングを集中してやろう

文法ももちろん大事ですが、最終的にコミュニケーションに使えなければあまり意味がありません。初期は特にリスニングやシャドーイング、スピーキングに重きを置くべきだと思います。理想はフォニックスも中学１年生でやりたいです。文法は記憶ゲームなのであとからなんとでもなりますが、耳（リスニング）や英語で話す脳（スピーキング）は年を取れば取るほど習得が難しいと思います。

⑶　教師が自ら英語を話そう

当たり前のことのようですが、そんなことはありません。わたしが学生時代に接した英語教師の半分くらいは英語を話すことをEmbarrassingなものとして捉えているように見受けられました。別に発音は良くなくても問題ないです。先生が恥ずかしそうにしたり英語を話すことを色々と理由をつけて避けていると、間違いなく生徒は話せません。英語はコミュニケーションツールなので、先生が進んで英語を話すことで、生徒に対して「英語を話すことは恥ずかしくない普通なこと」であると感じてもらうのが肝要だと思います。

5　さいごに

わたしは中学１年生で初めて英語に出会い、それから人生で一度も英語の勉強を自学したことがありません。東大受験でも英語の勉強はせずに80％以上得点していますし、仕事でも英語をガンガン活用しています。今思うと、そうなれた最も大きな理由は、中高で英語を好きになれる授業を受けたからだと考えています。教育論やノウハウなど色々あると思いますが、それらは好き嫌い／身近さみたいな論点に比べると些末だと思います。とにかく英語にアレルギーを持たせず、身近にし、好きにする、ということが重要だと考えます。

また、可能ならなるべく若いうちはとにかくスピーキングとリスニングに注力してほしいです。おとなになってから英語を勉強し始めたひとのリスニングとかスピーキングの“伸び無さ”は本当に深刻な問題なので。

わたしが好きな考え方として、「数学はどの国でも“勉強が得意ではない”生徒はできないが、母国語は学力に関係なくできる」というものがあります。つまり、本来言語習得は頭脳に関係ないもののはずです。５教科の中で英語だけは教え方／学び方次第でどうにでもなるものであると考えており、先生方のお力で、ぜひ一人でも多くの生徒の方の可能性を広げていただければ幸いです。

たかだ　ゆうや
コミューン株式会社代表取締役ＣＥＯ。岩手県野田村出身。野田中学校、不来方高校を経て東京大学文科三類に入学。パリ農工大学留学を経て東京大学農学部を卒業。 新卒でボストンコンサルティンググループに入社し、東京、上海、ロサンゼルスオフィスで戦略コンサルティング業務に従事。
2018年にコミューン株式会社を共同創業し現職。
https://commmune.jp

実践事例

バックワードデザインによる授業改善の試み
－自信を持って英語に取り組む生徒の育成を目指して－

岩手県立岩泉高等学校
教諭　井形　優

1　はじめに

ここ数年、パフォーマンステスト（以下ＰＴと表記）での生徒の様子を観察していると、自分のレベルにそぐわない、難易度の高い語彙を使用してしまっている生徒が多々見られます。生徒たちの話を聞いていると、どうやら自動翻訳への依存傾向が高まっているようです。

たとえば、「森林伐採」を自動翻訳に入力し、出力された deforestation をそのままＰＴで使ってしまいます。しかし、deforestation を上手く発音することができず、相手に伝わらない。相手に伝わらないから、英語に対する自信を無くしてしまう。英語に自信がないから、また自動翻訳に頼ってしまう。このような悪循環が起きてしまっているのです。もちろん、森林伐採を表す deforestation も知っていて欲しい単語ではありますが、「木を切ること」と言い換えて cutting trees とすれば、知っている単語だけを用いて、簡単に、自信を持って言えるはずです。また､たとえ難しい表現であっても、授業でしっかりと習ったものであれば、自信を持って堂々と使えるはずです。

悪循環を生み出す背景を探っていくうちに、自動翻訳に頼る生徒自体が悪いのではなく、「もっと簡単に言える」「授業で習った表現が使える」と生徒に実感させることができていないのが原因ではないかと考えるようになりました。授業がＰＴに向けたスモールステップになっているという実感を生徒に持ってもらうためにも、授業内の言語活動一つひとつの意義を改めて見直す必要があったのです。

以下では、私が授業改善を試みる際に心がけていたことを述べていきたいと思います。

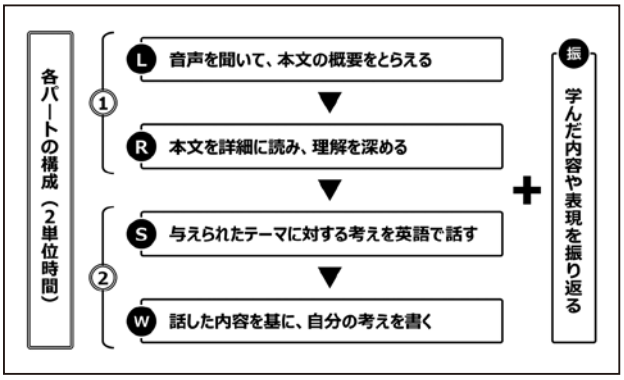
2　実践事例

⑴　バックワードデザインによる授業構築

授業内容を計画する際には、まず単元の目標であるＰＴを設定することから始めています。これにより、単元の終わりに生徒ができるようになっているべきことが明確になります。その目標から、どのパートで何を学んで欲しいかを逆算することで、各パートの目標も自然と決まってきます。ＰＴと授業内容がちぐはぐなものにならないよう、バックワードデザインを心がけています。

⑵　各パートの流れ

単元の内容などにもよりますが、概ね下図に示される流れで各パートの授業を進めています。なお、各パートには２単位時間を充てています。



まず、リスニングを通じて本文の概要をとらえた後に、細部について英文を読んで理解を深めます。そして、聞いたり読んだりした内容に基づき、与えられたテーマについて自分で考えたことを英語で話します。最後に、話した内容を表現や構成等に留意しつつ、文字に書き起こします。また、各単位時間の終わりには、その時間で学んだ内容や表現について振り返り、ＰＴに向けて学びを蓄積していきます。

⑶　授業内における各言語活動

ア　リスニング

各パートの最初には、大型提示装置を使用して生徒とやり取りしつつリスニングを行い、本文の概要をとらえていきます。例えば、下に示されるような流れで進めています。

T:　Look at this photo [ゲルニカの写真].
　　Do you know who drew this?
S:　Picasso!
T:　Yes! Do you know its real size?
　　How big is it?
S:　ペアで推測
〈リスニング〉 This big piece of work, 3.5 m by 7.8 m, was painted by Pablo Picasso, a Spanish artist.

このように、やり取りの中で投げかけられた質問に対してその答えを推測した後に音声を聞くというサイクルを繰り返しながら、生徒たちは本文の概要をとらえていきます。

やり取りを行う理由の一つとして、単元のゴール像を生徒に提示するというねらいがあります。ＰＴをプレゼンテーションで実施する場合、大型提示装置を用いて説明したり、なるべく平易な英語を用いて説明したりする教員の姿は､生徒にとってＰＴのイメージになり得ます。普段の授業における教員の姿がＰＴに臨む際の参考になって欲しいという思いから、リスニングとやり取りをミックスした活動を行っています。

また、生徒に聞かせる英文については、音声に関する気づきがある箇所をなるべく選ぶようにしています。上記の例であれば、音声を注意深く聞くことによって、3.5 が three point five と発音されることや、meter が「メートル」ではなく「ミーター」のように発音されることに生徒たちは気づくことができます。これらは、目で追うリーディングでは気づきづらい部分であり、リスニング活動ならではの学びと言えます。生徒たちがＰＴで実際に英語を使う際には、このような音声に関する気づきを活用するよう、促しています。

イ　リーディング

リスニングを通じて概要を把握した後に、リーディングに臨みます。生徒の学習度合いにもよりますが､英語に苦手意識がある生徒ほど、聞くことよりも読むことに対して抵抗感を抱く傾向があるように感じています。そのような生徒の抵抗感を軽減するためにも、音声を入口として概要をとらえた後にリーディングを行うようにしています。

リーディング活動では、Ｑ＆Ａや正誤問題に留まらないように心がけています。たとえば、ピカソの生涯に関する文章を読んで年表にまとめるなど、テキストタイプを変換する活動を行っています。このようなテキストタイプの変換は、生徒たちがＰＴに向けてスライド等を作成する際のヒントになり得ます。情報を図や表などの形に変換することは、生徒自身の思考整理だけでなく、聞き手に伝わりやすい発表づくりにもつながっていくと考えています。

また、本文で Pablo Picasso, a Spanish artist のように書かれている部分を年表では Picasso was born in (　) のように記載するなど、リーディング活動が単純な答え探しになるのではなく、生徒がその活動を通じて様々な言い換え表現に触れることができるように留意しています。このような言い換え表現を通じて、ＰＴの際に自分の言いたいことを難しすぎる語彙ではなく、等身大の語彙で噛み砕いて伝える意識を醸成することを目指しています。

ウ　スピーキング

スピーキングでは、聞いたり読んだりして理解したことに基づき、与えられたテーマについて自分の考えを話す活動を行います｡ここでは、教科書に関連し、ＰＴにもつながるような開いた質問を生徒に投げかけます。その問いに対する自分の考えを何度もペアを変えながら話していきます。

スピーキングを行う際には、本文の中で使えそうな表現を積極的に用いるように声掛けをしているものの、原稿は事前に書かせず、即興で

話させるようにしています。原稿を事前に書くと、生徒たちはどうしてもその原稿を読み上げてしまいます。これでは書いたものを読み上げるという作業になってしまい、相手にどうにかして自分の考えを伝えようという熱量が少なくなってしまいます。せっかく教室に集まって集団で授業を行っているのであれば、一人でもできる作業ではなく、他者がいて初めて成立するコミュニケーションを行ってほしいという思いから、即興のスピーキング活動を行っています。

手元に原稿が無いので、最初のうちは上手く話せず沈黙してしまう生徒も中にはいます。しかし、何度かペアを変えているうちに、他者の考えや表現を参考にしながら、何とか話し始める生徒がほとんどです。即興のスピーキングは、一見ハードルが高いように感じます。しかし、他者の考えや表現に触れる機会、自分の考えを英語で伝えようと試行錯誤する機会を十分に与えることができれば、生徒たちはそのハードルを越えようと頑張るように感じています。

また、即興で話す活動では、話し手だけでなく、聞き手も非常に重要です。慣れない英語で伝えなければならないという話し手の心理的負荷を和らげてくれるのが聞き手です。聞き手には、頷きや相槌に加えて、話し手が話し終わった後に「あなたの考えは○○ということだね」と端的に要約する役割を与えています。生徒の学習の定着度合いに応じて、英語で要約させたり、英語で質疑応答させたりして聞き手への負荷を調節することができると思いますが、話し手が「自分の考えが英語で相手に伝わった」と実感することが大切だと考えています。

このような実感を得ることができれば、徐々に英語に対する抵抗感が軽減されていきます。英語に対して自信を持てるようになることで、自動翻訳による悪循環から抜け出すことができるはずです。授業で学んだ等身大の表現で十分伝えることができると生徒に実感させることが、この活動の大きな役割だと考えています。

エ　ライティング

スピーキング活動で必死に話していた内容を、今度は文字に書き起こしていきます。このことによって、一歩引いた視点から自分の英語を見つめ直すことができると考えています。

辞書を使わせながら「言いたかったけど言えなかった」ことも含めて、語彙や文法を意識して丁寧に書くように促しています。また、言語面に限らず内容面に関しても、たとえば「主張→根拠→主張の順に、考えを組み立て直して書いてみよう」など、話したことをそのまま文字にするのではなく、情報を再構成して書くように促しています。

テーマがＰＴに関連しているため、ここで書いた内容はＰＴを行う際のヒントとして活用することができます。より効果的に活用できるよう、生徒が書いた英作文を回収し、時にＮＳの力も借りながら、添削を行っていますが、あまりにたくさん添削してしまうと、生徒のやる気を削いでしまいかねません。添削の際にはポイントを絞って行うようにしています。

オ　振り返り

各単位時間の終わりには、その時間で学習したことを振り返る時間を設けています。その際には、教科書の内容に関して理解したことについて（内容面の振り返り）、あるいはＰＴに活用できそうな表現について（言語面の振り返り）など、振り返りを行う際の視点を事前に提示するようにしています。

振り返りは、Microsoft Teams を介して全員で共有している Excel ファイルに入力していきます。紙媒体で振り返りを行うことも可能ですが、共有された Excel ファイルを用いれば、比較的容易に他者の振り返りを確認することができます。他者の学びから気づかされることも多々あるはずです。また、電子媒体で振り返りを蓄積することにより、いつでも、どこからでも過去の単元での学びにアクセスすることが可能になります。他者の学び、過去の学びを糧にしてＰＴに臨んでもらいたいという思いから、

ＩＣＴを利用して振り返りを行うようにしています。

３　成果

授業とＰＴを連動するように心がけるようになってから、ＰＴの際に等身大の平易な英語で話す生徒が徐々に増えてきているように感じています。依然として自動翻訳に頼ってしまう生徒も見られますが、ＰＴ本番の際に「教科書の表現を使ってみよう」「平易な英語に言い換えてみよう」という意思や工夫が感じられた時には、タイミングを逃さず、その努力を言葉にして認めるようにしています。ＰＴは一度きりではなく、単元毎に行っています。「次は等身大の英語で頑張ってみようかな」とより多くの生徒に思ってもらえるよう、地道に声掛けを行っています。

上記のような授業展開で３年間継続して指導を行った昨年度の卒業生においては、生徒の学力の伸びも実感することができました。具体的には、大学進学希望者11名中７名が高校入学後に英語検定準２級以上を取得し、そのうち３名は２級も取得することができました。また、大学入学共通テスト（英語Ｒ・英語Ｌ）において、８割近く得点することができた生徒も見られました。生徒たちの学力には様々な事柄が影響を与えているため一概には言えませんが、ＰＴを主軸に置いた授業展開も生徒の学力向上に貢献しているのではないかと考えています。

４　課題

ＰＴに関しては、効率面での課題が残ります。生徒と一対一のＰＴを行うとすると、準備や入れ替えの時間、フィードバックの時間も含めれば、一人あたり５分程度かかってしまいます。本校は生徒の数が少ないため、一対一で行ってもそれほど多くの時間を必要とはしませんが、一学級40人の規模になれば、ＰＴに充てる時間はかなり長くなってしまいます。ＰＴを簡素化して時間短縮を図ったり、ＩＣＴを活用して成果物をオンラインで提出させたりするなど、ＰＴ効率化のための工夫を考えていく必要があります。

しかし同時に、一対一のＰＴにこだわりたいという思いもあります。たとえ日頃「英語が嫌いだ、苦手だ」と口にしていても、ＰＴでは、どの生徒も全力を尽くそうとしているように感じます。本番に向けて時間を見つけてコツコツと準備をし、本番になれば緊張してガチガチになりながらも、自分の考えをどうにかして英語で伝えようと試行錯誤します。生徒が最も英語に本気で向き合う瞬間がＰＴだと言っても過言ではないように思います。生徒の本気に正面から向き合い、その努力を言葉にして認めてあげることは、「次のＰＴも頑張ろう」というモチベーションにつながっていきますし、生徒との信頼関係構築にもつながります。モチベーション向上や信頼関係の構築が、次の単元の学習に対してプラスに働くことは言うまでもありません。

このように、ＰＴには英語の力を測ること以外にも、様々な教育的役割があると考えています。この役割を損なうことなく効率化を図る手立てを模索していくことが、今後の課題です。

５　おわりに

ＰＴと授業とを連動させることの重要性は、もともと頭では理解していたつもりでした。しかし、自動翻訳に頼ってしまう生徒を観察することをきっかけとして、自分の授業を振り返り、一つひとつの言語活動の意義を改めて見直すことで初めて、その重要性が改めてストンと腑に落ちたように感じています。

生徒の姿は、自分の指導を映す鏡です。今後も生徒を観察しながら、自分の指導改善に努めていきたいと思います。

いがた　ゆう
平成28年度より４年間、一関第二高校に勤務。令和２年度より現任校に勤務。

全体会　教育長挨拶

令和４年度第 66 回岩手県教育研究発表会 教育長挨拶

岩手県教育委員会
教育長　**佐藤　博**

令和４年度岩手県教育研究発表会の開催に当たり、主催者を代表し御挨拶申し上げます。
今年度も多くの先生方にご参加頂き、研究の成果を元に研鑽を深めることに、心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症は、流行から４年目となる現在も収束は見通せない状況にあります。学校現場では、児童生徒に加え教職員の感染も相次いでおり、厳しい学校運営を余儀なくされています。皆様には、安心、安全な学校を守りつつ、子供たちの学びの機会を保障するという強い信念の下、日々の教育活動に御尽力いただいておりますことを、本当に心強く感じております。

本研究発表会の趣旨は、岩手県の教育課題を解決するために、県内各学校・園及び教育関係機関における実践研究の成果を広く教育関係者に公開し、その理解と普及を図り、もって本県の教育の向上に資することにあります。この機会を通じて､岩手の子供たちをどう育てるのか、そのために本県教育はどうあるべきか、率直に意見を出し合っていただきたいと、大きな期待を寄せております。

本日は、全体会において、東京学芸大学 森本康彦 教授に御講演いただきます。また、令和２年度から岩手県教育委員会、岩手大学、岩手県立大学が連携して進めて参りました「いわて学びの改革研究事業」のまとめとなる発表が行われます。森本教授はじめ、各分科会における実践研究の発表等に快く応じていただきました講師の先生方、発表者の先生方に心から感謝申し上げます。

東日本大震災津波の発災から、まもなく 12 年目を迎えます。復興に向けた歩みは着実に進んでおりますが、一方で、未だ厳しい状況にある被災者の方々や、様々な困難を抱える子供たちもおります。

県教育委員会といたしましては、引き続き、心のサポート体制の充実など、子供たち一人ひとりに寄り添った支援に取り組むとともに､「いわての復興教育」の一層の推進などを通じて、学びの場の更なる復興と、その先をも見据えた教育の充実に取り組んで参ります。

また、「いわて県民計画（2019 ～ 2028)」の基本目標である「東日本大震災津波の経験に基づき、引き続き復興に取り組みながら、お互いの幸福を守り育てる希望郷いわて」のもと、岩手県教育振興計画の基本目標である「学びと絆で　夢と未来を拓き　社会を創造する人づくり」の実現に向けて、本県が持つ多様な豊かさや、人のつながりなどの強みを生かしながら、本県の未来を創造していく人づくりに取り組んで参ります。

さて、国が掲げるＧＩＧＡスクール構想に伴い、本県でも各学校への１人１台端末、及び高速大容量の通信ネットワークの整備を進めて参りました。今後はさらにＩＣＴを学習のツールとして適切に用い、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、資質・能力が確実に育成できる教育環境を実現することが求められています。

このような中、小学校、中学校に続き、高等学校でも新学習指導要領が施行された今年度は、全体テーマを「新しい時代に必要な資質・能力の確実な育成を目指して～ＩＣＴを活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実現～」と設定し、研究発表会の内容を構成しました。

また、今年度は、感染症拡大防止、ＩＣＴの活用推進、教職員の働き方改革の観点から、集合型、ライブ型、オンデマンド型の３つの形態で実施します。子供たちとともに、私たち大人も、新しい時代に柔軟に対応していくための試みであることを御理解いただきたいと思います。

本研究発表会が、ＩＣＴの効果的な活用について思索し、これからの岩手を担う子供たちが身に付けるべき資質・能力を再確認する場となり、本県教育を力強く進めていく足がかりとなりますよう、御参加の皆様には、集合型、ライブ型を問わず、ぜひ、積極的な議論をいただきますようお願いいたします。本研究発表会が、御参加いただいた皆様の一層の研鑽の機会となり、岩手の子供たち一人一人の「主体的・対話的で深い学び」につながっていくことを期待して主催者からの挨拶といたします。

どうぞよろしくお願いいたします。

令和４年度岩手県教育研究発表会報告

２月９日（木）の「全体会」には、集合型とライブ型を合わせて 384 名の方々のご参加をいただきました。講演会では、東京学芸大学　教授 森本 康彦 先生から、発表会テーマでもある「新しい時代に必要な資質・能力の確実な育成を目指して～ＩＣＴを活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実現～」を演題としてご講演いただきました。普段の授業での具体的なＩＣＴ活用場面や、子供が自分の「学びの足跡」を振り返るために有効なｅポートフォリオとしての活用などを交え、「なぜ学びにＩＣＴを活用するのか」という根源的な問いについて、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」との関連をわかりやすく示しながら、明快にご教示いただきました。

講演会終了後には、研究最終年度を迎えた「いわて学びの改革研究プロジェクト発表」を実施しました。ＩＣＴ活用の実践研究を継続してきた県内７校から研究発表が行われ、参加者からは集合型、ライブ型問わず、多くの質問が寄せられました。

２月 10 日（金）は、分科会を行いました。集合型、ライブ型を合わせて 403 名の方々のご参加をいただきました。

今年度の特設分科会は、本県の教育課題を踏まえた特設 1「学力向上」、特設 2「カリキュラム・マネジメント」、特設３「生徒指導」の３つを設定しました。

分科会は、各教科、領域、教育課題等の 18 分科会を設定し、71 主題の授業実践、研究成果の発表がありました。また、各専門分野のエキスパートによる講演会を６本、先進的な実践を行っている先生方をお招きしてのパネルディスカッション、シンポジウムを４本開催したほか、県教育委員会事務局の指導主事による伝達講習も行うなど、分科会ごとに充実した内容となりました。

企画展として６つの展示を行いました。「学校紹介写真展」では、令和３年４月に開校した大船渡市立東朋中学校から、生徒諸君の生き生きとした学びの姿を写真で紹介しました。「学生科学賞入賞作品展」では、令和４年度第 66 回日本学生科学賞岩手県審査会における入賞作品を展示し、県内中・高等学校生徒の研究の成果を披露することで、科学研究推進の一助としました。「理科教材展」では、総合教育センター理科教育担当の研修指導主事が開発した教材及び所員研究の授業実践で用いたＩＣＴ教材を展示し、来場した参加者に体験してもらいました。「特別支援教材展」では、令和４年度に県立特別支援学校教諭として採用された先生方から、初任者研修講座の中で作成した教材・教具の紹介をいただきました。「学校公開資料展」では、25 校から研究内容及び成果報告があり、県内の教育活動の充実につなげることができました。「教職大学院展」では、岩手大学教職大学院生９名が作成したポスターを展示し、貴重な研究成果を県内に周知することができました。

オンデマンド型として２月 17 日（金）～３月２日（木）までの 14 日間、YouTube で講演、発表等の動画を配信しました。オンデマンド型で参加した方はのべ 1,164 名と、大変多くの方に視聴いただきました。オンデマンド型のみでの参加のほか、集合型、ライブ型で参加した方が、オンデマンド型も活用して何度も講演等を視聴した、という例が数多く見られました。

集合型、ライブ型、オンデマンド型、３つの形態で実施するに当たりましては、講演会講師をはじめ、多彩な教育実践等を発表してくださった発表者の皆様、発表に対する助言をいただいた助言者の皆様、企画展にたくさんの資料提供をいただいた各学校の皆様、そして、新しい試みの実施に当たり、ご支援とご協力を賜りました後援団体の皆様をはじめとする関係各位に心から感謝申し上げます。

全体会　講演会

新しい時代に必要な資質・能力の確実な育成を目指して

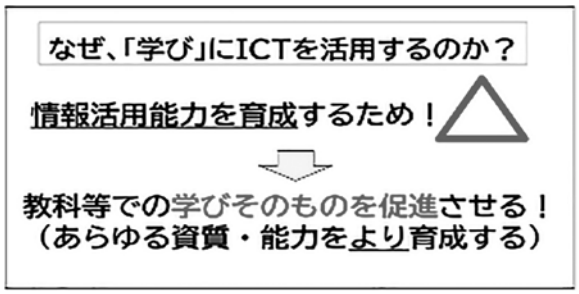
－ＩＣＴを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現－

東京学芸大学
教授　**森本　康彦**

我々教員の目標は、授業でＩＣＴを使うことではありません。目の前の子供達に対して、授業や活動を通して、学びながら成長していくことをいかに支えるか、授業をどう創って、子供達の成長を見取っていくかということがミッションであり目標です。

ＩＣＴを使うことによって、学びが小さくなってしまうのであれば、ＩＣＴは使わなくていいのではないでしょうか。しかし、ＩＣＴを使って、今やっている授業がよりよくなるのだったら、絶対に使った方がいいということになります。たとえば、ＡＫＢ 48 の歌で、「365 日の紙飛行機」という歌があります。紙飛行機が、どこまで飛んだかを競うのではなく、どこをどう飛んだかがとても大切であり、教員達はその子供達がどこをどう飛んでいるかを見取り、伴走しながら支えるのです。クラスに子供達が 30 人いれば 30 通りの学びの支え方があるはずです。これこそが、「個別最適化」です。もっと言うと、多くの先生方が力を合せて、子供達の１人１人を６年間／３年間を通して、まるで大玉を大切に転がしていくように支えていくイメージです。これが、「個別最適な学び」ということになります。この「個別最適な学び」に、ＩＣＴはとても相性がいいのです。

なぜＩＣＴを活用するのでしょうか。「情報活用能力を育成するため！」と言いたいところですが、それだけでは不十分な回答になります。ＩＣＴは授業等での学びそのものを豊かにするため、促進させるために活用します（図１）。ＩＣＴを上手く活用すれば、教科で育成すべき資質・能力だけでなく、これからの社会を生きていく上で必要となる基盤的な資質・能力さえも高めることができるでしょう。



【図１】

教育というものは、我々教員が学校だけで行うものだという感覚が、いつの間にか染みついしまったのではないでしょうか。人類が誕生してから、実は教育は４回チェンジしています。

始めは Society1.0、狩猟社会の時代です。これは、数万年続きました。もちろん、この時代にも教育はありました。より良く生きていくために、大人が子供に教えなければならないことはたくさんあったと思います。それは、命や生活に密着した内容が多かったと思います。

次は Society2.0、農耕社会の時代です。この時代になると、皆が村に集まり、集落で一緒に暮らし始めます。そして田畑で作物を育てて生活していくことになります。そうすると、大人が子供に教えなければならない教育の内容は激変します。まだ学校はありませんが、ここでもより良く生きるための教育が行われていました。

次は、Society3.0、産業革命による工業社会です。人は企業をつくり、そこで働いて、働いた分の賃金で生活していくことになります。大きな働き方改革が起きました。会社に入り仕事をするためには、たくさんのことを知らなければならないということで、学校ができはじめます。そこでは、知識を習得することがとても大切で、学校に行かなければ学べないことがたく

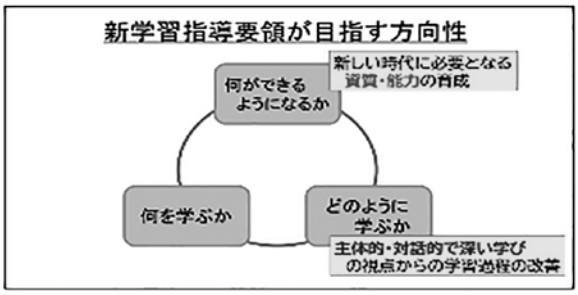
さんありました。だから、何が何でも学校に行って勉強しなければいけなかったわけです。今行われているような学校教育が始まったのは戦後です。全員が同じように学校に行き、教科書を使って教えていくスタイルを定着させました。この Society3.0 の昭和の学校教育で重視されたのは、知識を正確に記憶する基礎学力、忍耐強さ、あらかじめ定められた計画を着実にこなす正確さ、でした。つまり、決められた計画に則り、忍耐強く知識を身に付けなさいという教育だったと言えます。そこでは、一斉授業を通し、知識を与え、それが頭に記憶されたかどうかをテストで測定（評価）するという単純なモデルが採用されました。その結果、知識偏重の教育になり、挙句の果てには、学歴社会とも言われる世の中が出来上がっていったのでしょう。

そして、1990 年後半に４度目の働き方改革が起きます。それが、Society4.0、知識基盤社会です。知識をただ暗記しただけでは問題解決は難しく、協働、イノベーション／探究が求められるようになりました。知識はとても大切です。しかし、知識を習得することはスタートであって、知識を活用しながら問題解決していく力こそが必要だとわかってきたのです。そこで、仲間と対話を通して協働しながら問題解決していくような学び方、そのための資質・能力を育成していくことが求められるようになりました。何が重要かを自ら判断して、それを協働で解決していくようなことを繰り返すことによって、学び方や仕事の仕方、生き方を同時に学び、習得した知識を生きて働く力に変えていくことができるようになるのではないでしょうか。今、これからお話をする「主体的・対話的で深い学び」は、Society4.0 時代の新しい授業のスタイル、やり方ということになります。

そして今、Society4.0 が 30 年余りしか経っていないにも関わらず、次の時代に移ろうとしています。それが、Society5.0 なのです。

さて、話を変えましょう。人が学びや仕事、スポーツなど何か「活動しよう！というときに、一番大切なことがわかってきたのですが、それは何だと思いますか？…　それは、「よし！やろう」という思い、決意みたいなものです。これを、学びの文脈では「主体性」と呼んでいます。しかし、実際にこの主体性を引き出すことは難しいことで、子供達の主体性を引き出すことこそ今どきの教員の一番の仕事になりました。要は、主体性は無理やり外発的な動機づけを行っても長続きしないことがわかっており、子供達の内側から溢れてくるものでなければなりません。そのために必要なのは、児童生徒理解、学級経営を通した学ぶ集団づくり（クラスづくり）なのです。学びのコミュニティづくりといいますが、、、我々教員にとっては、ずっと大切だと思っていたことなんですけどね。

今回の学習指導要領では、何ができるようになるかという、新しい時代に必要となる資質・能力の育成、どのように学ぶかという、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの学習過程の改善が目指す方向性として示されています（図２）。

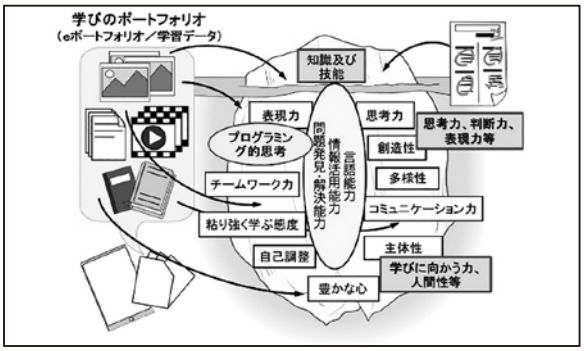


【図 2】

子供達に育成すべき資質・能力は、たくさんあります。しかし、それらは「これです！」と明確にされているわけではありません（明確にできるものでもありません）。そのため、学習指導要領では３つの柱で説明しようとしています。

人間が有しなければならない資質・能力は、よく氷山モデルを用いて説明されます（図３）。水から見える部分はとても小さいですが、ここが「知識及び技能」に当たります。この資質・能力は比較的簡単に見取れます。一方、水の中に隠れているところはとても大きくて、この部分が大きければ大きいほどぐらつきません。この見えない下の部分こそ、とても大切な資質・

能力で、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に対応するものです。一見よく見えないけれど、この資質・能力が大きければ大きいほど、学ぶ力は高まり、人間的にも豊かになっていくと言えます。



【図 3】

水から見える部分の「知識及び技能」はとても大切ですが、全体からみたらとても小さく資質・能力の一部分でしかないので、この部分だけで人を判断（評価）してしまうのは時代錯誤です。Society3.0 の昭和の時代では、ここばかり強調されていたと思います。

では、水面下の部分に、たとえば、「思考力、判断力」、よくシンキングスキル、考える力と言われているようなものがあります。「表現力」は、考えたことを表現する力と捉えるとよく、これらは、口で言う、文字で書く、図で描く／ものをつくる、体で表す、の４つがあると言われています。考えたことを相手に伝えて、また考えて、また相手に伝えて、、、それは、学びだけでなく、スポーツでも仕事でも、絶えずそれを繰り返しています。おそらく、この「思考力、判断力、表現力等」は、Society3.0 の時代では、大人になれば自然に身に付くだろうと思われていたのかもしれませんが、それは全くの誤解。ほうっておいたら全く身に付きません。

他には、「学びに向かう力」としては、「協働性」や「多様性」に関する資質・能力が挙げられます。仲間と対話し、コミュニケーションを取りながら協働すること、その際には、相手のことを認め、自分もいい所と悪い所を確認して、自己肯定感を上げながら問題解決をしていくこと、何かを経験しながら段々と身に付いていくものでしょう。また、何か壁にぶつかった時に、その壁を乗り越えるために、粘り強く取り組んでみたり、工夫して自己調整したり、皆で力を合わせて合意形成したりしながら、「よしやるぞ！」と自分を奮い起こしながら主体的に取り組む力「主体性」も大切な資質・能力です。

このような資質・能力を育成するためには、何も考えずに、がむしゃらにやればいいというものではありません。各教科の授業の中で「知識及び技能」をしっかり鍛えて、「思考力、判断力、表現力等」は単元全体を通して、または、１か月間、１学期間、、、「学びに向かう力、人間性等」は、急に身に付くものではありませんので、１年間、２年間、、、６年間を通して育成・涵養していきましょう。つまり、小学校であれば６年間を通して、この氷山全体の資質・能力を、子供達が主役となりキラキラ輝いていくために、教員全員、保護者らと力を合わせながら、育てていくことが、今求められる教育なのです。

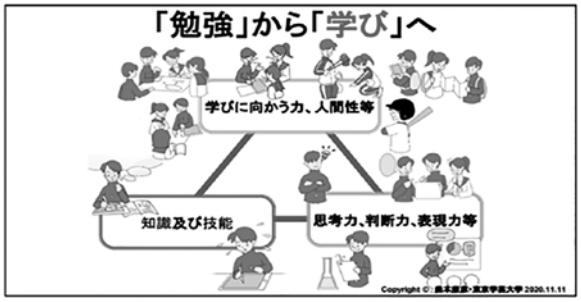
そもそも、「学ぶ」とは、どのようなことなのでしょうか？近年、学ぶということに関してたくさんのことが分かってきました。

実は、学ぶとは単に暗記をすることではなく、「何で？あっ分かった！」などと気付くことなのです。これを、メタ認知と言います（図４）。ですから、先生方は授業をする時に、「教科書をただ教える」ではなくて、教科書を使いながら、「分かった！」と気付かせながら、メタ認知を誘発させていくことが求められます。よく教員は、ファシリテーターやコーチだと言われる理由がここにあります。いい先生とは、ただ厳しいだけではなく、スポーツでもそうですが、気付きを与えてくれる存在なのでしょう。

【図 4】

では、定着するとはどういうことでしょうか？定着するとは、何で間違ったのか、どうしたらできるようになったのかなどを自分の言葉で説明（表現）できるようになることです。先ほど表現には４つあると言いました。対話したり（口で言う）、ワークシートに書き込んだり、振り返りをしたり（文字で書く）、実際にやってみたり（図で描く／ものをつくる､体で表す）する活動をｅポートフォリオに記録し、教員がそこから児童生徒の学習状況を把握しようとするのはそのためです。

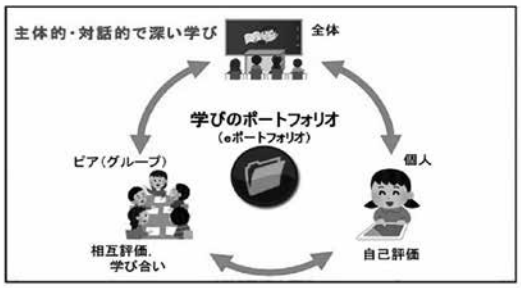
今「勉強」という言葉を使わなくなってきたことに気づきませんか？勉強は、先生や大人が子供達にやらせるものだったのかもしれません。今は､｢学び｣という言葉を好んで使います。これは、主語が子供達です。子供達が主役、自身の学びを主導します。自分で調整しながら学び､教員はそれを伴走し支えていく。それが｢学び｣です。ですから、たとえドリルのようなものであっても､自ら「よしやろう！」｢できた！」と、子供達自身が主体的に教材に向かいながら取り組んでいくならば「学び」です。逆に､｢めんどくさい｣｢とにかくやればいいんだ」と思っていやいや行う宿題は勉強です（図５）。



【図 5】

我々教員は、一斉授業での教え込みから脱却し、児童生徒が中心で主役となる「主体的・対話的で深い学び」をつくっていくことが求められるようになりました。教員側からみれば､｢主体的・対話的で深い学び」ですが、子供達一人一人の側から見ると、自分が主役になる「個別最適な学び」になります。まさに、紙飛行機に例えると、どこをどう飛んだかが一番大事になります。ですから、教員は、学習支援として、その子供の学習状況に応じた一番いい足場をかけていくのです。

「主体的・対話的で深い学び」は、イメージがとても大切です。単なるグループ活動ではありません。たとえば、内容のまとまり（単元全体）を、１つの大きな授業として捉えてください（図６）。

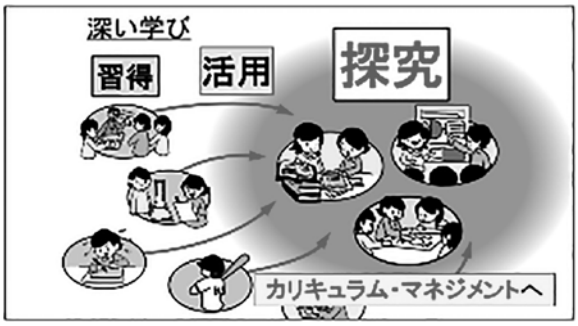


【図 6】

全体でしっかり教えた後に、グループに分かれて議論し、再度全体で共有したのち、個別で学びを振り返る。この振り返りは家庭学習でもかまいません。そして、それを踏まえて、次の授業では、協働で作業を行い、個人でまとめ直してから全体で､､､というように、学習形態を変えながら、単元全体を１つの大きな授業として行っていきます。一つ一つの授業が切り離されているわけではないのです。

では､｢主体的･対話的で深い学び」について、３つの学びに分けて説明します。

「深い学び」は、習得、活用、探究という学びの流れができているかということです（図７）。習得、習得、習得で終わってしまったら、単なる暗記になってしまいます。単元の中で、探究まで行けないならば、たとえば、数学の中で習得した学習内容を、理科の中で活用して、総合的な学習の時間で探究するという、教科等横断的な学びにしてやれば深い学びになります。まさに、カリキュラムマネジメントです。



【図 7】

「対話的な学び」には、仲間との対話、教員との対話、自己との対話があります。各対話の説明の前に、なぜ対話が学びにとって良いかについて説明しますと、それはとても単純な理由です。学ぶことは、気付くこととお話しました。実は、最も気付きが起きる学び方が対話をすることです。対話することによって、多くの気付きが起き学びが生起されることが分かっています。

まず、仲間との対話です。仲間との対話は、学び合いや相互評価など、相互作用による学習効果を期待した学び方で，いわゆる「協働」と言われているものです。これは、最も大切な学び方と言っても過言ではありません（図８）。この協働ですが、たくさんの利点が指摘されていますが、特に注目すべき特長として、教える方と教えられる方では、教える方が学習効果が高いと言われていることがあります。教えることによって頭が整理され、さらに気付きが増え、結果学びが促進されていきます。もちろん、教えられる方も、学びのチャンスになりますので、互恵的な学びそのものと言えます。ただ、ネックとなるのは、相手のやる気がないと、本人もやる気がなくなることです。ですので、先生には、学びのコミュニティをつくるという重大な役割が出てきます。つまり、どういうグループをつくって、どんなお膳立てをして、どうワクワクさせるかが大切になります。さらに、対話する時には、タイミングよくタブレット端末や大型テレビなどのＩＣＴに教材を提示し、指を差しながら対話させると、爆発的に気付きが増えると言われています。たとえば、タブレット端末に直接書き込んでもいいですし、紙のノートやホワイトボードに書いたアナログの学習記録も写真をとれば電子的なポートフォリオ（ｅポートフォリオ）になりますので、それらを指差しながら、対話させればいいですね。それで、学びはどんどん大きくなっていきます。

【図８】

次は、教員との対話ですが、これは、単なるおしゃべりではなく、まさに学習支援のための対話です。先生は、必ずコーチやファシリテーターになり切ってください。子供達に「先生は何も教えてくれなかったけど自分だけで出来た！」と言わせるくらいのギリギリのヒントを与え続けることが、「足場かけ（スキャホールディング）」という一番理想的な学習支援になります（図９）。

【図９】

たとえば、模範解答を見せて、それを覚えさせてしまったら、単なる暗記になってしまい、似たような問題はできるけれど、ちょっと問題を変えたらできなくなってしまいます。どうやったらできたか、それを自分で説明できるか、その答えを子供達から引き出すために、いかに足場をかけるか。スポーツで言えば、コーチングと言われる支援方法です。

すると必ず自分に戻ってきます。これが自分との対話、自問自答です。学びの文脈では、振り返りや自己評価とも言われます。学びの振り返りは、感想を書くことではありません。頭の中、思いとして残っていることを、外化する（書き出しておく）ことが振り返りです。たとえば、自分が大切だと思ったことや、何ができるようになったのか、次にどのように生かしていくの

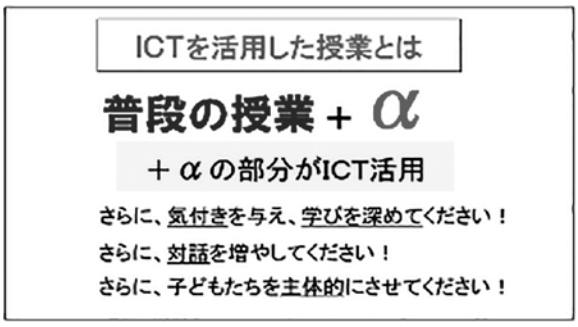
かを記録として残していくことが考えられます。

「主体的な学び」は、子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる学びです。この主体的な学びの過程を実現することは、一見難しく感じます。しかし、学校全体で深い学びがつくられ、それぞれの授業の中で対話的な学びが活発に展開されるようになると、子供達は、自ずと主体的な学びを日常的に行えるようになるものです。

最後に、ＩＣＴ活用の話に戻したいと思います。先生方には、「主体的・対話的で深い学び」をつくってくださいと申し上げてきました。その上で、ＩＣＴをどのように使えばよいか、ヒントをお示しします。

ＩＣＴは、学びを促進させてくれる単なるツール、文房具として使います。ですので、まず、先生方は、先生方がやりたいＩＣＴを使わない「主体的･対話的で深い学び」の授業をしっかりイメージしてつくりあげてください。それは、単元全体が１つの大きな授業です。そして、もうこれ以上の授業はつくれないと言えるような授業がつくれたなら、一つだけ、もっと学びが高まる自己新記録の授業に昇華させる方法があります。それがＩＣＴをタイミングよく活用することです（図 10）。

たとえば、タイミングよくタブレット端末に教材の画像を出して、これを見せて、「どこが違う？」「比べたらどう？」などと問いかけながら、線を引かせたり、考えさせたりさせることで、必ず気付きが増え、学びが深まっていきます。そして、そこで対話をさせてください。それによって、学びがどんどん増えていきます。気付きが増えていったら、切りのいいタイミングでＩＣＴを使って学びの振り返りを残してください。その時に、ノートの記録や学習成果物を写真に撮るなどして一緒にｅポートフォリオにまとめると「学びのアルバム」になり、それらがたまっていくと、学びが線でつながり、学びの足跡になります。それを見ると、子供達の学びの変容がわかり、よい点、可能性、進歩の状況を見取っていくことができるようになります。すると、必ずや目の前に、主体的に学びに取り組む子供達の姿が飛び込んでくるでしょう。



【図 10】

ＩＣＴの一番のメリットは、いつでもどこでも学んだことをｅポートフォリオとして記録できること。継続的にｅポートフォリオを残しながら学び続けると、それらは学びの足跡となり、３年間、６年間が１つの大きな学びとして繋がります。子供達は、ＩＣＴを手に入れました。それを、複数の先生方で、襷を繋ぐかのように、子供達を育てていく、そんなイメージです。
もしも、学校規模が小さくて、なかなかコミュニケーションがとれない、パターン化してしまうという課題があるのであれば、小さい学校同士でＩＣＴを使って、協働的に学べば大きなグループになっていきます。地域には、たくさんの協力者がいます。学校を飛び越えて、皆さんがいる岩手県の地域全体が大きなクラスのようになるといいですね。これが、岩手県の令和の日本型学校教育となっていくでしょう。

もりもと　やすひこ
東京学芸大学･ICT/ 情報基盤センター･教授、博士（工学）。専門は、教育工学（特に、e ポートフォリオ、ICT 活用教育、学習評価、教育 AI 教育）。初等中等教育・高等教育の教員、システム開発エンジニア、教育工学研究者の経験を生かし、新しい時代の「学び」づくりに尽力。

研究報告

「なりたい自分」を目指す子どもの育成

－「知る力･高める力･つながる力」を高めるキャリア教育の実践－

洋野町立大野小学校
教諭　大沢　菜摘

1　初めに

本校は、洋野町教育委員会の指定を受け、令和３年度・令和４年度の２年間にわたり、研究主題を「『なりたい自分』を目指す子どもの育成～「知る力・高める力・つながる力」を育むキャリア教育の実践～」としてキャリア教育の研究に取り組んできた。

2　主題設定の理由

本校の児童は、素直さや一生懸命さがあるというよさをもつ一方で、他者へのはたらきかけや社会参画意識が弱いこと、自分を向上させようという意欲が低いという実態があった。これらの課題や、自分らしい生き方の実現を促す教育、自己理解を深め自らが望む生き方を実現していける人材の育成などが求められているという今日的課題、また、生まれ育ったふるさとを誇りに思い、地域や社会の中で自らの役割を果たしてほしいという地域の願いを踏まえ、本研究主題を設定した。

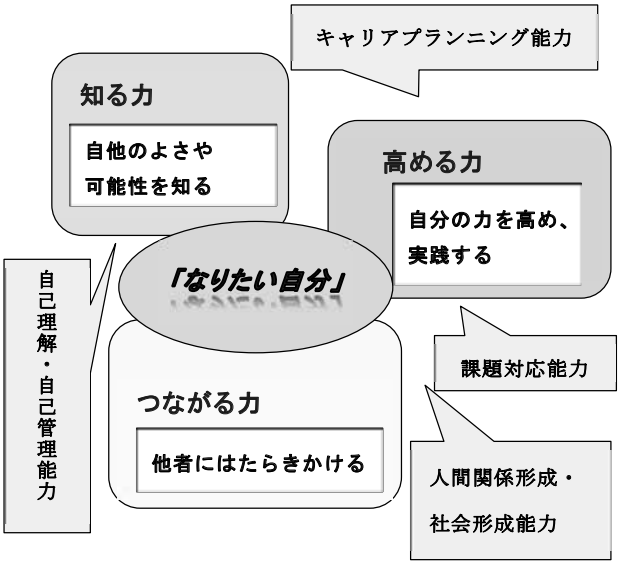
3　研究の基本的な考え

「なりたい自分」を目指す子ども」とは…

好奇心や興味・関心に支えられ、社会との関係の中で自己実現を図ることを「なりたい自分を目指す」こととしてとらえた。「なりたい自分を目指す子どもの姿」は、できるようになりたいことや目標を達成した自分を想像し、それに向かって主体的に学ぶ姿。

本校では、この「なりたい自分」に近づくために必要な力として､「知る力」「高める力」「つながる力」の３つの力を設定した。これは､キャリア教育を通して育成が目指されている基礎的・汎用的能力に基づき、児童の実態から設定したものである。この３つの力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。また､それぞれの力の具体の姿は、いわてキャリア教育指針にある総合生活力と人生設計力の具体をもとに、発達段階ごとに設定した。

◎「なりたい自分」と「知る力」「高める力」「つながる力」との関わり

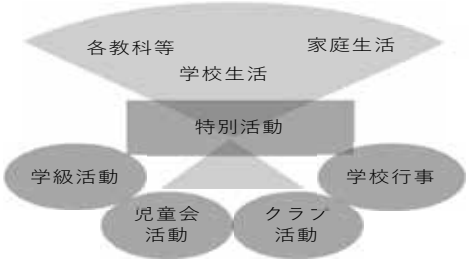


◇知る力・高める力・つながる力の具体の項目

	低学年	中学年	高学年
知る力	・自分の好きなことや得意なことが分かる。 ・自分の役割を知る。 ・仲間や友だちのよさがわかる。 ・学級や学校、家族のよさを知る。	・自分のよさに気付くことができる。 ・自分の役割や課題を知る。 ・仲間や友だちのよさを知り、相手に伝える。 ・学級や学校、家族や地域のよさを知る。	・自分のよさに気付き、生活場面で生かすことができる。 ・自分の役割や課題を知り、みんなのために活動する。 ・仲間や友だちのよさを生かして活動する。 ・学校や地域のよさを生かして活動する。
高める力	・進んであいさつや返事ができる。 ・学校のきまりやルールを守る。 ・係や当番の活動に進んで取り組む。 ・めあてや目標を決めて取り組む。	・進んで元気にあいさつや返事ができる。 ・自分たちの生活に必要なきまりやルールを考える。 ・自分たちの生活に必要な係や当番の活動を考える。 ・めあてや目標に向かう具体的な活動を考える。	・相手を意識してあいさつや返事ができる。 ・学校をよりよくするためのきまりやルールを考える。 ・学校をよりよくするための係や当番の活動を考える。 ・めあてや目標に向かう具体的な活動を考えたり振り返ったりする。
つながる力	・相手を見て、うなずくなどの反応をしながら聴く。 ・仲間や友だちと一緒に活動を楽しむ。 ・家族や地域の方とふれあい、感謝の気持ちを伝える。 ・みんなのためにできることをする。	・相手の話を聞き、自分の考えをもって話す。 ・仲間や友だちと一緒に楽しい活動を考える。 ・家族や地域の方々に感謝と尊敬の気持ちを伝える。 ・みんなのためにできることを考え、実行する。	・相手の話を聞き、考えのよさに気付いたり共感したりしながら自分の考えを伝える。 ・仲間や友だちと学校生活を豊かにするための活動を考え、実行する。 ・自分を支えてくださる方々に感謝と尊敬の気持ちを伝える。 ・だれかのためにできることを考え、協力して実行する。

4　研究内容

子どもたちが今の自分の姿や現実、課題と向き合いながら活動を展開する上で、特別活動の果たす役割は極めて重要である。とりわけ、学級活動では、「学級」という社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現する「キャリア形成」を図ることができる。学級活動をはじめとする特別活動で身に付けた資質・能力を基礎に、本研究で育む３つの力を活動過程に位置づけ、「なりたい自分」を目指す子どもを育んでいく。



(1)　具体的取組

ア　学級活動 (1)(2)(3) の授業実践

イ　支持的風土を醸成する学級集団づくり

ウ　学校行事・児童会行事・縦割り班活動における実践

エ　学ぶ意欲を高める環境づくり

(2)　変容の見取り方

ア　行動の観察

イ　めあて・振り返りシート、キャリアパスポート

ウ　アンケート

「なりたい自分」をめざすためのアンケート（5・6年）

年

◎そう思う　○どちらかといえばそう思う　△どちらかといえばそう思わない　×そう思わない

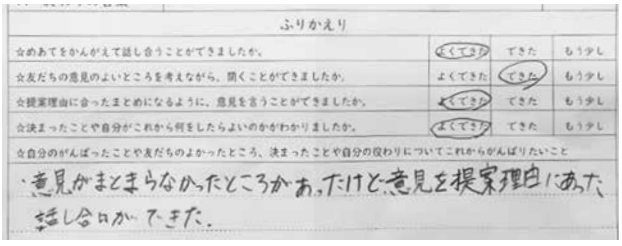
	「なりたい自分」をめざすポイント	レ	コメ	コメ	レ
1	自分は、好きなことや得意なことを生かして生活しています。				
2	自分の長所や短所をわかっています。				
3	友だちやまわりの人のよさがわかり、それを尊重に出来ています。				
4	「なりたい自分」に近づくために、できることをそえて計画しています。				
5	相手に伝わる正しいコトバ遣いをしています。				
6	一日の生活で、時間の使い方を考えながら分り動しています。				
7	みんなのことを考え、係や当番の活動に取り組んでいます。				
8	きまりやルールの大切さがわかり、それを守ろうとしています。				
9	学校生活で目標に向かって努力していることがあります。				
10	約束を最後までやりとげて、うれしかったことがあります。				
11	将来の夢や「あこがれる大人の姿」があります。				
12	学校では、自分の考えや意見を友だちに伝えようとしています。				
13	学校では、友だちの考えや意見を受け入れようとしています。				
14	友だちと意見を出し合ったり話したりして、楽しいと感じたことがあります。				
15	身近な人たちや学校、地域のために役に立ちたいと思います。				

5　研究の実際

(1)　主な授業実践（研究内容①）

ア　学級活動(1)　第５学年

議題名「向田小学校の５年生と仲良くなろう」
(1)　ねらい 意見の比べ合いを通して、よりよい考えを明確にし、みんなが納得できる合意形成を図り、（統合する）向田小学校５年生との仲を深められる合同学習の内容を考えることができる。
(2)　育成を目指す資質・能力 ○学級や学校の生活上の諸問題を話し合って解決することや、他者と協働して取り組むことの大切さを理解し、合意形成の手順や活動の方法を身に付けるようにする。（知識及び技能） ★知識及び技能に関しては、この議題で特に身に付けさせたい資質・能力を児童の実態に即して設定している。 ○学級や学校の生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践することができるようにする。（思考力、表現力、判断力等） ○生活上の諸問題の解決や、協働し実践する活動を通して身に付けたことを生かし、学級や学校における人間関係をよりよく形成し、他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。（学びに向かう力、人間性等）
(3)　キャリアの視点　〈つながる力〉 ○向田小５年生のためにできることを協力して実行する。**（知識・技能）※** ○相手の意見やその理由を聞き、考えのよさに気付いたり、共感したりしながら自分の考えを伝える。**（思考・判断・表現）※** ※この授業では、知識・技能、思考・判断・表現の高まりを意識して設定し、評価へとつなげている。


ふりかえり

☆めあてをかんがえて話し合うことができましたか。	よくできた	できた	もう少し
☆友だちの意見のよいところを考えながら、聞くことができましたか。	よくできた	できた	もう少し
☆提案理由に合ったまとめになるように、意見を言うことができましたか。	よくできた	できた	もう少し
☆決まったことや自分がこれから何をしたらよいのかがわかりましたか。	よくできた	できた	もう少し

☆自分のがんばったことや友だちのよかったところ、決まったことや自分の役わりについてこれからがんばりたいこと

・意見がまとまらなかったところがあったけど意見を提案理由にあた話し合いができた。

・キーワード（比べる視点）に沿って賛成・反対意見を整理することで、考えのよさに気付きながら自分の考えを伝える姿が見られた。
・児童の様子や発言のほか、上記のようなワークシートを使用することで目指す児童の姿に近づいているか評価した。

イ　学級活動(3)　第６学年

題材名「なりたい自分に向かって ～学習をレベルアップしよう～」
(1)　ねらい 学ぶことの意義や将来へのつながりを理解し、現在の学習をレベルアップした取組を考え、意思決定して実践につなげることができる。

⑵　育成を目指す資質・能力

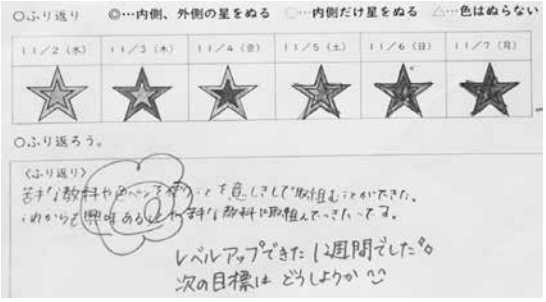
○学習することの楽しさや価値に気付き、学習の見通しや振り返りの大切さを理解し、行動のあり方を身に付けるようにする。（知識及び技能）★児童の実態から設定

○自己の生活や学習の課題について考え、自己への理解を深め、よりよく生きるための課題を見いだし、解決のために話し合って意思決定し、自己のよさを生かしたり、他者と協力したりして、主体的に活動することができるようにする。（思考力、表現力、判断力等）

○現在及び将来にわたってよりよく生きるために、自分に合った目標を立て、自己のよさを生かし、他者と協働して目標の達成を目指しながら主体的に行動する態度を養う。（学びに向かう力、人間性等）

⑶　キャリアの視点　〈高める力〉

○なりたい自分に向かう具体的な取組を考え、主体的な学習態度を身に付け、行動している。（思考・判断・表現）※重点



・思考や判断の手助けとなるような効果的な情報提供をすることにより、個人の意思決定につなげることができた。

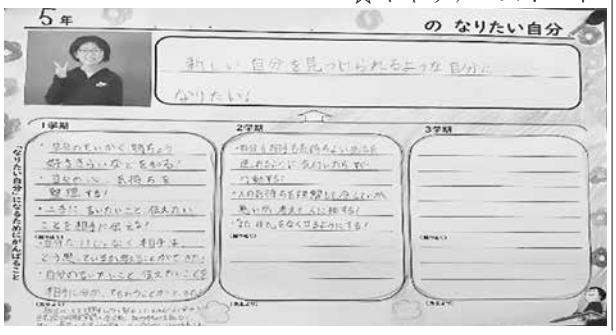
・実践の振り返りでは、行動観察のほか、ワークシートを使用することで、目指す児童の姿に近づいているか評価した。また、活動の結果だけでなく、活動の課程における児童の努力や意欲などを積極的に認め、児童のよさを評価して、新たな取組への意欲につなげていくことが大切だと考えている。

ウ　全学年共通取組

「『なりたい自分』を目指して」

自己への理解を深め、日常生活についての目標に向かい、自己のよさを生かして主体的に行動する。

☆キャリアパスポート



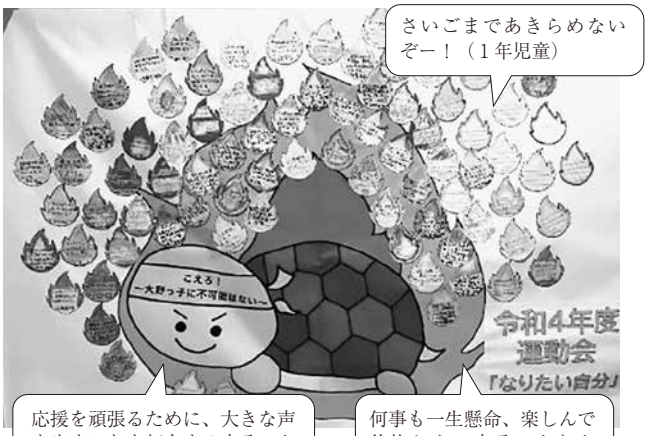
この児童は、「知る力」や「つながる力」を意識しためあてを設定している。１学期末には、「できた」という思いをもち、２学期は新たな目標を立てることができた。

教師は、児童の活動の様子を評価して意欲を喚起するコメントを記し、新たな目標に向かって粘り強く取り組むことができるようにした。

⑵　その他の実践（研究内容②～④）

ア　学校行事

〈運動会（行事）を通して「なりたい自分」〉



「なりたい自分」を合言葉にすることで、未来の姿を想像しながら自分なりのめあてを立て、そこに向かって取り組もうとする姿が見られた。振り返りでは、達成感や満足感を得た児童が多くいた。

イ　児童会・縦割り班行事

〈ハロウィンパーティー〉

廊下に設置してある議題ボックスに入った「全校でハロウィンパーティーがしたい！」という議題を代表委員会で協議し、実施。衣装作り、本番の活動は縦割り班ごとに行い、自分の役割を果たしながらチームワークを高めた。児童の創造性が大いに発揮されたイベントとなった。議題ボックスには「スポーツ大会がしたい」「ミュージックフェスがしたい」などの様々な意見が寄せられている。

ウ　「おおのっこミュージックフェス！」(有志)

たくさん練習をしてみんなの前に立って歌ったり踊ったりするのは、とても勇気がいります。緊張します。でも、その緊張を楽しさに変えられるみんなはとてもすごいと思います。会場のみんなで盛り上がっていて自分も楽しくなりました。来年も再来年もずーっと続けてほしい行事です。ミュージックフェスでみんなが元気になって笑顔になれば、絶好調です。（６年児童の感想より）

エ　６年生による「そり山“大野リゾート”」

全校のみんなに楽しんでもらおうと６年生がそり山を制作。

誰かを楽しませようとする姿、誰かのために力を尽くす姿、相手のことを考える姿がたくさん見られた。

オ　支持的風土を高める学級集団・環境づくり

よりよい学級を目指すための取組。レーダーチャートに示し、前回値と比べることで、学級のよさや課題を明確にすることができた。

6　研究のまとめ

「なりたい自分」を目指すためのアンケートより抜粋。（肯定解答の変容）

項目	実践前	実践後
「なりたい自分」に近づくためにできることを考えて行動している。	86.3 %	98.4 %
学校生活で、目標に向かって努力していることがある。	88.8 %	95.0 %
物事を最後までやり遂げて嬉しかったことがある。	96.7 %	98.3 %
学校では、友達の考えや意見を受け入れようとしている。	94.5 %	96.7 %
友達と知恵を出し合ったり、協力したりして楽しいと感じたことがある。	96.7 %	100 %
身近な人たちや学校、地域のために役立ちたいと思う。	96.3 %	100 %

〈成果〉

・自分のよさや友だちのよさに気付く活動を多く取り入れることで、児童は自分に自信をもち、前向きな気持ちで自己実現を目指そうとするようになった。「なりたい自分を目指すアンケート」においても、多くの項目で肯定回答が増えた。
・特別活動を要としたキャリア教育の実践により、日常生活や授業、行事などにおいて「なりたい自分の姿」をイメージし、その目標に向かって主体的に活動する児童が増えた。また、漠然とした目標ではなく、自分の課題を解決するための目標やよりよい自分を目指すための目標、具体的な方法を考えられるようになった。
・授業で現在と将来とのつながりを知る場面をつくることで、学ぶことや働くことの意義を実感し、自分の行動に生かそうとする児童の様子が見られるようになった。
・「知る力」「高める力」「つながる力」の具体の姿をもとに育成を目指す資質・能力を盛り込んだ指導案を構成したことにより、指導者が資質・能力を意識して授業を展開することができた。

〈課題〉

・自己の課題を認識し、目標に向かって実践を続けることの大切さを理解はしているが、行動を変えていくことが難しい児童も見られるので、個に応じた授業展開、支援、評価のあり方を考えていくこと。
・児童の実態を適切に把握し、児童に必要なことや身に付けさせたい資質・能力は何か、そのために必要なことは何かを明らかにして研究の内容を精査し、指導計画を立てること。
・教科横断、学年縦断のキャリア教育の取組になるよう、年間指導計画を見直すこと。教科におけるキャリア教育の充実を図ること。
→現在、令和５年度の重点として研究を進めている。

おおさわ　なつみ
盛岡市立城北小学校を経て、平成 28 年度より現任校に勤務。

研究報告

自ら考え、主体的に判断し、表現できる生徒の育成
－カリキュラム・マネジメントを生かした復興教育の推進を通して－

一関市立千厩中学校
教諭　立花　健祐

1　はじめに

本校は、一関市教育委員会から令和４年度・５年度の２年間、研究指定をいただき、研究主題を「自ら考え、主体的に判断し、表現できる生徒の育成～カリキュラム・マネジメントを生かした復興教育の推進を通して～」とし、復興教育の視点を取り入れた授業実践の研究に取り組んできた。

2　主題設定の理由

今年は東日本大震災から12年目を迎える年である。この間、県教育委員会では東日本大震災からの教育の復興と「いわて県民計画（2019～2028)」第１期アクションプラン及び「岩手県教育振興計画」の着実な推進を行ってきた。岩手県教育振興計画には７つの施策項目があり、その一つに「岩手で、世界で活躍する人材の育成」が掲げられている。取り組みの方向性として「いわての復興教育の推進」が位置付けられており、いわての復興教育プログラムに基づく教育活動の推進や系統的・発展的な「いわての復興教育」の推進を目指している。そのため、各学校は、学校内だけにとどまらず、家庭、地域、関係機関・団体等と連携し、教育活動を充実させることが求められている。

時間の経過とともに震災の経験や記憶が少ない子どもたちが増えていく一方で、今、伝承の風化が問題視されている。そのため、新しい視点での復興教育を考える必要がある。

昨年度の研究では各教科の授業の中で、復興教育の視点を取り入れた教科研究を行った。いわての復興教育プログラムや復興副読本を活用した授業を展開することで、子どもたちの思考力・判断力・表現力を育成してきた。その中で各教科の授業のねらいと復興教育のねらいが共通するものが多くあることが明らかとなった。昨年度の研究の成果として復興教育を意識した生活を送る生徒や災害に対する備えについて家庭で取り組んでいる生徒の割合は高まってきた。

今年度は、昨年度までの研究をベースに、復興教育の視点を中核にカリキュラム・マネジメントを生かした教育活動の展開を行ってきた。

本研究を通して、子どもたちが夢や目標をもち、自ら考え、主体的に判断し、表現できる生徒を育成したいと考えた。また、いわての復興教育を学校経営に位置付け、地域に誇りと愛着をもち、地域の発展を支える力を身に付けさせたいと考え、本研究主題を設定した。

3　研究実践

本校では、研究主題の実現のために、「カリキュラム・マネジメント」と「復興教育」の２点を研究の柱とし、研究実践を行ってきた。

(1)　指導計画の立案

教育活動を展開する上で大切なことは計画づくりであると考える。本研究は授業実践が中心であるため、１年間を見通した年間指導計画の立案を行った。これまでも年間指導計画の作成は行ってきたが、昨年度、今年度の２年間は、復興教育の視点をもって、年間指導計画を見直すことから始めた。具体的には、これまでの年間指導計画の中に、「いきる」、「かかわる」、「そなえる」の３つの教育的価値と具体の21項目を位置付けて、１年間の学習内容を整理した。

このことから、復興教育の推進のために新たに教材を開発したり、作り変えたりするのではなく、これまで行ってきた授業が復興教育と密接に関連していることが明らかとなった。

ア　洗い出し

１年間の学習内容と復興教育の３つの教育的価値及び具体の21項目がどの程度関連しているのか「年間指導計画」と「いわての復興教育プログラム第３版」を照らし合せて洗い出す作業を行う。以下、いくつかの例を紹介する。

※左欄：教育的価値と具体の21項目
　右欄：単元や題材、学習内容

例①　〈１年：体育〉

いきる①	心身の機能の発達と心の健康
いきる⑥	体ほぐしの運動
いきる⑦	健康な生活と疾病の予防
かかわる⑨	体ほぐしの運動
そなえる㉑	水泳・着衣水泳

例②　〈２年：英語〉

いきる②	P2 Leave Only Footprints
いきる④	P6 Live Life in True Harmony
かかわる⑨	P1 Start of a New School Year
かかわる⑩	P5 Work Experience
そなえる⑱	PU1　天気予報をきこう

例③　〈３年：美術〉

いきる③	今を生きる私へ　自画像
いきる⑥	空想は現実を超えて
かかわる⑨	共同制作で互いのよさに出会う
かかわる⑭	快適な道を考え、表す
そなえる⑰	あの日を忘れない

単元・題材及び学習内容によっては、複数の復興教育の３つの教育的価値と具体の21項目が関連していることも分かった。また、この作業を全教科で実施したことにより、教科間においても復興教育の３つの教育的価値と21項目が共通していることも明らかとなった。

このことから、教科等横断的な視点でみることで、より復興教育の推進につながるのではないかと考えた。

イ　カリキュラム・マネジメントの視点

本校では、カリキュラム・マネジメントの実現に向けて、①復興教育と教科との関連、②教科等横断的な見方の２つの視点をもって研究を進めてきた。前項「ア　洗い出し」で各教科が作成したものをつなぎ合わせ、以下のような表を作成した。これによりカリキュラム・マネジメントの実現に向けて準備を行った。以下の表は、理科と家庭科における例である。

※１段目：教科
　２段目：実施時期
　３段目：単元や題材
　４段目：学習活動や内容
　５段目：復興教育の視点
　６段目：復興教育の視点でのねらい

理科	家庭
２学期（9月）	２学期（12月）
生命の連続性 生物の成長・生殖	幼児の生活と家族 ふれあい体験
生物の成長と生殖について学習を通して生命の連続性や進化への関心や知見を高める。	幼児の発達や生活について学んだり、実際に幼児と触れ合ったりする。
いきる①　かけがえのない生命	
自分自身をはじめとした全ての生命はかけがえのないものであることを実感し、大切にしようとする態度を育む。	

⑵　授業実践

指導計画の作成後、計画に基づいて全教科で復興教育の視点を意識した授業実践を行った。その中から校内授業研究会で実践した国語と理科の実践を紹介する。２つの実践から成果と今後の改善の方向性が見えた。

ア　実践事例①　〈理科〉

単元：雲のでき方と前線

○「いわての復興教育」との関連

いきる①かけがえのない生命
そなえる⑯自然発生のメカニズム
そなえる⑲災害時における情報の収集･活用･伝達

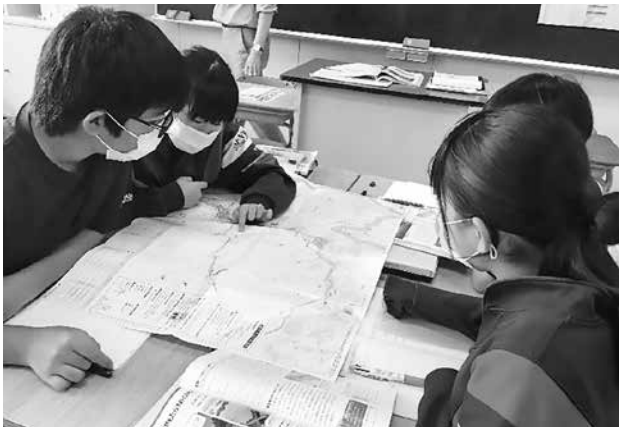
これらの教育的価値や具体の項目を育てるために、理科と防災学習を横断的にとらえ、授業の中で適時に防災に関連させて授業を進める。

○カリキュラム・マネジメントの視点

理科と防災学習を横断的にとらえることは、カリキュラム・マネジメントの側面の一つ、教科等との横断的な視点での組み立てにあたると考える。そのため、次のような指導が考えられる。

・気象現象と関連付けることで、防災学習を身近なものかつ必要なものと捉えさせる。
・様々な災害や事故を想定させることで、より真剣に防災を考えさせる。
・科学的に探究することで、妥当性や客観性をもって自然災害を捉えたり対応を考えたりさせる。

このような指導は、防災学習を進めるだけではなく、理科において目指す資質・能力や本単元に関連する復興教育の育成にもつながると考える。また、身に付いたり育ったりした資質・能力や教育的価値、具体の項目などは教科等横断的に活用することでより実践的・汎用的な力になると考える。



イ　実践事例②　〈国語〉

教材：「論理的に読む」「絶滅の意味」
　　「自然との共存－小笠原諸島」

○「いわての復興教育」との関連

いきる②自然との共生

この教育的価値や具体の項目を育てるために、国語科における「言葉による見方・考え方を働かせる」とともに､適時に「自然との共生」に関連させて授業を進める。

○カリキュラム・マネジメントの視点

本単元に関連のある他教科の学習は以下の通りである。

社会	日本や世界の様々な地域における人々の生活と環境の学習と関連付け、様々な自然及び社会条件と生物の絶滅のつながりやそれを食い止める人々の取組について考えさせる。
理科	食物連鎖や生態系の仕組みの学習と関連付け、生態系内の様々な生物の役割や人間も自然や生態系の一部であることを捉えさせる。
体育	健康と環境の学習と関連付け、人間が自然環境から受ける影響や人間が自然環境に与える影響について考えさせる。

国語科において目指す資質・能力や本単元に関連する復興教育の教育的価値などは、教科等横断的な視点で捉えることで、より実践的・汎用的な力になると考える。

⑶ 「かけはしーと」の活用

本校では復興教育と関連付けた授業の振り返りとして、「かけはしーと」という名の振り返りシートを活用している。「架け橋(かけはし)」と「シート（しーと)」の造語で名付けた本校独自のものである。これは、各教科の学習内容と復興教育の３つの教育的価値を授業で架け橋のようにつなぐものとしての役割がある。

以下の〈表〉のような様式で、１枚のシートに復興教育と関連のある教科、単元、関連のある教育的価値、授業で身に付けたい力（目標）が明記されたシートである。授業の振り返りの場面で生徒が学習したことを振り返る際に活用する。

〈表〉

教科	単元	価値	目標	振り返り
国語				
数学				

ア　実践事例①　〈理科〉

単元	天気とその変化
価値	そなえる⑯
目標	日本の地理的な条件から、日本の天気の特徴とその影響を理解し、各季節に想定される災害とその対応について考える。
振り返り	自然災害や地震などの災害や被害から守るために、家族との避難場所の確認やボランティア活動（地域）に積極的に参加する。

イ　実践事例②　〈国語〉

単元	絶滅の意味
価値	いきる②
目標	文章中に表れているものの見方や考え方を捉え、人間と自然との関係について自分の考えを表現できる。
振り返り	絶滅をすることでの人間への影響、自然への影響と絶滅することで多くのものを失うことを知りました。私も自然を大切にし、生き物の絶滅を少しでもおさえるようにしたいです。

4　生徒質問紙調査の結果

現２・３年生に以下のアンケートを取った

質問	各教科の授業の中で復興教育を意識する場面はありますか。
R４	肯定回答率：69%
R５	肯定回答率：74%

5　研究の成果と課題（〇：成果・▲：課題）

〇令和４年度からの研究を通し、復興教育を意識しながら学習に取り組む生徒の割合が増えてきた。

〇「かけはしーと」の活用を通して、全職員が１つのチームとなり、教科間での情報共有や連携を行うことができた。

〇教科横断的な視点で授業改善をすることで、生徒が学びの必然性や充実感を感じながら学習することができた。

▲復興教育の３つの教育的価値と具体の21項目について、基本的な捉えやより効果的に授業に位置付けるための手立てについて幅広く考えていく。

▲授業を通して、生徒の姿の見取りや評価の仕方について具体性を確立し、さらなる授業改善へとつなげる。

6　今後の取組

授業を通して、生徒の姿をどのように評価するのかを吟味し、今後も授業と復興教育を関連付けた実践を積み重ね、継続して取り組んでいきたい。

たちばな　けんゆう
令和元年度から一関市立千厩中学校に勤務。

指導実践

地域とともにある学校

－中野中ソフトテニス部の伝統と発展・進化してきた理由－

洋野町立中野中学校
教諭　西川　欣孝

八幡平市立西根第一中学校
教諭　村松　康司

1　洋野町立中野中学校について

・学区の概要

本校は北緯 40° 18′ 4、東経 141° 46′ 6 に位置し、学区は北は種市中学区、西は大野、南は久慈市と接し、洋野町の南端に位置し、海に山に川にと自然環境に恵まれています。

・生徒について

素直で明るく、礼儀正しい生徒たちです。学習態度は真剣で、向上心を持ち努力している生徒が多いです。また、運動面に対する興味・関心は特に高く、意欲的で積極的に活動し、数々の成果を上げています。保護者の方々は学校に協力的で、教育に関する関心も高いです。また、地域の教育力も高く、地域・保護者・学校が一体となって活動しています。

・学校について

校　訓：自ら学び　自ら修める
生徒数：全校生徒 38 名
　　（1 年生 8 名、2 年生 9 名、3 年生 21 名）
部活動：男子 卓球、ソフトテニス
　　女子 バドミントン、ソフトテニス

・ソフトテニス部について

中野中学校ソフトテニス部は、創部 2 年目の昭和 39 年の第 11 回県中総体で男子団体 2 位から始まって、毎年ベスト 8 以上の結果を残しており、県内の関係者から「強豪校」や「伝統校」などと評価されています。平成 29 年度の県中新人大会では男女同時優勝し、35 回の大会史上初の快挙を達成、平成 30 年度の県中総体、県インドア大会においても男女団体で優勝することができました。令和元年度には全国中学校体育大会で 5 位入賞、令和 2 年度では東北インドア大会で優勝、令和 3 年度の全国中学校体育大会で長根慎人・鈴木煌ペアが県勢初の優勝を成し遂げました。

令和 3 年度全国中学校優勝時の選手

2　部活動指導を通じて目指す生徒の姿

中野中学校ソフトテニス部は、「精神力」をモットーとし、忍耐力、集中力、向上心の三本柱を中心に、「目標は勝つこと即ち日本一であり、目的は人間形成にある」というスローガンの元、日々活動に励んでいます。

あくまでも勝つことを目標として活動していますが、目的は人間形成です。コートの中でも外でも、学校生活、家庭生活、地域活動など、様々な場面で応援される人間になることを目的としています。そのため、学校生活の中でも他の生徒の手本となるような生活を常に心がけて生活するよう話をしています。学級の中でも、学校の中でも、集団を引っ張るリーダーとしての役割を選ぶ際には、率先して取り組むように常日頃から心がけています。

また、大会を終えて疲れているときでも、休まずに登校すること、そして疲れている素振りを見せず、しっかりとした日常生活を送ること、宿題や提出物に関してはきちんと提出する習慣をつけるなど、やるべきことをきちんと行えることも、応援される選手として、大切な資質だと考えています。同じ学級で生活している級友から大会等に参加する際に、心から「頑張ってきてね」と応援されるような生徒であってほしいと願っています。

保護者の方々にもお願いをして、家庭での生活においても、自分でできることは可能な限り自分で行うように話をしています。中学生なので、すべて保護者の方々に準備してもらい、自分で荷物の管理や段取りができないようでは、試合の中で刻々と変化する状況でどのように対処していくことが最善かを見つけることが難しくなってしまいます。ソフトテニスでは奇数ゲームの終了時にベンチに戻ってきて休息しながら指導者からアドバイスを聞くことができますが、話せる時間が限られているため、多くのことを話すことはできません。そこで、選手自身がどのように考えてプレーするかが非常に重要になります。自立した選手であれば、状況を判断し、どのようにプレーをするか考えることができ、アドバイスを受ける機会を待たずに対応することができます。

精神力の横断幕と共に

3　生徒の力を伸ばすための環境的要因

以前から強豪として県内に名の知れ渡っている学校として、結果を残してきたことは学校紹介の中に書かせていただきましたが、諸先輩方の功績をはじめ、洋野町、父母会の皆様、地域の方々の支えがあってこその活躍だと思っています。練習環境を整えるために父母会の皆さんを中心として、OB、OG の保護者の方々も参加していただき、春先や必要に応じてコート整備や環境整備を行ってくれています。

現在学校には砂入り人工芝コート２面と、クレーコート２面がありますが、この砂入り人工芝コートができるきっかけになったのは、中野小学校さんと小中連携で取り組んでいる、海洋教育推進校としての活動です。この海洋の取り組みの中で、洋野町の知名度を向上させるためにどうしたらよいかを考える学習があるのですが、その提案の中に、「県内外でより活躍するためには、試合が行われるコートサーフェスで練習することが必要である」と洋野町議会に提言した結果、洋野町で砂入り人工芝のコートを作成してくださいました。そのおかげで多少の雨でも練習をすることができ、大会当日が雨であったとしても、動じることなくいつも通りプレーすることができています。

砂入り人工芝テニスコートの様子

また、ありがたいことにいろいろなところから試合のお誘いをいただき、遠征費がたくさんかかってしまうのですが、保護者の方々に負担していただく部分が多くなってしまっています。しかし中野中学校では、PTA の方々が地域に寄付金を呼びかけてくださったり、町の補助金制度を活用させていただいたりしています。子どもを地域の宝だと思っている地域の方々ですので、とてもありがたいです。大会が

終わった後にはランニングをしながら町内のお世話になっている方々に結果報告をしに行くこともありますし、地域で行事があるときには日程を調整して、優先的に参加させていただいています。

顧問のみではなく、指導者としてコーチがついてくださっていることも生徒の力を伸ばすうえで欠かせない存在です。現在男子には玉澤啓昭さん、谷地拓也さんのお二人にコーチに入っていただいております。試合の時のベンチコーチなども安心してお願いできるお二人なので、技術面や戦術面で相談に乗っていただくことも多々あります。また、コーチをはじめとして高校や大学に進学したOBの方々や、洋野町ソフトテニス協会の方々など、来ていただいたときには一緒に打ってもらうなど、選手にとって非常に貴重な経験をさせていただくことができています。

玉澤コーチ（３列目左から４人目）、
谷地コーチ（３列目左から５人目）と共に

４　子どもたちの力を育む要因

令和５年度は全校生徒が38名と人数は少ないですが、少ないからこそ、お互いに気心の知れた仲間同士、どんな行事に対してもみんなで活動するところが素晴らしいと思います。そんな全員で高め合う集団としての素養ができあがっているからこそ、支え合うけれども馴れ合いにならず､切磋琢磨しあえていると思います。中学校に入学してからソフトテニスを始めた生徒もどんどん力をつけていくのは、こういったみんなで活動、みんなで成長ができているからこその成果だと思います。

また、小学生からソフトテニスを行うことができるのも競技力向上には非常に大きいと思います。小さいころからラケットをもって体全体を使ってスイングする感覚は、体が大きくなってからではなかなか身に付けることが難しい感覚だと思います。そしてバウンドしたボールを扱う感覚や、空中にあるボールの落下点を予測してプレーするなどのセンスについても、早いうちから身に付けておいたほうがいい能力の一つといえると思います。ボールがバウンドしたあとの軌道を予測してポジションをとったり、相手が打球した瞬間に落下地点を予測してボールを追いかけたりする空間認知能力は、他の競技を行う上でも大変役に立つ力の一つだと思います。また、一歩目の反応を早くするためのスプリットステップを踏む習慣作りもなるべく早い段階から身に付けておきたい動作の一つです。重心を下げ、つま先に加重することで出だしの動きをスムーズにし、ボールを打球する場所まで素早く移動することにつながります。

５　指導の際に心がけていること

地域の宝として大切に育てられている生徒を預かっているので、まず何よりも応援されるチーム作りを目指しています。保護者やチーム関係者はもちろんのこと、大会会場では、観戦している他チームの方など、すべての方々に応援していただけるようなチーム作りを心がけています。挨拶やコート内外での立ち居振る舞いや礼儀など、中学生らしい明るく元気に、はつらつとした行動ができるよう、人としての魅力あふれるチームを作っていけたらと思っています。

また、どんな時も成長し続けるチームであることを選手には求めています。常に向上するためにはどうすればよいか、工夫することを求めますし、それだけの熱意をもって自分の技を鍛えることを選手には期待します。今は動画を検索すればたくさんのトッププレーヤーのプレーを見ることができます。目指す選手を決めて集

中的に見て真似てみるもよし、様々な選手のいいところを自分に取り入れていくもよし、どのようにしてトッププレーヤーの技を習得して使えるようになっていくかを考えていくのも必要な力だと思います。ただし、気を付けることとして、向き不向きがあることは理解しておくこととしています。人によって骨格や筋肉のつき方、関節の可動域など、体格などが違いますので、他人と全く同じプレーができるかというと、そうではありません。そこで生徒の体格や体の状況から目指すプレーに近づけていくためにはどのようにしていけばよいか、そこを工夫していく必要があると思います。フォームづくりをする際にも、基本的な動き方として説明するとしても、個別に得意な体の動かし方が違うことがあるため、調節する必要があると思います。トッププレーヤーのフォームを見るとどの選手もきれいな打ち方をしていますが、どの選手も同じ打ち方ではないのと同じく、それぞれ個に応じた効率のいいプレーの仕方を探していくことが大切なことだと思っていますし、そこを生徒と共に話し合い、検証し合いながら探っていくことが重要な過程であると思います。

今年の１月、洋野町有家浜にて

１年の計は元旦にありということで、上の写真は今年の部活動初めに有家浜までランニングし、そこで砂浜に「ぜったい勝つ」と決意を書いたものです。ここでは漠然と書いていますが、海に向かってチーム目標と個人目標をそれぞれ叫び、共有したうえで、今年の活動をはじめました。今年は愛媛県で全国中学校体育大会が行われることがわかっていたため、全員でたどり着くこと、そして１番を目指すことを目標として決意を浜に書き、叫んできました。そこから愛媛全中にたどり着くためにはどうしたらいいか、考え、目標達成するために必要なことなどをピックアップしていきます。

例えば、技術的な側面から考える時には、サーブの確率はどのくらい、コースはどこを狙って、速さはどのくらいの速さで、など具体的に必要なことを考えておくと、目標に近づいているのか検証することができます。

６　終わりに

洋野町立中野中学校ソフトテニス部は、洋野町をはじめとして、父母会の皆様、たくさんの地域の方々から支えられてこれまで活動してきました。子どもたちが成長し、目標の達成に向けて活動する基盤として、地域や家庭の教育力の高さを実感しています。そしてこれらの基盤の上に、子どもたちが本気になって夢を実現しようと日々努力を積み重ねているからこそ、これまでのような実績を残してくることができているのではないかと思います。

これからも洋野町の名前を全国にたくさん発信していけるように、家庭、地域、学校、行政が一体となって活動し、地域の宝が躍動し続ける未来を作り後世につなげていき、将来的には、現在コーチとして活躍していただいているお二方のように、地元に戻ってきて働きながら地域に貢献していける人材となって、地域を活性化し、町の発展に寄与することができるよう活動していきたいと思います。

にしかわ　よしたか
盛岡市立仙北中学校、盛岡市立見前中学校を経て、令和３年度から洋野町立中野中学校に勤務。

むらまつ　こうじ
北上市立和賀東中学校、平成29年度から洋野町立中野中学校を経て、令和５年度から現任校である八幡平市立西根第一中学校に勤務。

実践交流

質を高める保育の実践を目指して

－ＥＣＥＱ公開保育から見る自園の良さ－

ふたば認定こども園横川目こども園
園長　**藤原　奈央**

1　はじめに

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであるという認識が高まっている昨今、質の高い幼児教育を保障することは、園として極めて重要な役割であると考える。
しかしながら、自園を振り返った時に、学校評価の中でも重要な自己評価がうまく機能しておらず、園としての課題が明確になっていないと感じていた。また、園内研修における保育教諭間の対話がどれだけ深まっているのか、日々の実践の振り返りは十分であるか、という懸念もあった。実際は、自園の幼児教育の質の向上に至るまでの課題が多く、把握するのが難しいのが現状であった。

そこで、（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が開発した「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム～ECEQ（イーセック）～」を取り入れ、公開保育を行い、外部の視点を導入することで、自園の教育実践の質向上に繋げていくことを目指した。

2　ECEQ 公開保育を行う意義

⑴　ECEQ 公開保育とは

他園保育者や幼児教育関係者が ECEQ 実施園の実践を見学し、その園の良さや課題について対話することによって ECEQ 実施園の内省を促し、PDCA サイクルを機能させることで、教育の改善に繋げていこうとするシステムである。

⑵　ECEQ 公開保育の流れ

STEP1　事前訪問（トップリーダーヒアリング）

ECEQ コーディネーターが園長、副園長への聞き取り調査を行う。園のリーダーがそれぞれに自園の良さと課題をどう捉えているのか、第三者の視点から探り、今後の園内研修を進める上での参考にしていく。

STEP2　事前研修（園内研修）

ECEQ コーディネーターの進行のもと、各職員が園内研修として自園の良さと課題を語り合う。課題を受けて、今後の展望を共有する。

STEP3　「問い」づくり（園内研修）

STEP 2 で共有した課題や今後の展望を土台に、公開保育の際に、参加者に問いかけたいことを考える。

STEP4　公開保育

ECEQ コーディネーターから公開保育の趣旨説明を行ったうえで、「問い」の視点から、保育を参観してもらい、付箋によるフィードバッグを模造紙に貼りだす。保育参観後、分科会に分かれ、問いに対してフィードバックされた事柄について公開園保育者と参加者が協議を行う。

STEP5　振り返りのワークショップ

STEP 4 で得た参加者からのフィードバックを整理し、今後どのように考えていくか、どんな園にしていきたいかを語り合う。

3　ECEQ 公開保育の実際

⑴　STEP1　事前訪問

ECEQ コーディネーターが、園長、副園長、それぞれに自園の良さと課題を聞き取る。

【コーディネーターと確認した自園の良さ】

ア　仏教保育を通した教育保育

園児及び職員一人ひとりが自分らしくいられる園で在りたいと願い、共に生き共に育ちあう園を目指す。子ども達の姿から自分達も学び、子ども達と一緒に成長していこうとする方針が、子どもの目線に立った保育に近づく指針に

なると感じた。

イ　少人数の園児数

人数が少ないということをマイナス要素と捉えていたが、人数が少ないからこそ、一人ひとりに目が行き届き、寄り添うことのできる環境なのだと感じた。

ウ　環境の良さ

新しく、動線を考えられた園舎、安全で使いやすい園庭で、子ども達が伸び伸び遊ぶことのできる環境である。

【コーディネーターと確認した自園の課題】

ア　主体的な姿になっているかどうか

子ども達の遊びや生活は、本当に自ら考え自ら行動できるようになっているのか。また、そうなるための道筋となっているかが課題であると感じた。主体的な姿を目指したいとは願うものの、そもそも主体的とはどういう姿なのか、職員と共有できていない面があるのではないか。

イ　職員一人ひとりの育ちについて

職員一人ひとりの頑張りは、園長として理解しているつもりだが、それぞれが着実に成長しているのかどうか、足りないものがあるとすればどの面なのか、見取ることができていないのではないだろうか。

ウ　地域とのつながり

地域と共に過ごしていきたい、貢献していきたい、と願うものの、コロナ禍もあり、実際にはあまり地域と共に活動する機会が少ないように感じる。園として地域にできることが今一つ明確になっていないと感じる。

(2)　STEP2　事前研修

ECEQコーディネーターが中心となり、田の字ワークを通して、職員同士が自園の良さや課題を共有していく。

【共有した自園の良さ】

ア　園児数が少ないため、育ちが見えやすく、子どもの姿を共有しやすい

イ　異年齢の交流が持ちやすく、密である

ウ　恵まれた環境（園舎、園庭、自然環境）

エ　相互に明るく、相談しやすく頼れる集団であり、協力し合って仕事をしている

オ　未満児は担当制をとることで子ども達の心が安定している

【共有した課題】

ア　子ども達が遊びこめる、遊びが充実する環境になっているのか

イ　子どもの気持ちを受け止められているか。一人ひとりの子ども達とじっくり関わり声がけできているか

ウ　主体性を大切にした遊びになるような保育の形態はどうあればよいのか

エ　事前の教材の準備をしたいが、仕事量が多く慌ただしくなる。余裕を持ちたい。

(3)　STEP1　「問い」づくり

STEP2で話し合われたことを土台に職員間で話し合い「さらに良くなるための課題」として、発達段階に応じて「自分らしく主体的な姿」につながる遊びの充実、そのための幼児理解と環境設定に焦点を当てて次のような「問い」があげられた。また、異年齢交流による「育ちあい」が横川目こども園の強みと捉え、さらに充実していくために園全体としての「問い」を設定し提示した。

ア　園全体

「異年齢で交流し遊んでいる中で、『おもしろいな』と感じられた姿や場面を教えてください」

「子ども達が友だち（異年齢）とのかかわりを持ち、自分たちで遊びを見つけ楽しさを共有できる環境設定にするためにより良い方法を探っています。よいと思われたところ、気づいたことやアドバイス、皆様の園での工夫等を教えてください」

イ　０、１歳児（ほし組）

「子どもが安心して遊んでいると感じられる場面や姿があったら教えて下さい」

《愛着形成》

ウ　２歳児（つき組）

「遊びの様子から、子ども達が“友達と一緒にいることを楽しんでいる”と感じた場面があ

りましたら、その様子を教えてください」

《友達の存在を知る》

エ　３歳児（そら組）

「子ども達が自分を出しながら遊びを楽しんでいると感じた場面がありましたら教えてください」　《自己表現》

オ　４歳児（にじ組）

「友達と遊ぶ中で、自分の思いを伝えたり、友達とのやり取りを楽しんだりしている姿がありましたら教えてください」

《言葉による伝えあい》

カ　５歳児（ゆめ組）

「子ども達が友達と思いを伝え合い協力して遊んでいる場面や楽しんでいる姿がありましたら、教えてください」　《協同性の育ち》

(4)　STEP4　公開保育

【主な参加者】

・北上、花巻地区の私立幼稚園関係者
・地域の小学校教職員
・岩手県教育委員会　　等

ア　公開保育の様子

※ECEQ コーディネーターの報告書より抜粋

室内では、ホールや保育室のいろいろな環境に関わって、それぞれ興味のある遊びを楽しんでいた。各クラスでは、たくさんの段ボール箱を有効に使って、年齢なりにダイナミックに家やピタゴラスイッチ等の制作物が置かれていて、そこでの遊びが広がっていた。クラスごとの壁がなく各保育室を自由に行き来し、好きな遊びを見つけて取り組んでいた。その中で、年長児が小さい子に教えてあげる場面が見られた。雪がたくさん降り積もり、とても寒い日であったが、２歳児以上の子ども達が元気に園庭に出て、雪山でのそり滑り、色水遊び、サッカー等々と年齢なりの遊びをものともせず、遊びこむ姿が頼もしく感じられた。保育者も全体の動きを見ながら個々に合わせてよく声掛けをしていた。

参加者はこのように展開される保育に、いずれの問いに対しても肯定的で子ども達がそれぞれ遊びこむ姿にたくさんの「いいね」の付箋が張られた。

【雪遊びを参観する参加者】

【問いに対する付箋】

イ　公開園とコーディネーターの打ち合わせ

公開の後の分科会協議に向けて、参加者からいただいたフィードバックの付箋から、協議内容を話し合う。あくまで、「問い」や公開園の深めたい事柄に視点を置く。

【打ち合わせの様子】

ウ　分科会協議

フィードバックを基に、参加者と公開園が協議する。

【参加者の意見を集約】

①子どもの遊びの姿と環境

・手作りの遊びコーナーが多く、環境設定が良い。室内・室外、遊びたい場所や物を自ら選択して遊んでいる
・五感を使ってよく遊び込んでいる子ども達が楽しそう
・好きな遊びを思う存分楽しめているため、片付けもスムーズに行われている

②保育者のかかわり

・保育者も一緒に遊びを楽しんでいる
・担任の先生と補助の先生との連携がよい
・明るくハキハキとテンポよく進めていく先生の姿が楽しそうであった

③異年齢交流

・じっくり年長児の手元を見て真似る２歳児
・上手くいかない子にさりげなくアドバイスをしてあげる５歳児。優しい子ども達である

【その他、参加者の質問・意見や今後の課題を集約】

・それぞれ遊びを楽しむ子ども達の様子や姿をどのように把握し共有していくか
・子ども達の「やりたい」を保証する職員の配置。
・用具を使う自由度と安全への配慮のバランスについて

【分科会協議の様子】

【協議内容の発表】

(5)　STEP5　振り返り

園内研修として、STEP2 で整理した自園の良さと課題に立ち返り、振り返りをした。公開保育当日の分科会協議の内容や参加者からの付箋を含め、改めて自園の良さと、自園の課題や改善していきたいことについて整理した。

ア　自園の良さと伸ばしていきたいこと
・充実した環境設定　　・主体性について
・自由に選択できる“遊び”
・保育者、園の雰囲気
・園児が少ないからこその良さ
・地域の良さ→さらに連携を深める
イ　今後の課題と思ったこと
・年齢にあった集団への促し方
・自立した生活（用具、教材の扱い方、片づけ方）
・情報共有の持続（異年齢交流の継続、情報共有の方法、そのための時間確保）
・安全面←遊びが充実しているからこその課題
ウ　全体的な振り返りとして共有した事柄

公開保育を実施したことで、子ども達の変化が見えてきた。遊びに集中していく姿、遊びこみ発展させていく姿等々、成長を感じることができとてもうれしい。安全面での課題として、遊びが充実してきていることから出てきている課題だと思われるので、職員みんなで話し合いながら解決の手段を探り、コツコツ取り組もう、との結論に至った。

【付箋を活用した振り返り】

4　ECEQ 公開保育を終えての学び

(1)　自園の良さへの気づき

一番の成果としては、職員間で自園の良さを再確認し、それを共有できたことである。公開保育をするにあたって、自園の良さを話し合ったり、参加者から意見をもらったりすることで、一人ひとりのモチベーション、及び円滑なコミュニケーションにも繋がると感じた。

(2)　幼児理解への道標

公開保育を迎えるまでに、話合いの時間を増やしたり、問い作りをしたりすることで、今の子ども達の現状を顧みる機会が圧倒的に増えた。今までは、自分の中でどうにか解決しようとする職員もいたが､お互いに対話を繰り返し、子ども達の遊びを改めて俯瞰することで、課題が浮き彫りになり、手立てを共有しやすい環境になった。

(3)　主体性についての共有

自分の好きな遊びを見つけ、自ら創り出し、考え、行動できる力は身につけていきたいが、集団の中の自分を知るという経験も必要と考える。今、目の前の子ども達に必要な経験は何なのかを捉え、保育を組み立てていく事が重要だと共有することができた。

(4)　安全面での課題

安全面について現状の大きな課題として捉えることができた。人数確認や使う道具が年齢にあっているか等、気を付けているつもりになっていたことを、職員間で話し合い、しっかり再確認し、安全安心な園生活に心掛けることを共通の目標とすることができた。

5　おわりに

今回共有した自園の良さや課題、公開保育を迎えるまでに育ってきた職員間の対話による連携や幼児理解を、ECEQ が終わったから終わりではなく、継続していく事が何より大切と感じた。保育者が育っていくと、みるみるうちに子ども達も変わっていく様子から、保育教諭一人ひとりの心持ちや連携の継続が何よりもの子ども達の良い育ちに繋がることになり、それこそが、幼児教育の質の向上につながっていくのだと感じた。

自園の良さを大切にしつつ、課題に対して前向きに取り組み、常に職員間で対話できる土壌をこれからも醸成していきたい。

ふじわら　なお
学校法人双葉学園双葉幼稚園に教諭として勤務。令和３年度から現職。

教材開発

「プログラミングによる美術表現」に係る授業実践及び教材開発について

岩手県立宮古高等学校
教諭　三田　洋

1　はじめに

今回紹介するのは「Processing」というプログラミング言語を使った美術の授業例です。プログラミングというと難しい印象があるかもしれませんが、やり方次第でプログラミングに今まで一度も触れたことのない人でも、短時間で形になる題材です。教科横断的な授業として情報の先生と組んで授業をすればさらに導入が容易になると思います。

この題材に取り組むきっかけは、昨年度、私の専門教科である美術の授業の他に１年生の「情報Ⅰ」の授業も担当することになったことです。情報の免許は取得していたものの今まで指導経験は無く、プログラミングの指導は特に苦労しました。そんなプログラミングをなんとか美術の授業でも活用できないかと考えたのが今回の題材を考えたきっかけです。

2　プログラミング教育について

プログラミング教育は近年特に力を入れるべき分野とされています。2020 年度に小学校でプログラミング教育が必修化され、2021 年度には中学校で技術家庭でのプログラミング内容が拡充されました。高校では、2022 年度に「情報Ⅰ」が必修化。2025 年度の共通テストから「情報」が導入され、その中の３分の１程度がプログラミングの出題になっています。

今年度、本校の１学年が「情報Ⅰ」の授業でプログラミング分野を学習できた時間は 12 時間ほどでした。ある程度プログラミングに慣れることはできましたが、まだ十分とは言えない状況です。本校では２、３年は情報の授業がありませんので、今後は長期休業中の課外や、これから始まる情報の模試などで共通テストの対策をしなければいけません。本校のように情報の学習時間の少なさを感じている高校は多いはずです。そのような意味でも情報以外の授業でプログラミングを取り入れることは、生徒の経験値を上げる良い機会になると思います。

3　美術とプログラミングの関わり

プログラミングを使用した美術の分野は数多くあります。少し調べただけでも次のような分野が見つかりました。

・メディアアート
・インタラクティブアート
・アルゴリズムアート
・プロジェクションマッピング
・フラクタルアート
・ジェネレーティブアート

プログラミングを学ぶ事で、このような表現に繋がります。近年プログラムで制御された作品、インタラクティブな作品が数多く制作されているのは皆さんがご存じだと思います。こんなの美術では無いと思う方もいるかと思いますが、私は単純に面白いなと思いますし、人の興味を引く表現であると感じます。

4　「Processing」について

授業で使用する「Processing」の特徴です。

・ビジュアルデザインのためのプログラミング
・無料で利用できる
・開発環境を整えるのが簡単
・プログラミングが不慣れの人でも扱いやすい
・結果が視覚的で満足感を得やすい

などの特徴があります。

高校の情報の授業では「１から５までを足す」「偶数か奇数か判別する」といったプログラミングで基礎を学びますが、「Processing」の視覚的な表現はより生徒の興味を引くと思います。東京芸術大学、多摩美術大学、武蔵野美術大学をはじめ多くの美術大学の講義で使用されています。

５　開発環境の準備

「Processing」でのプログラミングを始めるための準備です。

ウェブで「Processing」を調べ、Processing公式サイトを表示します。英語のサイトです。「Download」ページで利用しているOSを選択してファイルをダウンロードします。圧縮ファイルを展開し、ファイルの中にあるアイコンをクリックすればアプリが起動し、プログラムが開始できます。ネットワーク環境によりますが２～３分で環境を整えることができます。

また、スマートフォン、タブレット用のアプリもあり、パソコン版と同様のことができます。

６「Processing」を使った授業実践例

授業のねらい

・メディアアートへの理解を深め、プログラミングを身近なものとしてとらえる
・RGBカラーモデルを理解する
・配置や構成について理解する
・アルゴリズムやプログラミングのスキルを身につける

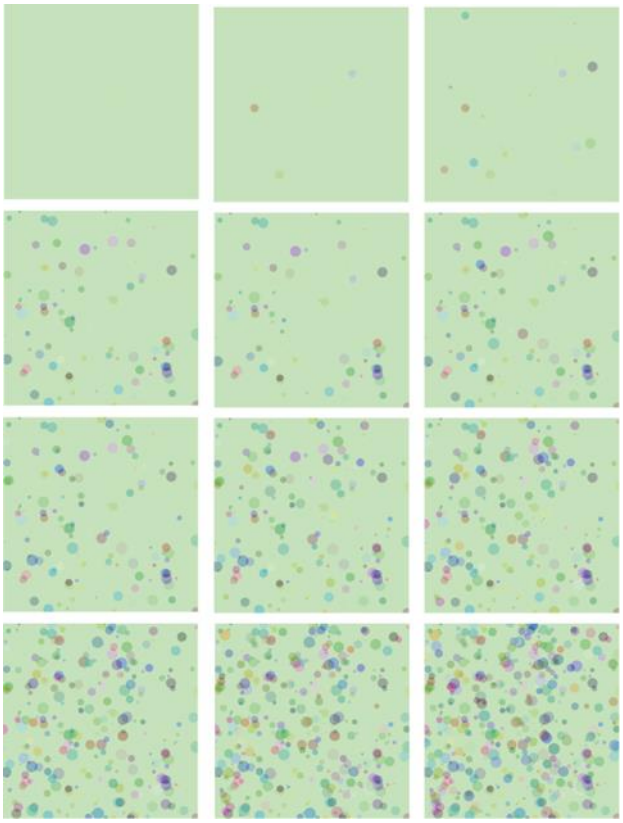
対象　１学年美術選択者（情報Ｉで「python」を10時間程度学習済み）
時間　２時間（45分授業　２時間連続）
場所　情報処理室

［授業の１時間目の流れ］

(1)プリント「丸が増殖するプログラム」を配布
(2)「Processing」について解説
(3)指導者画面を共有し、サンプルコードを入力してみせながら説明。
(4)生徒によるコード入力。机間巡視で正しく入力できているか観察
(5)完成したプログラミングを提出
(6)指導者画面を共有し生徒のプログラミングを実行し、他の生徒の作品を鑑賞

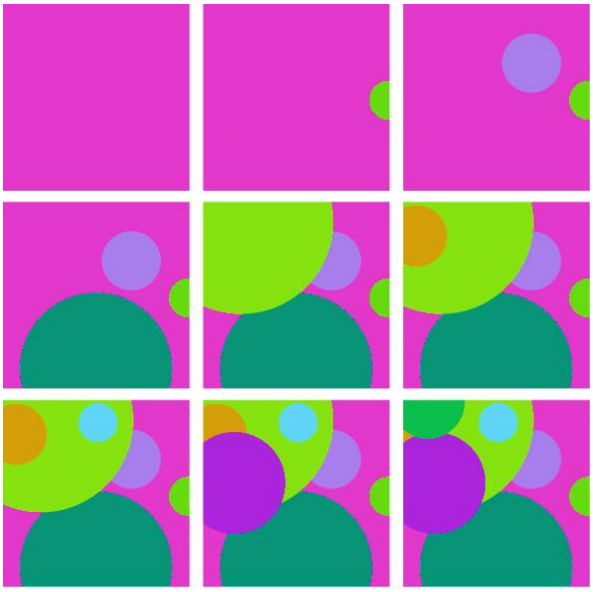
１時間目に行ったのは画面に丸を増殖させるプログラムです。プログラムを実行すると１秒間に60個の丸が増殖していきます。丸の生成される位置、丸の大きさ、色、透明度はランダムに生成されますが、プログラミングのパラメータ（数字）を変えることで、丸の大きさの範囲、色の範囲などを自分で変えることができます。テーマを「自分を表現する」と設定し、意図を持ってパラメータをそれぞれ変化させました。

生徒作品Ａ「自分を表現する」



生徒作品Ａは丸の大きさの範囲を狭くし大きな丸が生成されないようにしています。粒のような丸がじわじわと増えていく設定にしました。丸の色の透明度を上げているので下の丸と重なった部分が混色されています。明度が下がっているので色の混色です。この生徒は粒が増えていく様子を５分程凝視していました。

生徒作品Ｂ「自分を表現する」

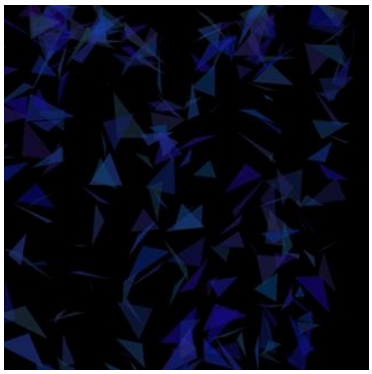


生徒作品Ｂは丸の大きさの幅を広くしたようです。白黒だと伝わりづらいですが不透明度を高くして丸がどんどん塗り重なっていきます。

［授業の２時間目］

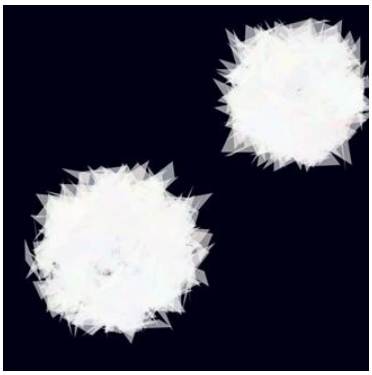
授業の流れは１時間目と同様ですが、より複雑なものになっています。画面上でマウスをドラッグするとマウスポインター周辺に形や色、大きさがランダムな三角形が生成されます。絵を描くアプリを自分でプログラミングするイメージです。このプログラムも三角形の色や大きさ、透明度などを自分で変えることができます。自分の描きたい絵を狙って描くことができるプログラムです。描いた画像を画像で保存するためのコードもつけ、画像で提出してもらうことができます。作品に題名を付けて提出してもらいました。

生徒作品Ｃ「雨」



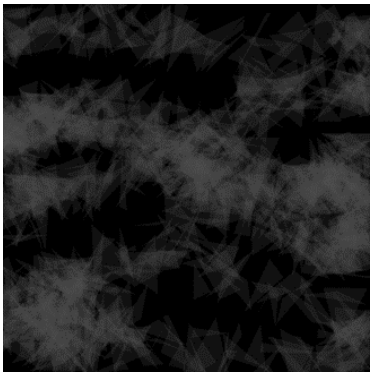
三角形の色を青に統一し、雨の冷たさを表現し、透明度を高くすることで奥行きが出ています。

生徒作品Ｄ「わたげ」



三角形が生成される範囲を広くし、一か所でドラックし続けるとこのような模様ができます三角形という尖った形で、綿毛のような柔らかいものをイメージするのが面白い発想だなと思いました。

生徒作品Ｅ「お先真っ暗」



三角形の透明度をできるだけ上げて、霧に見立てて描いています。題名の付け方のセンスも良いです。

生徒作品Ｆ「オーロラ」

縦長の三角形しか生成されないようプログラムしたのは分かるのですが、斜めに何も描かれていない部分が残っている部分がおそらくプログラム上でこのようになるように設定されているのだと思うのですが、私にはわかりません。たまにこちらの想定を超えてくる生徒がいるので面白いです。

［生徒の様子］

今回の対象生徒が 10 時間程度プログラミングを学習している生徒たちだったので、普段情報の授業で学んでいる 「python」 とは別のプ

ログラム言語でも円滑に授業をすることができました。また、結果が視覚的でわかりやすいためかと思いますが、情報の授業でのプログラミングよりも楽しそうに作業をしていました。うまくプログラミングが動かない生徒に対して、周りの生徒が問題を指摘しあう姿が日頃の学習の成果を感じ、うれしく思いました。

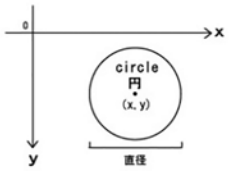
7　まとめ

この教材は、指導者に多少のＰＣスキルが必要です。生徒がこちらの想定を超えることをしてくるからです。しかし、生徒と一緒になってその問題を考えるのも良いとい思います。今回は初歩的なプログラムでしたが、指導者と生徒のスキルが上がればさらに色々な表現ができると思います。引き続き研究していきたいと思います。

１時間目
配布プリント

丸が増殖するプログラム

まずはサンプルコードの通りにコードをそのまま書くこと。動作確認後、
青字のパラメータを０～255の範囲内で変更すること
赤字のパラメータをどういう結果になるか確認しながら変更すること



サンプルコード

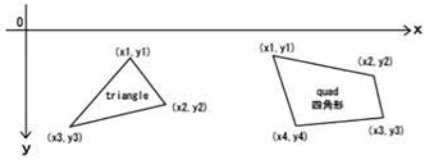
絵を描く準備ための
キャンバスを用意
↓
図形を描く
↓

```
1  void setup() {                                          //一度だけ｛ ｝の中を実行しろ
2    size(1000, 1000);                                     //実行するウインドウの大きさを指定
3    background(255, 255, 255);                            //ウィンドウの背景色を決定（R,G,B）各０～255
4  }                                                       【(R,G,B)＝(yellow,magenta,cyan) 色光の三原色】
5
6  void draw() {                                           //｛ ｝の中をひたすら実行しろ
7    float x = random(0,1000);                             //０～1000までの値をランダムに選び、変数xに代入しろ
8    float y = random(0,1000);                             //０～1000までの値をランダムに選び、変数yに代入しろ
9    float w = random(0,200);                              //０～200までの値をランダムに選び、変数wに代入しろ
10   fill(random(0,255),random(0,255),random(0,255),55);   //図形を塗りつぶせ（R,G,B,）ランダムに０～255までの数値を選べ。透明度も設定しろ
11   noStroke();                                           //図形の輪郭はいらない
12   circle(x,y,w);                                        //丸を描け（x座標,y座標, 直径）
13 }
```

２時間目
配布プリント

三角形で絵を描くプログラム

まずはサンプルコード通りにコードをそのまま書くこと。動作確認後、
青字のパラメータを０～255の範囲内で変更すること
赤字のパラメータをどういう結果になるか確認しながら変更すること
満足できるものになったらENTERキーを押し、画像を保存する
時間が余ったらquad（四角形）で絵を描くプログラムに挑戦する



サンプルコード

絵を描く準備ための
キャンバスを用意
↓
図形を描く
↓
描いた絵を画像で
保存する
↓

```
1  void setup() {                                          //一度だけ｛ ｝の中を実行しろ
2   size(1000, 1000);                                      //実行するウインドウの大きさを指定
3   background(0, 0, 0);                                   //ウィンドウの背景色を決定（R,G,B）各０～255
4  }                                                       【(R,G,B)＝(yellow,magenta,cyan) 色光の三原色】
5
6  void mouseDragged() {                                   //マウスをドラックしている間｛ ｝の中を実行しろ
7    float x1 = mouseX + random(-100,100);                 //マウスの座標のｘ座標の数値の ±100の値をランダムに選び、変数x1に代入しろ
8    float y1 = mouseY + random(-100,100);                 //マウスの座標のｙ座標の数値の ±100の値をランダムに選び、変数y1に代入しろ
9    float x2 = mouseX + random(-100,100);                 //マウスの座標のｘ座標の数値の ±100の値をランダムに選び、変数x2に代入しろ
10   float y2 = mouseY + random(-100,100);                 //マウスの座標のｙ座標の数値の ±100の値をランダムに選び、変数y2に代入しろ
11   float x3 = mouseX + random(-100,100);                 //マウスの座標のｘ座標の数値の ±100の値をランダムに選び、変数x3に代入しろ
12   float y3 = mouseY + random(-100,100);                 //マウスの座標のｙ座標の数値の ±100の値をランダムに選び、変数y3に代入しろ
13   fill(random(0,255),random(0,255),random(0,255),55);   //図形を塗りつぶせ（R,G,B, 透明度）ランダムに０～255までの数値を選べ
14   noStroke();                                           //図形の輪郭はいらない
15   triangle(x1, y1, x2, y2, x3, y3);                     //座標の通り三角形を描け。
16 }
17
18 void draw() {                                           //ひたすら繰り返せ
19 }
20
21 int count=1;                                            //変数countに１を代入しろ
22
23 void keyPressed() {                                     //キーを押したときに｛ ｝の中を実行しろ
24   if(keyCode == ENTER)                                  //ENTERキーを押したとき
25   {
26     save(count+".jpg");                                 //実行画面をjpg画像で保存しろ。名前は１だ
27     count++;                                            //変数countに１を足せ
28   }
29 }
```

みた　ひろし
花巻南高等学校、前沢高等学校を経て、令和２年度から現任校に勤務。

研究紹介

中学校　２学年理科　「気象とその変化」

「気象とその変化」について、気象観測データを基に、分析・解釈する学習の充実に関する実践

岩手県立総合教育センター
主任研修指導主事　**小室　孝典**

１　はじめに

本研究における取組は、「ＩＣＴを活用した学習活動の充実に関する研究（２年次）【２年研究】－教員のＩＣＴ活用指導力の充実に資する実践事例集の作成を通して―」の中学校理科の実践について紹介します。

２　授業実践の概要

本実践は、花巻市立東和中学校の第２学年１クラスを対象に、「気象とその変化」の冬の天気の特徴についての授業実践を行いました。
授業支援ソフトとして、ロイロノートスクールを活用しました。

本時のねらいを「冬の天気の特徴について、気象観測データを基に考察し、日本海側に大雪をもたらす要因について説明することができる」こととし、このねらいを達成するために、次の３つの学習場面で、ＩＣＴを活用しました。

① 導入の場面で、大型提示装置を用いて事象の問題点を想起できるよう、過去のニュース映像を繰り返し視聴した。
② 予想、考察の場面で、気象観測データを配付し、それを基にタブレットを用いて自分の考えを表現できるようにした。
③ 学級全体での発表の場面で、各グループの考えを大型提示装置に投影し、グループの話合いの結果を共有できるようにした。

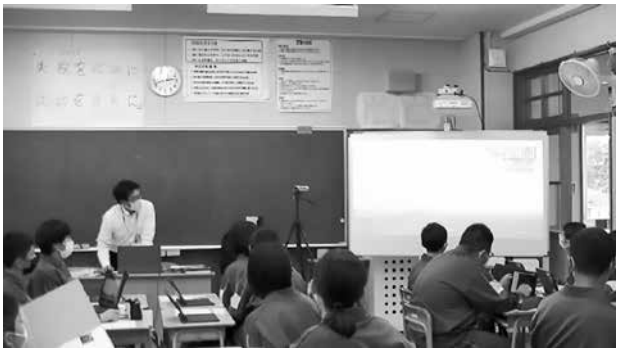
３　ＩＣＴの活用場面

「教育の情報化に関する手引き（追補版）」（2020 年６月）において、学習場面に応じたＩＣＴ活用の分類例（10 の分類例）が示されており、本実践では、「Ａ一斉学習」の中の「Ａ１　教師による教材の提示」、「Ｂ個別学習」の中の「Ｂ１　個に応じた学習」、「Ｃ協働学習」の中の「Ｃ１　発表や話合い」の場面でＩＣＴを活用しました。

４　授業実践

(1)「Ａ１　教師による教材の提示」の場面

大型提示装置を用いて、昨年の日本海側での大雪を記録した際のニュース映像を投影し、事象の様子を全体で共有しました。生徒の記憶にも新しく、想起しやすいもの、事象を自分事として捉えることができるよう意図的に選択した動画を提示しました。



【図１】大型提示装置でニュース映像を視聴する様子

特別な先入観をもたせないように、事前の説明をせずに過去のニュース映像を流しました。生徒が主体的に課題解決に臨めるように生徒の生活経験とのつながりを想起する問いかけをし、生徒の多くが、自身の経験にあることを確認しました。

ニュース映像の中に、大雪の要因に結び付くような表現があったかについて質問し、気付きがあったかを確認したところ、明確な返答がありませんでした。そこで、事象の注目すべき点や疑問点を見いだすことができるように、再度

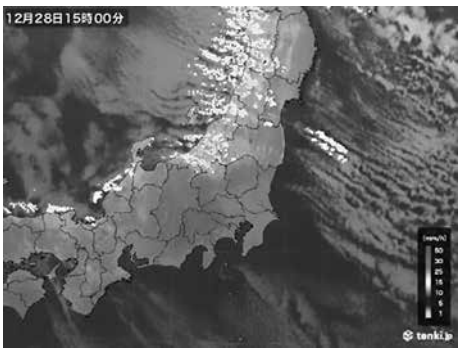
ニュース映像を視聴することにしました。これにより、学級全体で日本海側の大雪の状況と冬の特徴的な気圧配置について共有することができました。

次に、日本海側に大雪が降ったこの時の天気図をスクリーンに提示し、「雨や雪が降るところは、どのようなところでしたか。」と質問しました。生徒は、既習事項を思い出して「前線のあるところで雨が降ります。」、「低気圧のところです。」と答えました。そこで、日本海側の大雪が降っていた地域を指差しながら、前線や低気圧がないことを確認し、実際のニュースで見聞きした気象現象と、既習内容との相違点に気付かせ、問題を明確にして課題提示につなげました（図2）。

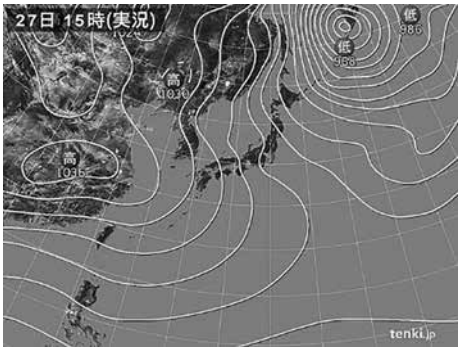
【図２】事象の疑問点を確認する様子

⑵ 「Ｂ１　個に応じた学習」の場面

予想や考察の場面で、課題の解決のために必要な気象要素は何かについて考える必要があります。気象衛星画像（図3）や天気図（図4）、日本海の海水温のデータなど複数の気象観測データ（表1）をロイロノートの資料箱に保存し、その中から事象を説明するための根拠となる気象観測データを選び、日本列島の模式図のワークシート（図5）に大雪の原因について自分なりの考えを図示できるようにしました。



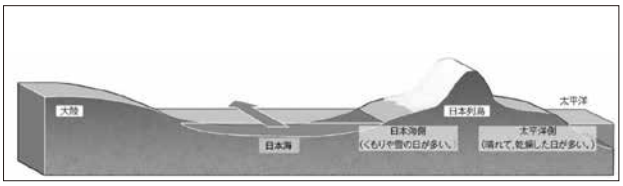
【図３】気象衛星画像



【図４】天気図
出典：tenki.jp「気象衛星画像・天気図」

【表１】気象観測データ一覧

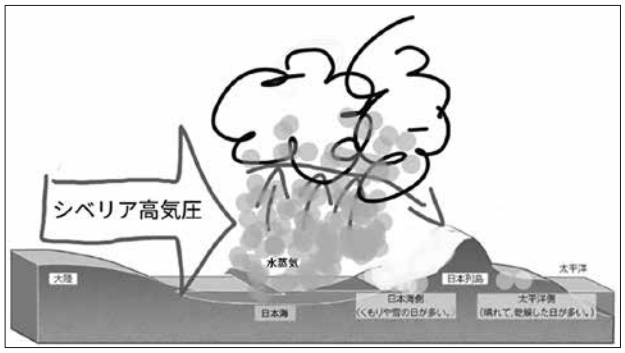
①実況天気
②気象衛星画像（日本周辺）
③気象衛星画像（東北）
④天気図
⑤雨雲レーダー
⑥アメダス（積雪深）
⑦アメダス（風向・風速）
⑧日本海の海水温



【図５】ワークシート（日本列島の模式図）

乾燥した空気がどのようにして水蒸気を含み、上昇気流を生じて雲を形成するのか、その後どのような理由で雲が発達して大雪を降らせるのかについて時間の経過とともに起こる現象について考えられるように生徒の理解を促しました。

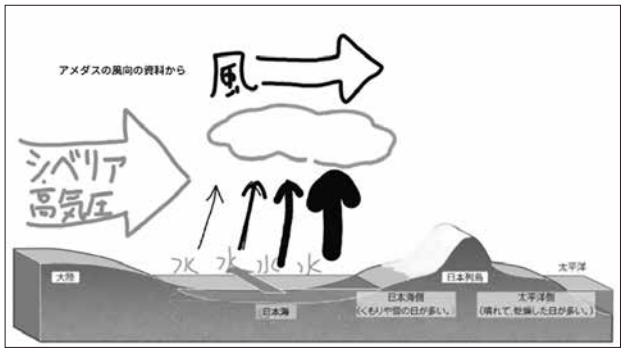
多くの生徒は、シベリア高気圧からの乾燥した冷たい空気に、日本海からの水蒸気が加わり雲が発生する様子を図に書き込んでいました。（図６）。



【図６】日本海から水蒸気がもたらされると示されたワークシート

また、湿った空気が雲を発生させると捉え、湿った空気のかたまりである小笠原気団から水蒸気が供給されるという既習内容を想起する生徒も見られました。

雲が生じる要因として、水蒸気を含んだ空気が上昇することがポイントとなるが、日本海の海水温のデータを根拠として、暖かな海から水蒸気が供給され、その空気が上昇し雲が発生したと説明する生徒も散見されました（図７）。



【図７】暖かな日本海から水が供給され雲ができたとするワークシート

この段階では、時間の経過に伴い、雲がどのように発達していったかについて捉えることができず、課題の解決には至っていない状況が見られました。

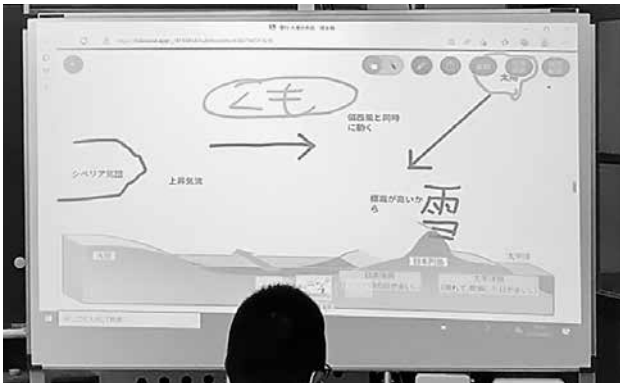
⑶ 「Ｃ１　発表や話合い」の場面

話合いの場面では、タブレットのワークシートにまとめた個人の考えを提示しながら、課題に対する自分の考えを根拠を示しながら、大雪が降る要因についてグループで話し合いました（図８）。

【図８】グループで話し合う様子

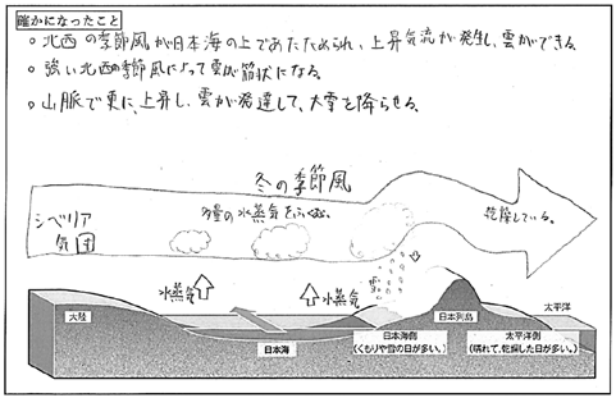
これまでの言葉だけの説明では伝えきれなかったことも、ワークシートに事象の具体的な様子の変化について、絵や矢印などを描画することによって、図解として相手に伝えることができ、より説明に対する理解が促されました。この活動を通して、自身の考えに確信をもったり、逆に考えを修正したりするなどして事象の要因の解明に迫ることができました。

各グループでの話合いを経てまとめた意見を学級全体で共有を図りました。グループの発表者のワークシートを電子黒板に拡大表示し、各グループの代表が発表し、他者からの詳しい説明を受ける場を設けました（図９）。



【図９】拡大表示したワークシート

各グループ代表の発表を聞き、教師から補足説明を受けてから、自分の考えを修正する時間を設け、確かになったこととして学習シートに記入しました。話合いから気付いたことを付け加えて自分の考えをまとめることができました（図10）。



【図 10】学級発表後にまとめた学習シート

5　ＩＣＴを活用したことによる学習の成果と指導上の留意点

【学習の成果】

1　一斉学習について

大型提示装置を使って過去のニュース映像を繰り返し視聴することで、教科書の紙面上の説明だけでは感じ得ない、時間の経過による天気の移り変わる様子なども動画を用いることによって意識させることができました。

2　個別学習について

配付された気象観測データから根拠として活用できるものを自ら選び、それを基に自分の考えをワークシートに書き込む活動を通して、自分の考えを根拠を明確にしてまとめることができ、日本海側に大雪を降らせる要因に迫ることができました。

3　協働学習について

これまで漠然と分からないことを理由にして話合いに消極的だった生徒も、全員に根拠となる気象観測データが共有されていたため、それらが思考するきっかけとなり、全ての生徒が自分なりの考えを持つことができました。グループでの話合いでは、自分の考えと他者の考えを比較し、自分にない捉えをした生徒に質問をしながら自分の考えを修正し、課題の解決に向かおうとする姿が見られました。

【指導上の留意点】

1　時間の経過に伴う気象要素の変化を捉える工夫

今回の実践では、特定の日の気象観測データ（静止画）を資料として用いました。地球領域における理科の見方は時間的、空間的な視点で事象を捉えさせることにあるため、時間の経過とともに様子がどのように変化していくかを気付かせる手立てが必要です。そのため、数日間の動画データを用いた方がより効果的と考えます。時間の経過とともに移り変わる雲の様子や、それに対応する天気図の気圧配置の変化など、事象を捉える視点を明確にしてその後の気象の変化を予想できるように指導していくことが大切です。

2　空間的な広がりで事象を理解させる工夫

冬の日本海側での大雪の要因について考える授業でしたが、日本海側の「山地」に大雪が降るとし、より具体的な地点を示すことが必要でした。生徒たちは、暖かな日本海から水蒸気を得て雲が発生するという捉えは概ねできていましたが、強い季節風によって発生した雲が山地を上昇することでさらに発達し、大雪が降るという見解にまでは至りませんでした。指導改善のポイントとして、日本海上空から、奥羽山脈に至る空間の広がりを意識させ、地点ごとに雲の発達の様子や降雪の状況の違いを考えさせることが挙げられます。

6　おわりに

本実践を通して、生徒の資質・能力を育成するためのＩＣＴ活用はどうあるべきかについて深く考えさせられました。生徒により多くの疑問を感じさせ、事象に課題を見つけられるように効果的なＩＣＴ活用の在り方を考えていくべきと強く感じました。理科教育に携わるすべての先生方におかれましては、様々な領域、単元でＩＣＴを活用していただき、互いに共有して生徒達に還元できることを期待しています。

研究紹介

高等学校　家庭科（家庭基礎）Ｂ　衣食住の生活の自立と設計（3）住生活と住環境

ライフステージに応じた住居の機能性に配慮した学習の充実に関する実践

岩手県立総合教育センター
研修指導主事　**中村　さやか**

1　はじめに

本研究における取組は、「ＩＣＴを活用した学習活動の充実に関する研究（2年次）【2年研究】―教員のＩＣＴ活用指導力の充実に資する実践事例集の作成を通して―」の総論を受けて、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校における国語、算数、社会、地理歴史、理科、家庭、工業、自立活動で実践したものです。

ここでは、家庭の実践内容について紹介いたします。

2　実践の概要

本実践は、岩手県立花巻北高等学校の第１学年６クラスを対象に、家庭科の科目「家庭基礎」の内容「Ｂ　衣食住の生活の自立と設計」の「(3)住生活と住環境」の学習で行いました。

使用ソフト等は、クラウド型住宅図面作成ツールの webcad、Microsoft Teams、Microsoft Forms、YouTube、QRコード（株式会社デンソーウェーブの登録商標）、端末環境は、各校に配備されている Chromebook を使用しました。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　家庭編では、学習のねらいを「家族が安全で快適かつ健康な生活を営む場としての住居について、防火、防犯、耐震などの安全性や日照、採光、換気、遮音、温熱、空気環境、高齢者、障害者などへの配慮など住生活に関わる基礎的・基本的な知識と技能を身に付け、生涯を通して防災などの安全や環境に配慮した住生活や住環境を工夫することができるようにすること」と示しています。

本実践では、協働で住宅図面の作成を行うことを主な実践活動として設定し、学習した知識を活かしながら、ライフステージに応じた住要求を満たすグループの課題を設定し、その課題を解決する住まいについて工夫できるようにしました。また、題材全体を通してＩＣＴを効果的に活用することで、生徒の学びをつないだり、個に応じた学習ができるようにしたりしました。

3　ＩＣＴの活用場面

「教育の情報化に関する手引き（追補版）」（2020年６月）において、学習場面に応じたＩＣＴ活用の分類例（10の分類例）が示されています。本実践は、「Ａ一斉学習」の中の「Ａ１　教師による教材の提示」、「Ｂ個別学習」の中の「Ｂ１　個に応じた学習」、「Ｃ協働学習」の中の「Ｃ１　発表や話合い」と「Ｃ３　協働制作」の場面でＩＣＴを活用していきます。

4　単元の指導計画（全８時間）

時間	学習活動
1・2	・生活の拠点である住居の機能と生活行為について話し合う。 ・住宅平面図について理解する。 ・伝統的な住居と現代の住居について生活様式を基に、現代の暮らしに生かすことができる和の文化について話し合う。
3・4	・日照、換気などに関する環境性能について理解を深め、快適かつ健康、安全な生活を行う場となる住居の条件についてまとめる。 ・住まいとエネルギーの観点から持続可能な環境に配慮した住まいとは何かを考えまとめる。 ・まちづくりと持続可能な住生活について話し合う。 ・次時に活用する webcad の操作について理解する
5・6	・ライフステージによる住まいの変化について考える。 ・20年後、30年後、40年後のライフステージごとの住要求について考え、その条件を満たす住まいについて webcad を活用して間取り図を作成する。 ・年代ごとの住まいの間取りについて、グループごとに作成する。
7・8	・クラス内で、グループ毎にそれぞれ作成した住宅の間取り図について発表を行う。 ・生涯を見通した住生活について考えをまとめる。

５　授業実践

⑴「Ａ１　教師による教材の提示」の場面

ア　実践内容

高機能プロジェクタを活用して、図を見やすく提示したり、動画を見せたりすることで、生徒の理解をより深められるようにしました。

授業の最後には、Microsoft Teams 上の Excel シートに振り返りを入力するようにし、次時には、教師が入力された前時の振り返りを提示しながら、前時の内容を確認しました。

イ　授業の様子と学習の成果

高機能プロジェクタを活用して、図を見やすく提示することで、教師の説明を視覚的にも確認することができ、理解を深めることにつながっていました。また、地震による被害の様子などの解説動画を視聴したことにより、生徒の体験を補うことができ、より実感を伴った理解につなげることができました。

必要な知識について理解を深めることは、日常生活から問題を見いだし、課題を設定する活動にも結び付いたと考えられます。

振り返りについては、クラスごとに単元の学習で１枚の Excel シートを用意し、授業の最後に「本時の振り返り」と「これからしたいことや心がけたいこと」の入力を共同編集で行いました【図１】。

３回目	
今日の学習の振り返りを書きましょう。	これから、したいことや心がけたいことを書きましょう。（学習・家庭）
家族全員が過ごしやすいような間取りについて考えるのが難しかった。 シックハウス症候群というのがあることを初めて知った。	これから自立などして家を買うときにこのような知識を活かして間取りを考えていきたい。
間取りについて考えてみるとその間取りになった理由がわかって面白かった。私の従兄弟の家はキッチンからリビング、２階がガラス越しで見えるのですが、それはキッチンから子供を見守るためなんだなと今日の授業で気づきました。	将来親のと一緒に暮らすだろうから家を建てるなら階段には手すりがある、キッチンから周りが見渡せるなどの家族の特徴に合わせた家にしたい。
ライフステージごとの住居の設計の工夫や重点を置いている造りの違いについて考えることができた。家事の動線をスムーズにする間取りを設計し、廊下をなくすと広く部屋を使うことができ便利だと気がついた。	シックハウス症候群を防ぐために細目に掃除をしたり布団を洗濯して天日干しをして清潔な環境を保っていきたいと思った。

【図１】振り返りの入力シート

振り返りを自分の言葉でまとめる活動を繰り返すとともに、友達の振り返りを見られるようにしたことで、生徒の振り返りの内容が徐々に充実していきました。また、最後には、単元の学習全体を振り返ることができる一覧にもなることから、学習記録を蓄積するという面でも効果的な取組となりました。

前時の振り返りを次時の導入に活用する際、「教師の意図に沿った内容を取り上げたいとき」には、抽出した振り返りを提示し【図２】、「クラス全体の学びの様子を示したいとき」には、テキストマイニングで加工した振り返りを提示する【図３】というように、Excel のデータを、ねらいに沿って活用するようにしました。

【図２】抽出

【図３】テキストマイニング

振り返りを見やすく分かりやすいデータにして提示し、クラスで内容を共有することで、生徒は、多様な考えや価値観に触れることができ、物事を多面的・多角的に捉えながら、自分の考えを整理することにつながりました。

⑵「Ｂ１　個に応じた学習」の場面

ア　実践内容

二つの場面において、１人１台タブレットでＱＲコードを読み取り、生徒が自分で選択した YouTube 動画を視聴できるようにしました。

一つ目は、住生活について学習する場面です。副教材に記載されたＱＲコードから、生徒が興味のある内容を選び、解説動画を視聴しながら学習を進められるようにしました。

二つ目は、webcad を活用して住宅図面を作成する場面です。webcad の操作方法を九つの動画にして、YouTube にアップロードし、そのＵＲＬをＱＲコードの一覧にして配付しました【図４】。作成の過程において、生徒が必要に応じて動画を選択して視聴できるようにしました。

webcadの活用方法動画

	メールアドレス	パスワード
A組	hanakouA@Outlook.jp	●●●●●●
B組	hanakouB@Outlook.jp	
C組	hanakouC@Outlook.jp	
D組	hanakouD@Outlook.jp	
E組	hanakouE@Outlook.jp	
F組	hanakouF@Outlook.jp	

①ログイン	
②ログアウト	
③部屋の設置	
④廊下の配置	
⑤保存と反映	
⑥建具の設置	
⑦家具の設置	
⑧3次元へ	
⑨一覧に戻る	

【図4】生徒に配付したＱＲコードの一覧

イ　授業の様子と学習の成果

住生活について学習する場面では、「通風と換気」、「耐震から免震・制震へ」、「ヒートショック」の三つから選んで動画を視聴しました。生徒は、副教材に記載されているＱＲコードを読み込むことで、自分の興味に応じた学習を展開することができました。自分で選べるようにすることで、専門的な学習内容であっても自分の力で理解しようとする態度につながったと推察されます。

webcad を活用して住宅図面を作成する場面では、生徒は、自分に必要な操作の動画のみを、必要があれば繰り返し視聴しながら、作業を進めていました。また、各自のスマートフォンを使って、隙間時間に webcad の操作方法の確認をすることもできました。教師が授業の中で一斉に操作方法の説明をする必要がなかったため、授業時間の多くを住宅図面作成の活動に充てることができました。

１人１台タブレットとＱＲコードの活用は、生徒一人一人の興味・関心やニーズに合わせた学習を展開すること、活動の時間を確保することに対して、効果的な取組であったと考えます。

⑶ 「Ｃ３　協働制作」の場面

ア　実践内容

クラウド型住宅図面作成ツールである webcad は、ドアや窓の設置など面倒な作業を自動で行うことができるため、思い描く住宅図面を簡単に、短時間で作成できます。また、クラウド型であるため、グループのメンバーがそれぞれの端末から一つの図面を加工することや、同じクラス内の他のグループの住宅図面を閲覧することができます。

本実践では、webcad を活用して、担当する模擬家族の住要求を満たすグループの課題を設定し、その課題を解決する住まいをグループで工夫しながら住宅図面を協働制作しました。

第５・６時にあたる本実践の主となる活動であり、本時の目標は、「ライフステージごとの住要求を踏まえ、機能性に配慮した住まい方について工夫することができる」としました。学習の進め方は次の通りです。

①３～４人のグループを組み、Ａ～Ｃの模擬家族を割り当てる。
②各グループで担当する模擬家族のライフステージに応じた住要求を考慮し、自分たちのグループの住宅図面作成における課題を設定する。
③設定した課題を解決する住まいを工夫し、住宅図面を協働制作する。
④設定した課題を解決するための工夫をまとめる。

各グループに割り当てた模擬家族は、次の通りです。

Ａ　30 代夫婦／幼児１人
Ｂ　40 代夫婦／中学生１人／小学生１人
Ｃ　50 代夫婦／大学生１人／高齢者１人

イ　授業の様子と学習の成果

生徒は、各自のタブレットを用いて webcad を活用し、自分たちの設定した課題を解決する住宅図面を、グループで試行錯誤しながら作成しました【図５】。【図５】で示す住宅図面を作成したグループは、Ｂの模擬家族について、次のように課題を設定し、その解決策を工夫しました。

○課題
「プライベートの空間を取りつつ、コミュニケーションの場を設ける」
○工夫
「トイレなどはリビングを通るようにし、リビングをコミュニケーションの場とする」

【図５】生徒が作成した住宅図面の例

クラウド上にある住宅図面を協働制作する過程において、生徒は、自分たちが設定した課題の解決につながるよりよい住宅図面を作成するために、たくさんの対話を行っていました。次に示すのは、あるグループの対話の様子です。

生徒Ａ：私の家は、両親の寝室が別々だよ。
生徒Ｂ：え、私の家は、一緒だよ。どうして、お父さんとお母さんが別々に寝ているの。
生徒Ａ：たぶん、我が家には小さい弟がいて夜泣きをするからだと思うよ。

住宅図面を作成する活動を設定したことにより、グループの中で様々な対話が行われ、実際の生活をイメージしながら、住居の機能性について考えを深めることにつながりました。

⑷ 「Ｃ１　発表や話合い」の場面

ア　実践内容

グループで検討し、webcad で作成した住宅図面を、高機能プロジェクタで提示しながら発表しました。webcad では、作成した住宅図面を３次元で表示することができるため、その機能を使って、効果的に自分たちの意見を伝えるように指示しました。

発表を聞く生徒には、Microsoft Forms を活用し、聞きながら発表に対する評価やアドバイスを入力することができるようにしました。教師が結果を瞬時に回収して提示したり、生徒の振り返りに使ったりすることができるようにしました。

イ　授業の様子と学習の成果

発表の前には、聞き手にしっかり自分たちの意見を伝えることを目指し、繰り返し検討を行う姿が見られました。発表の際には、３次元で表示する、見せる角度を変える、拡大して見せるなど、聞く生徒に理解してもらうための工夫も見られました。

発表を聞きながら評価やアドバイスを入力するようにしたことで、生徒は、評価の視点に沿って聞くことができ、次に示す感想のように、活動を振り返ったり、改善したりする姿も見られました。

他の班の発表を聞いて、同じライフステージの班の自分たちに考えつかなかったアイディアを知ることができた。また、異なるライフステージの班の発表では、工夫すれば自分たちのライフステージにも応用できる工夫を見ることができてよかった。

６　指導上の留意点

本実践の指導上の留意点として、振り返りの時間を考慮した授業計画を立てること、YouTube 動画の視聴にあたっては、教師が指導する効果も大切にしながら学習場面や内容に応じて組み入れていくことの２点が考えられます。

７　おわりに

本実践を通して、単元の学習の様々な場面でＩＣＴを活用した授業を実践することができました。生徒に資質・能力を育成するために、今後もＩＣＴの活用の在り方について検討していく際の一助となることを期待しています。

【研究成果物】
岩手県立総合教育センターホームページ内の「研究 → 教科研究：技術・家庭」に本実践のまとめを、「研究 → 全教科」に研究全体の報告書と「ＩＣＴ活用実践事例集」を掲載しております。
ＵＲＬ
https://www1.iwate-ed.jp/index.html

学級経営Q＆A

生徒指導の中での学級経営の役割

岩手県立総合教育センター
研修指導主事　**福井　正人**

Q　昨年度、12年ぶりに、生徒指導に関する基本書である「生徒指導提要」が改訂されたと聞きました。改訂の趣旨と、その中で述べられている学級経営の役割について教えてください。　（小学校教諭）

1　はじめに

令和4年12月に「生徒指導提要」が初めて全面改訂されました。子供たちを取り巻く環境が大きく変化する中、「いじめの重大事態や児童生徒の自殺者の増加傾向が続いており、極めて憂慮すべき状態にあること。」「『いじめ防止対策推進法』や『義務教育の段階における普通教育に相当する機会の確保等に関する法律』の成立等関連法規や組織体制の在り方など、前回の提要作成時から状況が大きく変化したこと。」の2点を踏まえての改訂です。

また、生徒指導の目的の実現のためには、「学級・ホームルーム経営の充実」が重要であることも述べられています。

そこで本稿では、生徒指導提要の改訂の趣旨について整理しながら、そこから見えてくる学級経営の役割について述べたいと思います。

2　生徒指導の目的

生徒指導提要では、生徒指導の目的を、

> 児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的にする。

と、述べています。

また、この目的を達成するためには、児童生徒一人一人が自己指導能力を身に付けることが重要です。児童生徒が、深い自己理解に基づき、「何をしたいのか」、「何をするべきか」、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力、すなわち、「自己指導能力」を獲得することが目指されます。

3　生徒指導実践上の視点と学級経営

生徒指導提要には、生徒指導実践上の視点として、

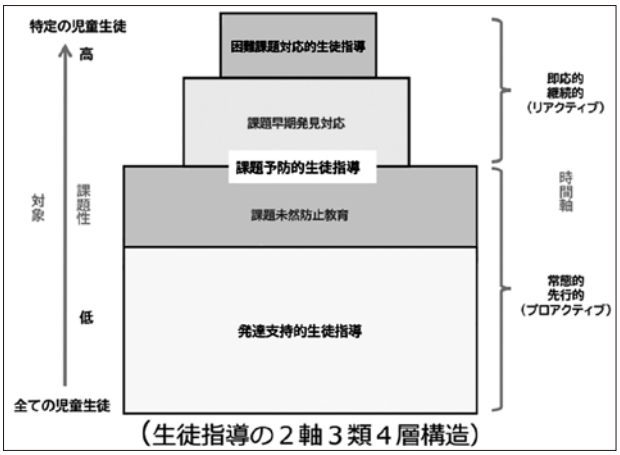
> (1)　自己存在感の感受
> (2)　共感的な人間関係の育成
> (3)　自己決定の場の提供
> (4)　安全・安心な風土の醸成

の4つの視点が示されています。学級経営の焦点は、教職員と児童生徒、児童生徒同士の選択できない出会いから始まる生活集団を、どのようにして認め合い・励まし合い・支え合える学習集団に変えていくのかということに置かれます。失敗を恐れない、間違いやできないことを笑わない、むしろ、なぜそう思ったのか、どうすればできるようになるのかを皆で考える支持的で創造的な学級づくりが生徒指導の土台となります。そのためには、自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる相互扶助的で共感的な人間関係をいかに早期に創りあげるかが重要となります。

4　生徒指導の構造と学級経営

生徒指導は、児童生徒の課題への対応を時間軸や対象、課題性の高低という観点から類別す

ることで、【図１】のように「２軸３類４層構造」に、構造化して捉えることができます。



【図１】生徒指導の重層的支援構造
（生徒指導提要、文部科学省、令和４年）

まず、時間軸に着目すると、右端のように、常態的･先行的（プロアクティブ）生徒指導と、即応的・継続的（リアクティブ）生徒指導の２軸に２分されます。次に、生徒指導の課題性の高低と課題への対応の種類から分類すると、

(1)　発達支持的生徒指導
　全ての児童生徒の発達を支える。
(2)　課題予防的生徒指導
　全ての児童生徒を対象とした課題の未然防止教育と、課題の前兆行動が見られる一部の児童生徒を対象とした課題の早期発見と対応を含む。
(3)　困難課題対応的生徒指導
　深刻な課題を抱えている特定の児童生徒への指導・助言を行う。

の３類となります。これに加えて、生徒指導の対象となる児童生徒の範囲から、「課題予防的生徒指導」を「課題未然防止教育」と「課題早期発見対応」の２つの層に分けて、全部で４つの層で捉えることができます。

生徒指導をこのように構造的に捉えると、学級経営の役割は､常態的･先行的（プロアクティブ）に取り組むものであり、発達支持的生徒指導と課題未然防止教育の実践が中心になることが見えてきます。

５　学級経営の役割

学級経営では、児童生徒自身が学級や学校生活、人間関係をよりよいものにするために、皆で話し合い、皆で決めて、皆で協力して実践することを通じて、友達のよいことろに気付いたり、学級の雰囲気がよくなることを実感したりすることが大切です。自発的・自治的な活動を通して、学級経営の充実を図ることで、お互いを尊重し合う温かい風土が醸成されます｡また、こうした経験をすることが、個々の児童生徒の自己有用感や自己肯定感などの獲得につながります。

これらの実践は、学校・学年及び学級の特性を踏まえた年間指導計画に基づいて取り組まれます。年間指導計画の中でも、特に４月の出会いの時期は大切です。この時期の体験が年間を通した生活集団・学習集団・生徒指導の実践集団の基盤となるからです。

また、一人一人の児童生徒が発達課題を通して自己実現するためには、児童生徒自身による規範意識を醸成することも大切です。児童生徒が規範意識を身に付けることが、自らの安全・安心な居場所づくりへとつながるからです。このような機能の働いた学級集団の中でこそ、安心して自らの意見を述べたり、他者の意見を共感的に受け止めたりすることが可能になります。

以上のようなことを意識して学級経営を行うことで、児童生徒が主体的・自律的な選択・決定を行う際の基盤となる「自己指導能力」を育成することができます。

６　おわりに

「不易」と「流行」という言葉がありますが、「自己指導能力」を育成するという生徒指導の目標は、改訂の前後で一貫して変わっていません。つまり、学級経営は、「児童生徒一人一人の自律を目指す営みである」ということは､「不易」の部分であるということです。「不易」を大切にしながら、私たち教師自身も「自己指導能力」を働かせていくことが大切です。

教科指導Q＆A

中学校理科における授業づくりのポイント
ー探究の過程を重視した授業の流れについてー

岩手県立総合教育センター
主任研修指導主事　**市野川　知代**

Q　探究の過程を重視した理科の授業づくりについて、教師主導で説明が多い授業にならないように、どのように進めていけばよいでしょうか。　（中学校理科担当）

1　はじめに

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説理科編では、「科学的に探究する学習の充実」が示されています。また、岩手県教育委員会令和５年度学校教育指導指針においても、各教科等の指導の要点（理科）において、授業改善に向けて「単元等のまとまりの中で育む資質・能力を明確にし、理科の見方・考え方を働かせた問題解決の活動（小）、科学的に探究する活動（中）を設定すること」となっています。

科学的に探究する学習の充実における視点は、様々ありますが、授業づくりのポイントを紹介していきます。

2　探究の過程を重視した授業の流れについて

探究の過程の重視については、学習指導要領の改訂の際、ポイントとなった部分でもあり、学習過程について例として示されています。(図参照)。学習過程の流れに沿って、ポイントを挙げていきます。

(1)　生徒自身が疑問を持てる課題の設定

主体的に探究活動に取り組むために、生徒自身が自然の事物現象に対して「なぜだろうか」「これは何だろうか」「どのようになるのだろうか」といった疑問を持つことが大切になります。教師が提示する課題ではなく、生徒が疑問を抱くような自然事象の提示の仕方を心がけましょう。

また、日常生活の中にある自然事象の不思議に気づく視点を養うためにも、日頃から疑問に思ったことを書き留めたり、交流したりする場面を設定するなどの工夫も、考えられます。

(2)　仮説の設定から検証計画の立案

仮説の設定は、科学的探究の出発点でありその後の観察・実験の結果に何を期待するかを、明確にする手助けにもなります。

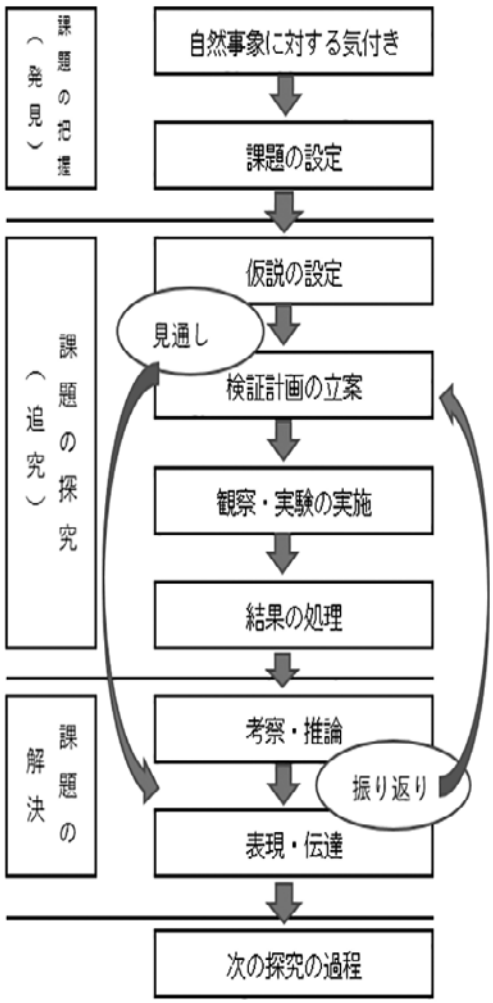


図　資質・能力を育むために重視すべき学習過程のイメージ（例）

目的意識を持った観察・実験を計画し、実施するためには、仮説の設定が重要です。

中には仮説を立てることが難しい場面や、仮説を立てることが難しい生徒もいることが考えられます。仮説は立てられなくとも、予想はできることがあります。「なぜそう考えたのか」「どうしてそう思ったのか」といった教師の補助発問で、仮説を設定する力をつけることが期待されます。

(3) 観察・実験の実施から結果の分析・考察

観察・実験の考察は、生徒の科学的思考力が育成される大切な場面であり、次のような視点での検討が必要となります。

- 結果が何を示しているのか
- 結果に誤差や不確かさはあるのか
- この結果が得られたのであれば仮説は実証されたといえるのか
- 結果の背後にある理由や、科学的原理は何か
- 仮説が棄却されるのであれば、その要因は何であると考えられるか
- 再実験の検討は必要か

このような分析・考察を繰り返し、生徒は科学的思考力を高めていきます。じっくりと考察の時間をとりたいものです。

なかなか考察に取り掛かることができない生徒には、上記のような視点を示し、どの段階でつまずきが見られるのかを見取って、適切な支援をしていくことも必要です。

(4) 探究の学習過程を振り返る

課題設定から考察・結論までの自分の学びを振り返り、何を学んだのか、どこでつまずきがあったのか、新たに生まれた疑問があるのかなど視点を与えて振り返りを行いましょう。振り返りをすることが目的にならないよう、ポートフォリオなどで、自分の学びの変遷を単元ごとにまとめ、自己の変容をメタ認知させることが大切です。

(5) 各学年で重視する探究の過程

学習指導要領では、３年間を通じて計画的に、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成するために、各学年で主に重視する探究の過程を以下の表のように整理しています。

１学年	自然の事物・現象に進んで関わり、その中から問題を見いだす
２学年	解決する方法を立案し、その結果を分析して解釈する
３学年	探究の過程をふりかえる

３　授業づくりで留意したい点

(1) 評価

生徒の探求の過程の中で、どの場面を評価し指導に生かすのか、記録に残すのかを確認して授業づくりを進めていくことが必要です。

(2) 理科の見方・考え方

科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する際に、理科の見方・考え方を意識して学習を進め、継続的に拡充することが大切です。

(3) 一人一台端末の活用

生徒にどのような資質・能力を育成したいのか、その力が身に付いた生徒の姿（ゴールの姿）を明確に持つことが何より大切です。そして、その姿に近づけるためのＩＣＴの効果的な活用の在り方について検討し、積極的に授業に取り入れていきましょう。

４　終わりに

日々の授業づくりを通して、生徒たちが理科での学びを日常生活や社会と関連させたり、どのような原理が生活の中にあふれているかを実感させたりすることで、生徒たちは理科を学ぶ有用感を感じ、身の回りの科学に気付く視野が広がっていきます。これからも、新たな科学への視野を広げるきっかけを作る理科の授業を目指していきましょう。

教科指導Q＆A

高等学校情報科の授業づくりについて
ー「データの活用」の単元からー

岩手県立総合教育センター
研修指導主事　**菅野　浩史**

Q　情報Ⅰにおける授業をどのように組み立てたらよいでしょうか。
（高等学校　情報科担当）

1　はじめに

学習指導要領の改定に伴い、小学校ではプログラミング教育が必修化、中学校技術・家庭科でのプログラミングの内容が拡充、高等学校で情報Ⅰが新設、必修化となりました。令和４年度に当センターが県内の各校に行ったアンケートにおいて､研修として取り上げてほしい教科･科目に関する調査項目では、高等学校情報科が57.5％と最も高い結果となっています。このことから、情報Ⅰへの関心が高かったり、授業を行う点で不安を抱えている先生が多かったりするのではないかと感じています。

2　授業をつくるポイントについて

学習指導要領では各教科･科目の目標が、「何を理解しているか、何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」で再整理されており、各単元で身に付ける資質・能力が示されています。学校教育指導指針では「１単位時間のみならず、長期的な視点で授業を構成する」､「いわての授業づくり３つの視点（学習の見通し、学習課題（学習問題）を解決するための学習活動、学習の振り返り）」を持つことと示されています。

このことから､各単元の内容を把握した上で、生徒に身に付けさせたい資質・能力をどのように授業に盛り込むか計画する必要があります。今回はデータの活用（相関と相関係数､散布図）に視点をあてます。

情報Ⅰのデータの活用の目標は、以下のようになっています。

(1)　データを表現, 蓄積するための表し方と, データを収集, 整理, 分析する方法について理解し技能を身に付ける。
(2)　データの収集, 整理, 分析及び結果の表現の方法を適切に選択し, 実行し, 評価し改善する。
(3)　問題の発見・解決にデータを活用するために, 適切なデータの選択や, 分析の仕方, 解釈の仕方について, 粘り強く取り組み, 試行錯誤を通じて改善しようとしている。

指導と評価の計画や指導と評価の具体例は「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（以下、「指導と評価の一体化」）49ページ以降に示されており、参考にできます。また､データの活用にあたってはどんなデータを利用し授業を行っていくかがポイントになります。活用するデータとしては、教科書や資料集等に掲載してあるデータ、e-Statをはじめとしたインターネット上から取得したデータ、生徒自身のデータとなります。目標に則して、どのデータを活用し、どんな力を身に付けさせるか考えていく必要があります。

3　生徒自身のデータを用いた授業実践例

これまでの私の授業実践を二つ紹介します。二つとも、指導と評価の一体化49ページ第３時「相関と相関係数、散布図」の内容になります。また、実践例１では､「高等学校情報化『情報Ⅰ』教員用研修教材」189ページを参考にした内容となっています。

《実践例１》

評価規準

知識・技能	代表値や相関係数を求めることができる。散布図を作成し、回帰直線の式を表示することができる。
思考・判断・表現	スポーツテストの結果から来年度の50m走のタイムを縮めるための取り組みとしてどんなことがあるかを散布図を比較して考察することができる。

展開

学習活動
1　代表値や相関係数、散布図、回帰直線について理解する。 2　スポーツテストの結果から50m走のタイムと多種目を比較し関係を探り、50m走のタイムを縮める上で取り組む種目。

教員の働きかけ

・代表値について確認し、表計算ソフトを用いて、相関の概念と相関係数の意味に触れながら散布図や回帰直線について説明する。
・50m走と多種目での比較であり、縦軸を50m走で統一する。

代表値や相関係数については、数学Ａで習得するため、数学で習ったものを活用するように計算することや表計算シートの関数を用いて出すこともできます。また、散布図のみを用いて比較した場合には、分布の様子だけでの単純な比較ができないため、散布図の見え方に頼るだけでなく相関係数を見て比較させることができます。

《実践例２》

データの活用②（「指導と評価の一体化」49ページ　第３時　相関と相関係数、散布図）

評価規準

知識・技能	実践例１と同じ。
思考・判断・表現	文字数の推移を利用し、どのくらいタイピングが伸びるかをデータを用いて理由づけることができる。

展開

学習活動
1　実践例１と同じ 2　これまでのタイピング（3か月分）のデータを利用し、学年が終わる3月までに入力できる文字数を予想する。

教員の働きかけ

・実践例１と同じ
・データを用いた予測になるため、必要な数値（最大値、最小値、１回あたりの増加文字数）を説明する。

生徒が予測をする際に、回帰直線（1次関数）を用いたり、代表値を用いたり、どの期間、数値を利用するかで予測結果が異なり誤差が生じます。また、自身の取り組み具合（自分は頑張っているからもう少し伸びそうだなど）はデータを用いた理由としては妥当でないことが注意点として挙げられます。

4　おわりに

大切なことは、生徒が「何を理解しているか、何ができるか」、「理解していること・できることをどう使うか」を意識して組み立てることです。また、生徒自身のデータを使用することで、これまでの取り組みがどうであったか、これからの取り組みをどうすればよいかという主体的な学びにもつながると考えています。

【引用・参考文献】
・文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　情報編
・国立教育政策研究所：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　高等学校　情報
・文部科学省：高等学校情報科「情報Ⅰ」教員研修用教材

架け橋期の学びをつなぐとは
ー学校と園で取り組む際のポイントー

岩手県立総合教育センター
研修指導主事　**髙橋　文子**

Q　私の学校区は、以前から近くの幼稚園と年１回の幼小交流活動を行っており、幼小双方の子供達も交流を楽しみにしています。これまで取り組んでいることに加えて、私の学校では何に取り組んだらよいですか。　（小学校教諭）

1　はじめに

令和４年３月、文部科学省から「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」が示されました。義務教育開始前後の５歳児から小学校１年生の２年間を生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期「架け橋期」とし、学びの連続性を一層重視することが求められています。

連携から接続へと発展する過程の大まかな目安として、５つのステップがあります。

ステップ０　連携の予定・計画がまだ無い。
ステップ１　連携・接続に着手したいがまだ検討中である。
ステップ２　年数回の授業、行事、研究会などの交流はあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
ステップ３　授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
ステップ４　接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

出典：「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（H22 文部科学省）

令和３年度の幼児教育実態調査（文部科学省）によると、県内の約８割の学校がステップ２～３の段階にあります。学校区全てが繋がってはいなくても、既に子供同士・教員同士が交流できる体制がある所が多いです。今実施している取組に加えて、教育課程の編成をどのように行うのかに戸惑いがあるようです。学校や園の先生方に取り組んでいただきたいことは、教育課程編成に向け、互恵性のある話合いをすることです。架け橋プログラムに示されている開発会議を行う際には、行政や他機関との連携も求められますので、ここでは、学校と園の教職員同士の話合いにおけるポイントをお伝えします。

2　期待する子供像の共有

具体的な子供の様子が見えやすい話合いから見直してみましょう。例えば、幼小交流活動を行う際の打合せにおいて、活動内容や一単位時間の流れ等に終始してはいませんか。架け橋プログラムの手引きに示されているように、期待する子供像の共有を意識してみましょう。

幼　次の交流活動のねらいは、「シャボン玉遊びを通して、進んで人や遊びに関わる楽しさを感じる」です。
小　「交流を通して、身近な人との関わりを深め、進んで交流しようとする」です。どちらも相手と関わろうとする気持ちを大事にしたいということですね。
幼　そうですね。今年の５歳児は人数が少ないこともあって大勢の場所とか新しい場所になると緊張して固まってしまう子が多いんです。でも、昨年まで園で一緒に遊んでいた１年生がいるので安心して関われるかなと思って。シャボン玉遊びも大好きなので、遊びに夢中になっているうちに１年生に話しかけてみたり、できたシャボン玉に歓声をあげたり等楽しさを共有する体験ができるといいなと思っています。
小　１年生は学校に来てもらうので張り切って話すと思います。５歳児の緊張している気持ちも感じつつ、その子に合わせて声がかけられたらいいと思います。

指導案に示された期待する子供像を読み上げ「同じですね」、という共有に終わるのではなく、波線で示したように「進んで人と関わっている」とは具体的にどんな姿なのかを話合いを通して明らかにしていきます。実はこのプロセスがとても大切です。ここで、期待する子供像を具体

的な子供の姿として言語化し共有することで、交流活動の準備や流れも変わってくるのです。

3　共通言語は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

先ほどの具体的な子供の姿を語る際に、ぜひ「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を使って話してみましょう。積極的に使うことで共通理解を深めましょう。

> 小　その子に合わせて声をかけるというのは、「道徳性・規範意識の芽生え」につながりますか。
>
> 幼　確かに。相手の視点で考えるという意味ではそうですね。私は、どちらかというと人との関わり方に気付くという意味から「社会生活との関わり」と捉えました。園という社会だけでなく学校とのつながりも子供の中には体験として刻まれるので。
>
> 小　４月に提示していただいた５歳のこの時期の教育課程にも書いていましたね。…

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は子供を見る際の視点として活用できるので、小学校の先生が交流活動で幼児の学びを見取る際にも役立ちます。この視点で考えると、教育課程にも自然と話が向かいます。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は資質・能力が育まれている具体的な姿であるので、この話合いが学びをつなぐ教育課程の編成につながります。

4　授業する際の環境構成や教師の関わりについて積極的に質問し合う

方向性が共有できたら、活動そのものをよりよくするために話し合います。期待する子供像を共有したことがここで生かされるはずです。

> 幼　学校に着いた時の荷物置き場は活動場所から離れていますがどうしてですか。
>
> 小　園児一人ひとりと小学生をペアにしたいんです。荷物置き場から集合場所まで小学生が話をして雰囲気を和ませるようにするので、事前にどんな会話をしたらいいか考えておきます。集合場所にすぐ着いてしまうと、緊張感が先に来てしまうと思うので。子供同士が関わる時間を多く取りたいです。
>
> 幼　それ、いいですね。それなら、シャボン液の置き場は、活動場所の真ん中にしてはどうですか。他のペアとの関わりも生まれるし、お互いが作ったシャボン玉も見えやすいかも。
>
> 小　物の置き場所一つで、関わるきっかけが増えますね。私達の役割分担も、同じように、子供達の関わりが生まれやすい環境の一つになるようにもう一回考え直しましょう。

期待する子供像を共有してから活動の流れを話し合うことで、交流における環境構成や教師の関わりの意味が見えてきます。子供の姿を真ん中にして活動を考えること。それは、学びをつなぐ交流活動そのものです。

5　おわりに

この例にあるように、交流活動における期待する子供像を共有することで、自然と学びの接続を意識した話合いになり、教育課程まで話を広げて考えるようになるなど、教師同士による主体的な学び合いが生まれます。そして、ここでの話合いで、環境構成等について教師一人ひとりに生まれた気付きが、この交流活動だけではなく、お互いの日々の授業や保育を構成する際にも生かすことが望まれます。

幼保小の接続は、古くて新しい、重要な課題です。接続は、子供達のためでもありますが、双方の教師が自分の授業や保育をよりよくしたいと願う気持ちを叶えるヒントも与えてくれます。そして、それが主体的に学び続ける子供の育成につながっていきます。

「架け橋プログラム」の架け橋は、どちらか一方からではなく、双方から架けるものです。互いの教育の在り方や考え方の違いを認め合い、尊重しながら話し合うことが、接続の大事な一歩です。

【引用・参考文献】
・湯川秀樹・山下文一監修（2023）『幼保小の「架け橋プログラム」実践のためのガイド』
・文部科学省（2022）『幼保小架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）』
・岩手幼児教育推進連携会議（2023）『いわて就学前教育振興プログラム』

教育相談Ｑ＆Ａ

色覚多様性について伝えたいこと

ー「赤い字は目立たないよ」･「何色に見える？」って聞かないでー

岩手県立総合教育センター
研修指導主事　**米沢　友夏**

Ｑ　「色覚障害」のある児童がクラスにいます。学校生活で配慮すべき点はありますか。
（小学校４年生　学級担任）

１　色覚多様性について

「ピンクの象」･「緑の犬」･「黒い血」…、あなたの周りの人が、こんな表現をしたとき、あなたはどのように答えますか？

「ピンクの象も緑の犬もいないよ！」

「血が黒いわけないでしょう？」

私たちは、自らの思っていた色と違うことを言う人に対し、つい、上記のような言い方をしてしまいがちです。しかし、実際には、色覚はユニバーサルなものではありません。自分がピンクと呼ぶ色を、他者も同じピンクとして認識しているわけではないのです。さまざまな理由で、色の見え方の異なる人が、日本には500万人以上、世界には数億人以上存在しています。日本では、一般の人と異なる色覚の特性を、長きにわたり「色盲・色弱」と表現していました。しかし、2007年に日本眼科医会が、医学用語リストから色盲・色弱という表現を全て削除したことから、教科書でもメディアでも「色覚障害」や「色覚異常」という言葉が使われるようになりました。「色覚障害」や「色覚異常」は、現在でも使用されている言葉ですが、2017年に日本遺伝学会は、「色の知覚が異なる人は、一般集団中にごくありふれており、日常生活にとくに不便さがない遺伝形質に対して、『異常』と呼称することに違和感をもつ人が多い」との理由から、新用語として

色覚多様性（color vision variation）

という表現を採用し、異常ではなく、多様性の一つとして考えることを提唱しています。

森田（2023）は、「色覚の個性を個人の『障害』とみなす考え方は旧時代の誤りであるとして今日では否定されており、さまざまな色覚の特性は、多様性の一部として再解釈されている」と述べています。文部科学省の報告(2009)では、日本人男性の約５％、女性の約0.2％が、一般の人と異なる色覚の特性をもっているとされています。これを学校に置き換えて考えてみると、クラスの男子20人に一人の割合で、色覚多様性をもつ児童生徒が存在するということになるのですが、平成14年度に小学校の色覚検査が定期健診の必須項目から削除されたこともあり、学校生活において色覚多様性に対する認識が薄れているのが現状です。「色覚を意識したことはなかった」という先生もいらっしゃると思います。

色覚多様性をもつ子どもたちについて、森田（2023）は、「色名を使う会話に齟齬があっても、児童の自助努力によってうまく乗り越えられ」、「自力で対処する術をいつのまにか身に付ける」と述べています。

> 「他の人と見え方が違う色ってだいたい分かるから、僕は『黄色っていうか、黄緑っていうか…』って、どっちの色でも変に思われないように話します。絵の具は塗る前に色の名前を確認しています。４年生になってからは、仲の良い友達に『どこが赤い字？』って聞けるようになりました。」　（色覚多様性をもつ小４男子）

これは、色覚多様性をもつ男子児童の話です。「自助努力」により対処しているとは言え、この児童は、「学校は見えづらい色がたくさんあって大変だよ」とも言っています。私たちは、自分の周りにもこのような児童生徒がいるという前提で、日々の教育活動を行う必要があります。

2　見分けにくい色の組み合わせの例

以下は、色覚多様性をもつ人が見分けにくい色の組み合わせの一例です。一般に、色の面積が小さかったり、色同士が数センチ以上離れていたりすると、より区別が難しくなります。

(1)　濃い赤と黒

赤を「目立つ色」と感じない。

> 見分けにくさのために起こり得ること
> ・電子黒板やパワーポイントで強調された**赤字の部分に気付かない**
> ・ボールペンの赤と黒を取り違える
> ・「赤字の部分の画数を答えなさい」という問いに対し、どこが赤字か分からない
> ・色面積の少ないもの（赤いフレームの眼鏡や血液）を「黒」と表現する

(2)　水色・ピンク・灰色

薄い水色・ピンク・灰色、濃いグレー・濃いピンクなどが見分けにくい。

> 見分けにくさのために起こり得ること
> ・白い名簿に引かれたピンクのマーカーを認識できない
> ・肉の焼き加減が分からない
> ・桜の花びらを「白」と表現する
> ・「男の子は水色（青系）、女の子はピンク色（赤系）」という固定観念をもつ人から、自らが選択した色を修正されたり、からかわれたりすることがある

(3)　赤・緑・オレンジ・茶色

赤・緑、黄色・黄緑、オレンジ・明るい茶色、濃い茶色・赤・緑などが見分けにくい。

> 見分けにくさを感じる場面
> ・充電の色の違いや電光掲示板の色
> ・黒板上の赤チョークやレーザーポインタ
> ・社会科で扱う土地の高低差の色分け
> ・体育館床のオレンジや緑のライン
> ・体育で使用するビブスや鉢巻の色
> ・リンゴやトマトの色
> ・花畑に一輪だけある赤いチューリップ

3　カラーユニバーサルデザインの発想

以下のような工夫・配慮が効果的です。

■色の組み合わせを工夫する

強調表現は、**赤ではなく青**を使用

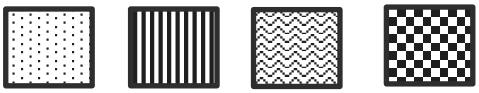
■色＋その他の情報で指示を出す

「３枚目のピンクの用紙を使います」

「右から２番目の赤のボールを取って」

■用紙や文房具に**色名を表記する**

■色以外の情報（フォント・線・形・濃淡・柄）で変化を付ける（下記は柄の変化の例）。



■囲み線や下線を付ける

「ここは 重要 です」　「入るな、危険！」

色刷りの資料は、白黒印刷での情報伝達を念頭に置くと、誰にとっても伝わりやすくなります

4　おわりに―当事者の思い―

> 「僕は色覚補正眼鏡をかけて、初めて紫という色を知りました。『じゃあ今まで何色に見えていたの？』と聞かれることもありますが、僕たちが聞かれて一番困るのは、『何色に見えているの？』という質問です。僕にとっても赤色は赤色で、色は全て、僕なりの色で見えています。それが、みんなにとっての黒と同じように見えるだけです。僕も弟も僕たちなりの色の世界を生きています。それがみんなにとって何色かは分かりませんが…。
>
> 先生たちにも、僕たちの色の見え方について知ってもらい、さりげなくサポートしてもらえたら嬉しいです。」　（兄弟で色覚多様性をもつ中３男子）

【引用・参考文献】
・森田亜矢子 (2023). 色覚多様性のしくみとユニバーサルな教材デザイン ―教材にみるカラーバリアフリーの現状と課題―. 関西大学高等教育研究 , 14, 14-32.
・文部科学省 (2009). 色覚に関する指導の資料

特別支援Q＆A

知的障がい特別支援学級における教科指導の在り方

岩手県立総合教育センター
研修指導主事　**藤井　未央**

Q　知的障がい特別支援学級の担任をしています。教科の指導は個別指導を中心に行っていますが、一斉指導を取り入れたいと考えています。単元づくりの一例を教えてください。

1　はじめに

平成29年に改訂された学習指導要領は、小学校から年次進行で全面実施され、令和４年度は、高等学校で全面実施となりました。この改訂では、特別支援学校の学習指導要領においても、育成すべき資質・能力が、三つの柱で整理され、小学校や中学校との連続性が示されました。このことから、特別支援教育においても、障がいの特性を十分に理解したうえで、教科指導の充実が求められています。

2　単元の見通し

年間指導計画や教科書、各教科等を合わせた指導との関連から、単元を決めます。単元を通して、どんな力を付けたいかを明確にすることが大切です。また、特性上、体験を伴い生活に根差した内容であることは、教科指導も変わりません。子供の興味に寄り添うことで、意欲的に学習に取り組むことができると考えます。

3　実態把握

教科指導も、一人一人の教科における実態把握が必要です。ここで必要な実態把握とは、学習指導要領に示されている学習内容がどの程度身に付いているかを確認することです。特別支援学級は、特別な教育課程を編成することができ、特別支援学校の内容を含め、下学年の内容を取り入れることができます。そこで、在籍学年に関わらず、その子供が学習するべき内容を客観的に判断することが求められます。

例えば、国語科「書くこと」アの内容は、どの程度身に付いているでしょうか。指導内容を並べた【表１】を参考に、チェックすることができます。他の教科等は、下の２次元コードからご覧ください。

4　目標と評価基準の設定

先ほどの表でチェックした内容を基に、一人一人の目標と個別に評価するための基準を設定します。例えば､特別支援学校３段階の内容は、十分に身に付いているが、小学校１・２年生の内容は十分とは言えないと判断された場合、その児童の目標は、小学校１・２年生の内容から、「経験したことや想像したことなどから書くこ

		指導内容	段階・学年
思考力・判断力・表現力等	書くこと	ア　身近な人との関わりや出来事について，伝えたいことを思い浮かべたり，選んだりすること。	１段階
		ア　経験したことのうち身近なことについて，写真などを手掛かりにして，伝えたいことを思い浮かべたり，選んだりすること。	２段階
		ア　身近で見聞きしたり，経験したりしたことについて書きたいことを見付け，その題材に必要な事柄を集めること。	３段階
		ア　経験したことや想像したことなどから書くことを見付け，必要な事柄を集めたり確かめたりして，伝えたいことを明確にすること。	１・２年
		ア　相手や目的を意識して，経験したことや想像したことなどから書くことを選び，集めた材料を比較したり分類したりして，伝えたいことを明確にすること。	３・４年
		ア　目的や意図に応じて，感じたことや考えたことなどから書くことを選び，集めた材料を分類したり関係付けたりして，伝えたいことを明確にすること。	５・６年

【表１】小学校国語科「書くこと」指導内容の一部

とを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にすることができる」となります。また、評価は、文末表現を変えて、「(略)伝えたいことを明確にしようとしている」とします。このように、学習指導要領の文言を使って目標や評価を設定することで、段階や学年に示されている内容に沿って、学習を進めることができます。

5　単元の内容

単元を何時間扱いにするか、また、単元をどのような内容にするかは、基本的には指導者の裁量です。前年度に実施した内容や、書籍などを参考にするのもよいでしょう。ここで大切なことは、単元の「ねらい」です。子供がねらいを達成するために、どんな学習活動が必要か、どんな学習活動ができるか、子供の実態と照らし合わせて考えます。

(1)　各教科

複数名を対象に授業を行う場合、子供一人一人に合わせた学習を準備します。例えば、国語の学習で物語文の内容と登場人物の心情の読み取りをしようとする場合、Ａさんは挿絵から、Ｂさんは文章を自分で読んで、Ｃさんは文章の読み上げを聞いて、などが考えられます。また、読み取る内容も、一人一人に応じて難易度を変えます。このように、方法や内容を変えることで、学年や実態が違っても、同じ教材で学習を進めることができます。【表２】に、国語の単元計画表と内容の扱いの例を示しました。

時	学習内容
1	音読をする、登場人物を確かめる
2	あらすじを確かめる
3・4	登場人物の心情を考える
5・6	ペープサートを作る
7	ペープサートで劇をする

第２時から第４時の、あらすじの確かめ方、登場人物の心情の考え方は、一人一人に応じた内容と方法で行います。

【表２】単元計画表と内容の扱いの例

(2)　各教科等を合わせた指導

例えば、生活単元学習で「収穫祭をしよう」という単元があり、その中で、調理実習（野菜炒め）を行うことを予定しているとします。調理をするために、調味料や水の量の量り方の学習を行う場合、算数として扱うことが考えられます。この場合、単元のねらいは「量の量り方を知り、量ることができるようになること」です。ねらいは学級全員同じですが、何を使って量るか、目盛りをどのように読み取らせるかなど、個に応じた方法になることに注意が必要です。【表３】に、単元計画表と教科との関わりの例を示しました。

時	学習内容
1	野菜を収穫する
2	収穫祭の計画を立てる
3・4	招待状と教室の飾りを作る
5	野菜炒めの作り方を調べる
6・7	野菜炒めを作る、収穫祭をする

作り方を調べる中で、計量が必要だと分かりました。そこで、計量に関わる内容を算数で行うこととしました。

【表３】単元計画表と教科との関わりの例

6　評価

４で設定した、個別に評価するための基準に基づいて評価します。達成された場合は、次の段階や学年の目標へ、十分といえない場合は、同じ目標で繰り返し学習します。しかし、結果だけに終始せず、目標が高すぎたのか、方法や内容が合っていなかったのかなど、原因を探ることが、次の学習につながるものと考えます。

7　ＩＣＴ活用

授業の中で、児童の苦手を補うためにＩＣＴが活用されると効果的です。視覚優位であれば、写真を撮ってメモの代わりにしたり、聴覚優位であれば、読み上げ機能を使ったりすることが考えられます。ＩＣＴを使うことを目的とせず、方法の一つとして活用されることに期待します。

編集後記

◇　「教育研究岩手」は、昭和39年7月の創刊以来、その時々の岩手の教育課題を取り上げ、広い視野から論説、解説をいただくとともに、県内の優れた研究･実践の交流の場としてまいりました。

◇　「教育随想」では、千葉慎也コーチから、ご自身の成長の過程について振り返りながら、新たな世代に「夢」のバトンをつないでいく、その思いについてご執筆いただきました。「論説」として、国立教育政策研究所の千々布先生には、エージェンシーの視点を踏まえて、授業者に求められる主体的な変容について､リフレクションの6段階とともにわかりやすくお示しいただきました。「解説」では、佐々木校長、遠山校長、菅校長、近藤校長から、それぞれの視点で、自校の実践や豊富なご経験を基に､特集テーマを具現化するためのご示唆をいただきました。また「提言」では､コミューン株式会社の高田様から、ご自身の経験をもとに、自ら学び続ける学習者を育成する視点についてご提言いただきました。「実践事例」として、自己の学びの蓄積の活用に着眼したパフォーマンステストの指導や高等学校英語科における単元指導計画の重要性についての実践を紹介いただきました。

◇　令和５年２月に行われた岩手県教育研究発表会では、全体テーマを「新しい時代に必要な資質・能力の確実な育成を目指して －ＩＣＴを活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実現－」として、教育におけるＩＣＴ活用の充実について、東京学芸大学の森本教授からご講演いただきました。主体的で対話的で深い学びの実現に向けたＩＣＴ活用に関わる大きな足場かけをいただきました。

◇　「研究・実践交流」では、小学校キャリア教育、中学校復興教育、中学校部活動指導、ESEQによる保育公開の実践例、高等学校美術における教材開発について執筆いただきました。

◇　最後に、本号を刊行するにあたり、ご多用中のところ快く執筆をお引き受けいただき、玉稿を賜りました皆様に、衷心より感謝申し上げます。また、カメラレポートの掲載に際しまして、全面的なご協力及び貴重な資料をご提供いただきました、一関市立花泉小学校の関係各位に、衷心より御礼を申し上げます。

教育研究岩手　第111号
令和５年12月14日　印刷
令和５年12月14日　発行

発行　岩手県立総合教育センター
〒025-0395
岩手県花巻市北湯口第２地割82番１
電話（代表）　0198－27－2711
ファクシミリ　0198－27－3562
http://www1.iwate-ed.jp/
印刷　有限会社金ケ崎印刷

校章

校章は、旧花泉町の花「桜」をモチーフにしている。７つの点（葯）は、統合前の６校に日形小を加えた７つの学校を表し、和を大切に地域と結び合い、安心して生きる力を育むことができる学校を象徴している。桜の背景には、神話の「八咫鏡（やたのかがみ）」を配し、自分に正直に、明るく元気に成長することを象徴している。

校舎

校舎は２階建てで地域産の木材を随所に使い、閉校した地域の学校を偲ぶ「メモリアルコーナー」、地域の先人に学ぶ「和算のコーナー」がある。環境に配慮した太陽光発電・ＬＥＤ照明・センサー式蛇口・チップボイラー等の設備、バリアフリーに配慮した段差のない昇降口・車いす用エレベーター・多機能トイレ等の設備が整っている。体育施設は、200m トラックと 100m の直線がとれる校庭、25m 8 コースの大プールと小プール、床面に安全性・耐久性に優れたスポーツフロアシートを使用した体育館を備えている。これからの学校教育を行うための設備が十分に整っている。

学校教育目標

「進んで考える子（知）」
「共に助け合う子（徳）」
「元気でたくましい子（体）」

校長　門田　徹

統合校のキャッチフレーズは「夢が花咲き、知の泉わく、地域が結び合うみんなの学校」です。本校には、子ども達の豊かな学びとともにコミュニティの拠点としての機能も期待されています。私たちは、地域との協力関係を築きながら、子ども達が健やかに成長し、地域社会に貢献できるような人づくりを行いたいと考えています。

１年生を迎える会

ＰＴＡ総会

開校式・落成式

一関市立花泉小学校

校　歌

作詞　千葉　健吾
作曲　信長　貴富

一

岩手の南　青い空
見わたす野山の　豊かな緑
松のかわらぬ　深しき色に
新たな歴史を　重ねてゆこう
我らがつなぐ　花泉
我らがつなぐ　花泉小
花泉小学校

二

金流川や須川岳
大地を彩る　実りの恵み
桜　牡丹に　笑顔の花を
明るく未来へ　咲かせてゆこう
真実に生きる　花泉
真実に生きる　花泉小
花泉小学校

カメラレポート　**一関市立花泉小学校**
〒 029-3205　一関市花泉町涌津字下原 304

School Sketches